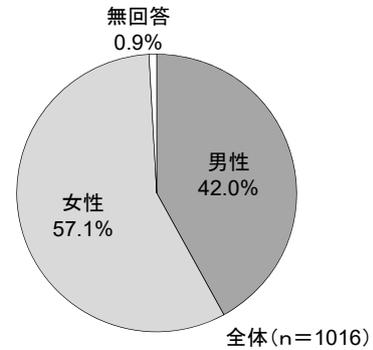


第3 一般県民に対する意識調査

1 回答者属性

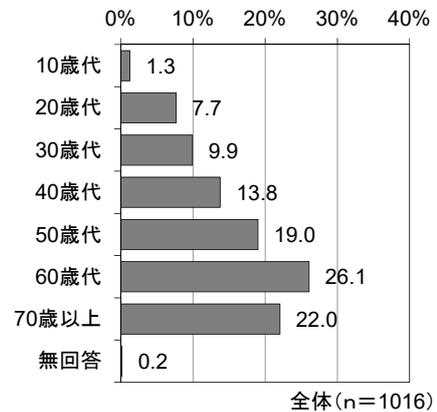
(1) 性別

性別	回答数	%
男性	427	42.0
女性	580	57.1
無回答	9	0.9
有効回答数	1,016	100.0



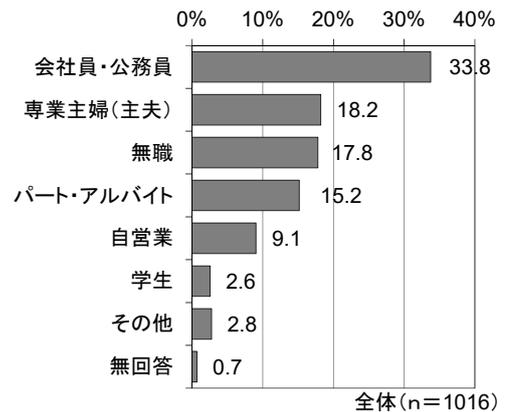
(2) 年代

年代	回答数	%
10歳代	13	1.3
20歳代	78	7.7
30歳代	101	9.9
40歳代	140	13.8
50歳代	193	19.0
60歳代	265	26.1
70歳以上	224	22.0
無回答	2	0.2
有効回答数	1,016	100.0



(3) 職業

職業	回答数	%
会社員・公務員	343	33.8
自営業	92	9.1
パート・アルバイト	154	15.2
専業主婦(主夫)	185	18.2
学生	26	2.6
無職	181	17.8
その他	28	2.8
無回答	7	0.7
有効回答数	1,016	100.0

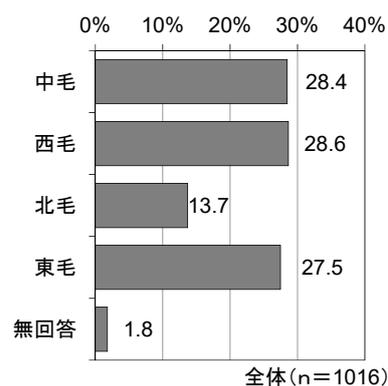


【職業 その他の内訳】

職業	件数	職業	件数	職業	件数	職業	件数
農業	6	会社役員	4	その他	10	無回答	8

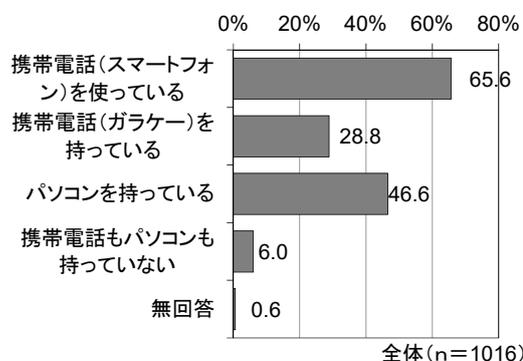
(4) 居住地域

居住地域	回答数	%	該当地域
中毛	289	28.4	前橋市、伊勢崎市、佐波郡
西毛	291	28.6	高崎市、藤岡市、富岡市、安中市、多野郡、甘楽郡
北毛	139	13.7	沼田市、渋川市、北群馬郡、吾妻郡、利根郡
東毛	279	27.5	桐生市、太田市、館林市、みどり市、邑楽郡
無回答	18	1.8	-
有効回答数	1,016	100.0	



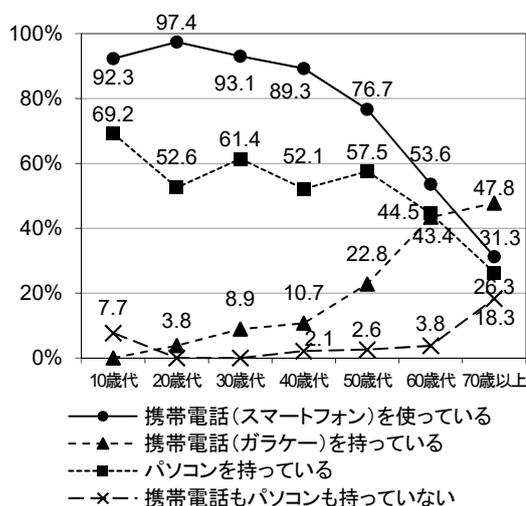
(5) 携帯電話・パソコン保有状況

携帯電話・パソコン保有状況	回答数	%
携帯電話(スマートフォン)を使っている	667	65.6
携帯電話(ガラケー)を持っている	293	28.8
パソコンを持っている	473	46.6
携帯電話もパソコンも持っていない	61	6.0
無回答	6	0.6
有効回答数	1,016	-



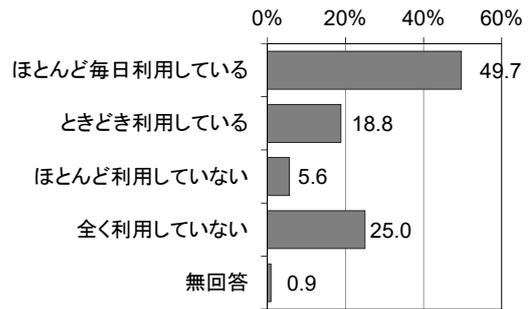
携帯電話・パソコン保有状況	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上
携帯電話(スマートフォン)を使っている	12	76	94	125	148	142	70
携帯電話(ガラケー)を持っている	0	3	9	15	44	115	107
パソコンを持っている	9	41	62	73	111	118	59
携帯電話もパソコンも持っていない	1	0	0	3	5	10	41
無回答	0	1	0	0	2	1	1
有効回答数	13	78	101	140	193	265	224

※年代不明を除く



(6) インターネット利用状況

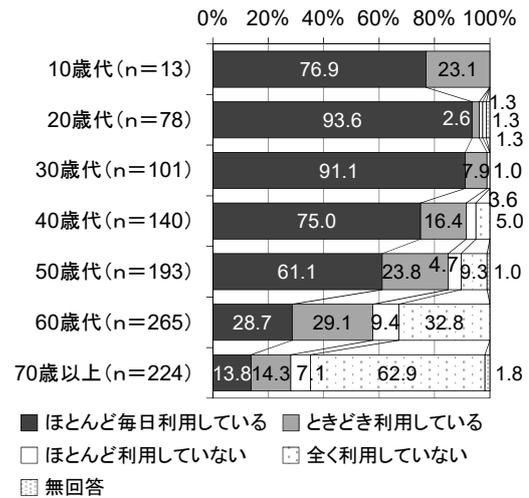
インターネット利用状況	回答数	%
ほとんど毎日利用している	505	49.7
ときどき利用している	191	18.8
ほとんど利用していない	57	5.6
全く利用していない	254	25.0
無回答	9	0.9
有効回答数	1,016	100.0



全体 (n=1016)

インターネット利用状況	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上
ほとんど毎日利用している	10	73	92	105	118	76	31
ときどき利用している	3	2	8	23	46	77	32
ほとんど利用していない	0	1	1	5	9	25	16
全く利用していない	0	1	0	7	18	87	141
無回答	0	1	0	0	2	0	4
有効回答数	13	78	101	140	193	265	224

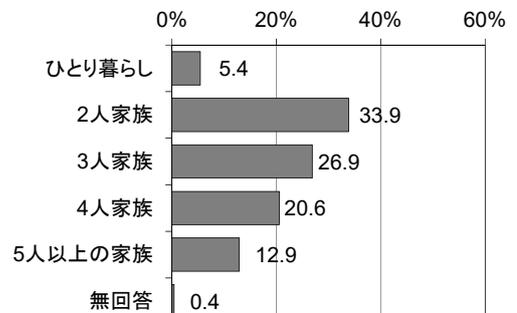
※年代不明を除く



■ ほとんど毎日利用している ■ ときどき利用している
□ ほとんど利用していない □ 全く利用していない
▨ 無回答

(7) 同居者数

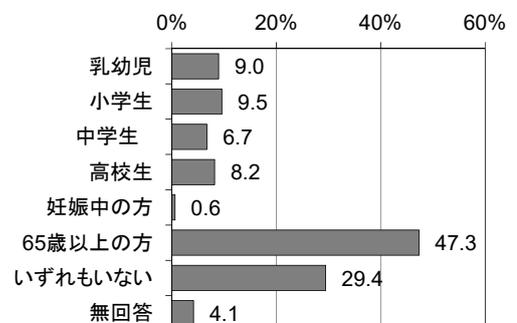
同居家族	回答数	%
ひとり暮らし	55	5.4
2人家族	344	33.9
3人家族	273	26.9
4人家族	209	20.6
5人以上の家族	131	12.9
無回答	4	0.4
有効回答数	1,016	100.0



全体 (n=1016)

(8) 同居家族 (同居している人すべて)

同居家族	回答数	%
乳幼児	91	9.0
小学生	97	9.5
中学生	68	6.7
高校生	83	8.2
妊娠中の方	6	0.6
65歳以上の方	481	47.3
いずれもない	299	29.4
無回答	42	4.1
有効回答数	1,016	-



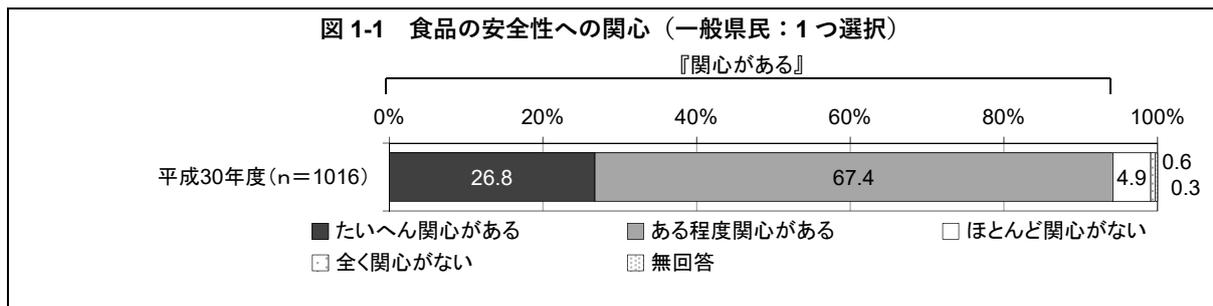
全体 (n=1016)

2 アンケート集計結果

2-1 食品の安全性について

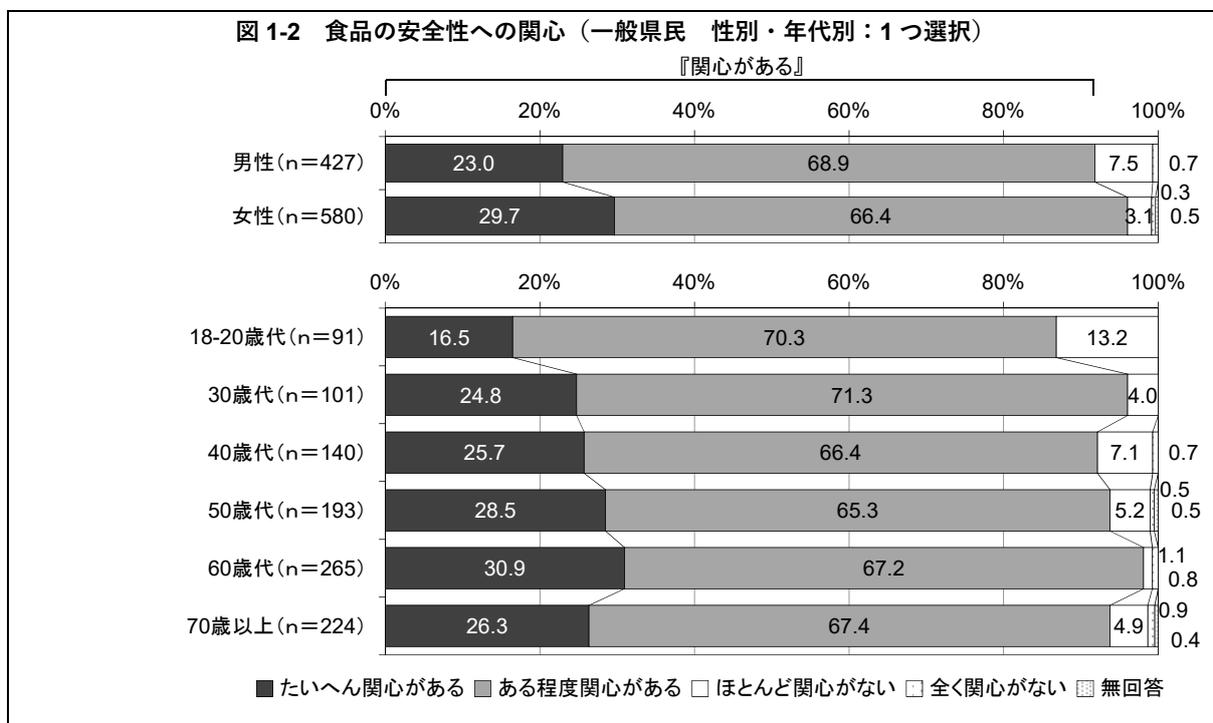
問1 食品の安全性について関心がありますか。(1つ選択)

食品の安全性について、「たいへん関心がある」と「ある程度関心がある」を合わせた『関心がある』とした人の割合は94.2%となっている。



「たいへん関心がある」と「ある程度関心がある」を合わせた『関心がある』とした人の割合は、性別では、男性が91.9%、女性が96.1%となっている。

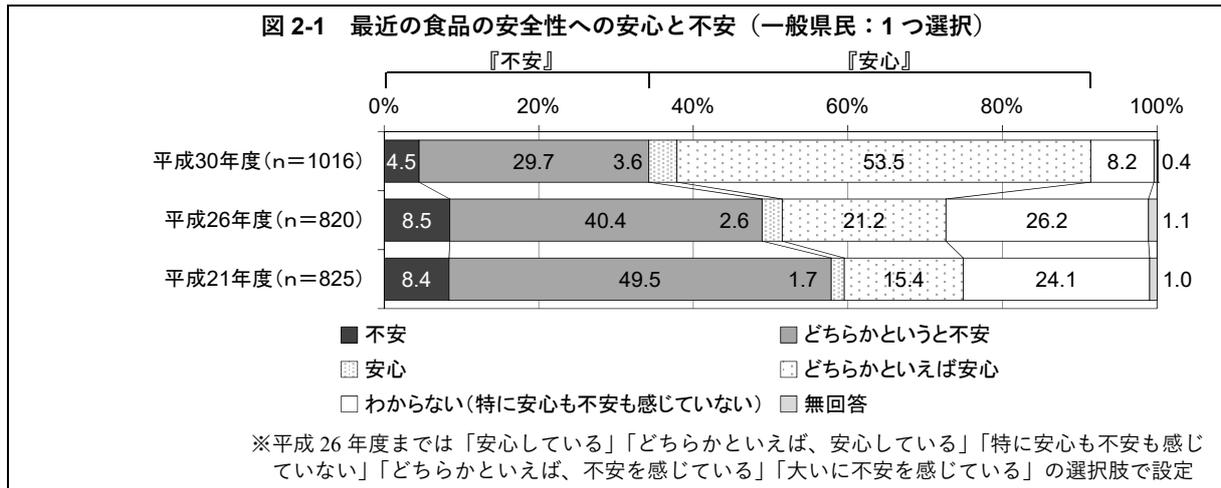
年代別では、『関心がある』とした人の割合は、60歳代が98.1%で最も高く、次いで30歳代が96.1%となっており、18-20歳代が86.8%で最も低くなっている。



問2 最近の食品の安全性について、どのように感じていますか。(1つ選択)

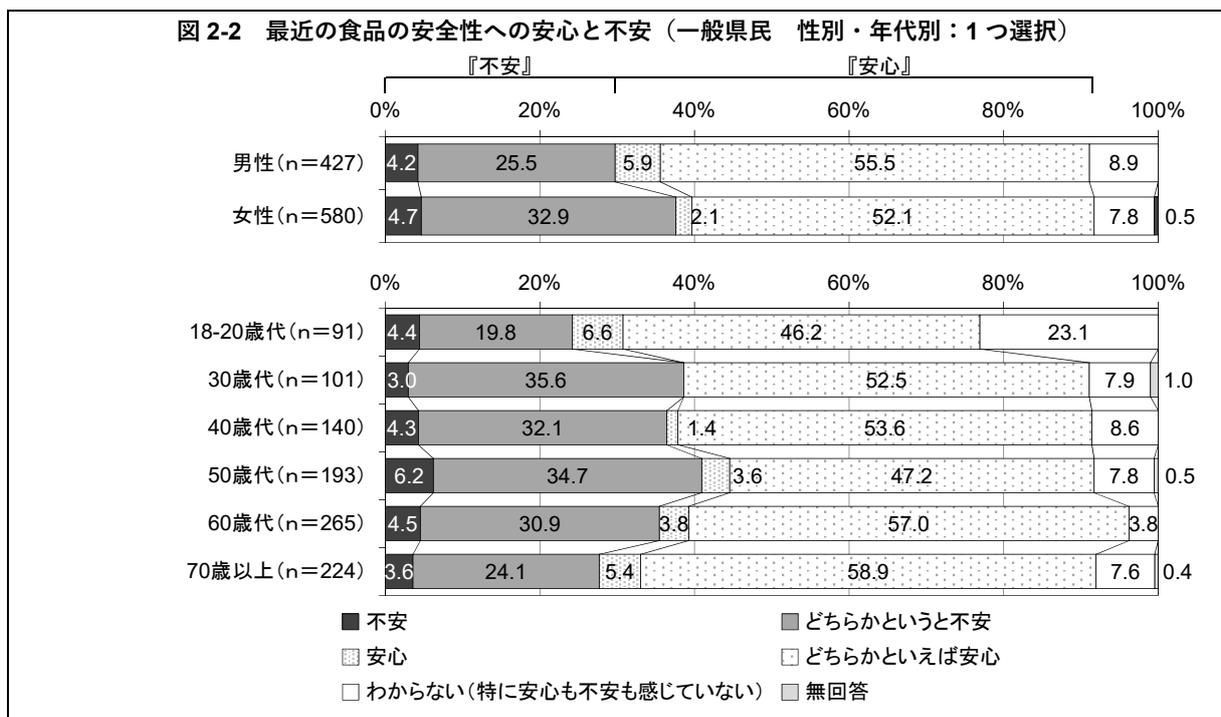
「最近の食品の安全性について感じていること」について過去2回の調査と比較すると、「不安」と「どちらかという不安」を合わせた『不安』とした人の割合は、21年度が57.9%、26年度が48.9%、30年度が34.2%と減少している。

一方、「安心」と「どちらかといえば安心」を合わせた『安心』とした人の割合は、21年度が17.1%、26年度が23.8%、30年度が53.5%と増加している。



性別では、『不安』とした人の割合は、男性が29.7%、女性が37.6%となっている。

年代別では、50歳代が40.9%で最も高く、次いで30歳代が38.6%、40歳代が36.4%となっている。一方、18-20歳代は「わからない(特に安心も不安も感じていない)」が23.1%で他の年代よりも高くなっている。



問3 食品の安全性の観点からお答えください。

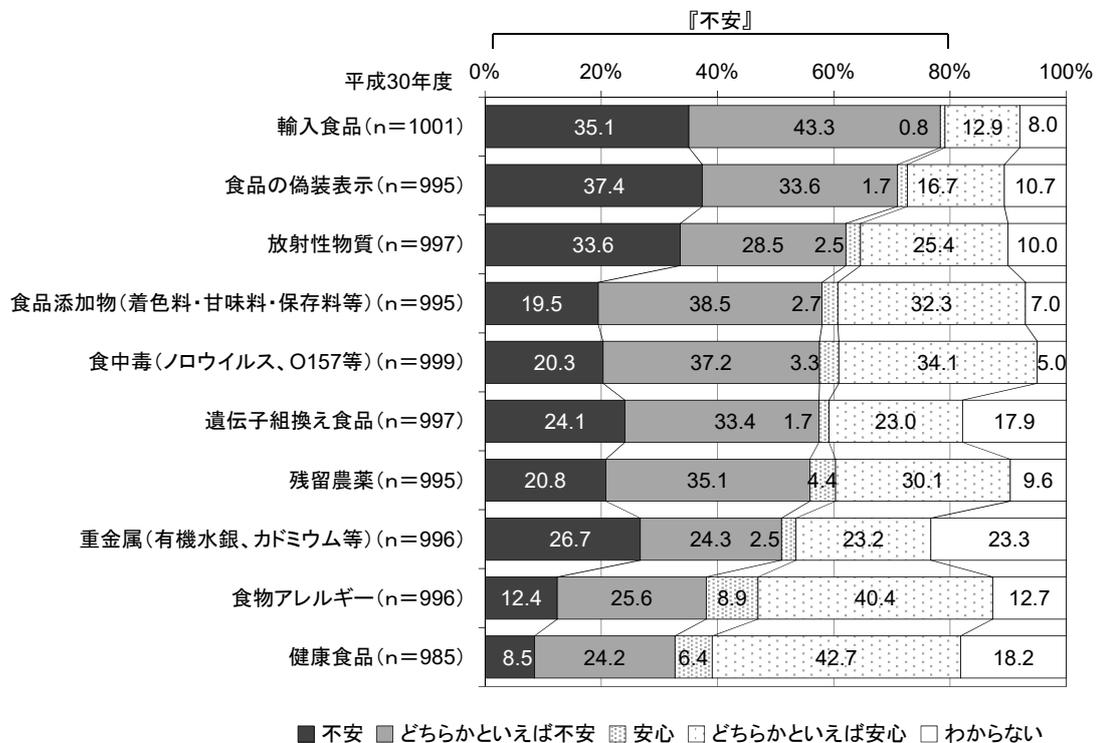
(1) 各項目について、どのように感じていますか。(それぞれ1つ選択)

「最近の食品の安全性について感じていること(問2)」について項目別に見ると、「不安」と「どちらかといえば不安」を合わせた『不安』である人の割合が最も高いのは「輸入食品」78.4%で、次いで「食品の偽装表示」71.0%、「放射性物質」62.1%の順となっている。(図3(1)-1)

前回と比較すると、ほとんどの項目で『不安』である人の割合は減少しており、特に「食品の偽装表示」は前回の80.2%から9.2ポイント、「輸入食品」は86.1%から7.8ポイント低くなっている。

なお、「遺伝子組換え食品」及び「重金属」は若干増加している。(図3(1)-2)

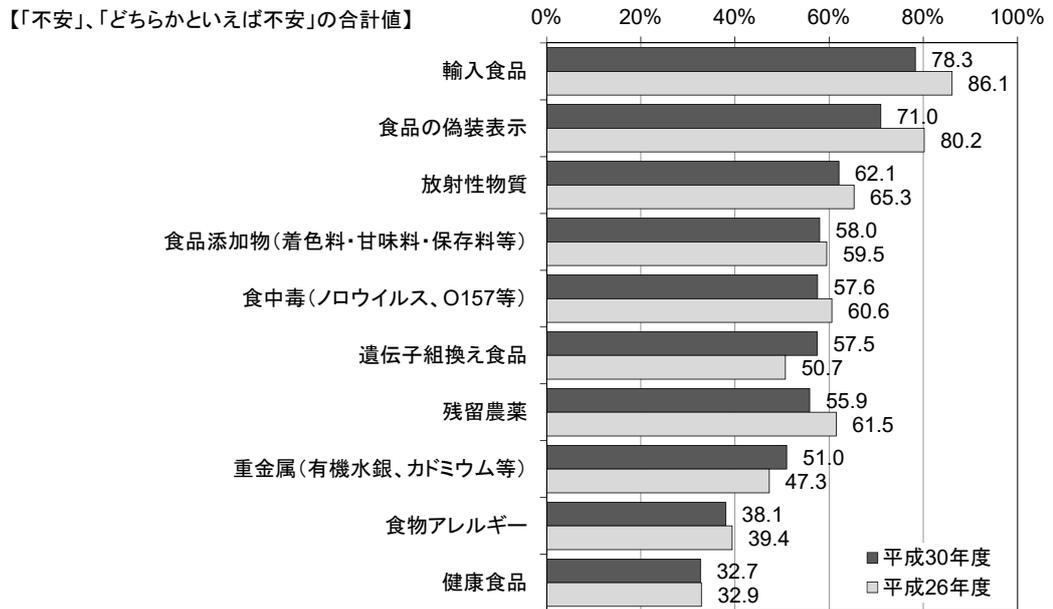
図3(1)-1 項目別に見た食品の安全性への安心と不安(一般県民:それぞれ1つ選択)



※ nは無回答を除く

※ 「不安」と「どちらかといえば不安」の合計値が高い順に表示

図3(1)-2 項目別に見た食品の安全性への不安の状況(合計値『不安』)
(一般県民:それぞれ1つ選択)



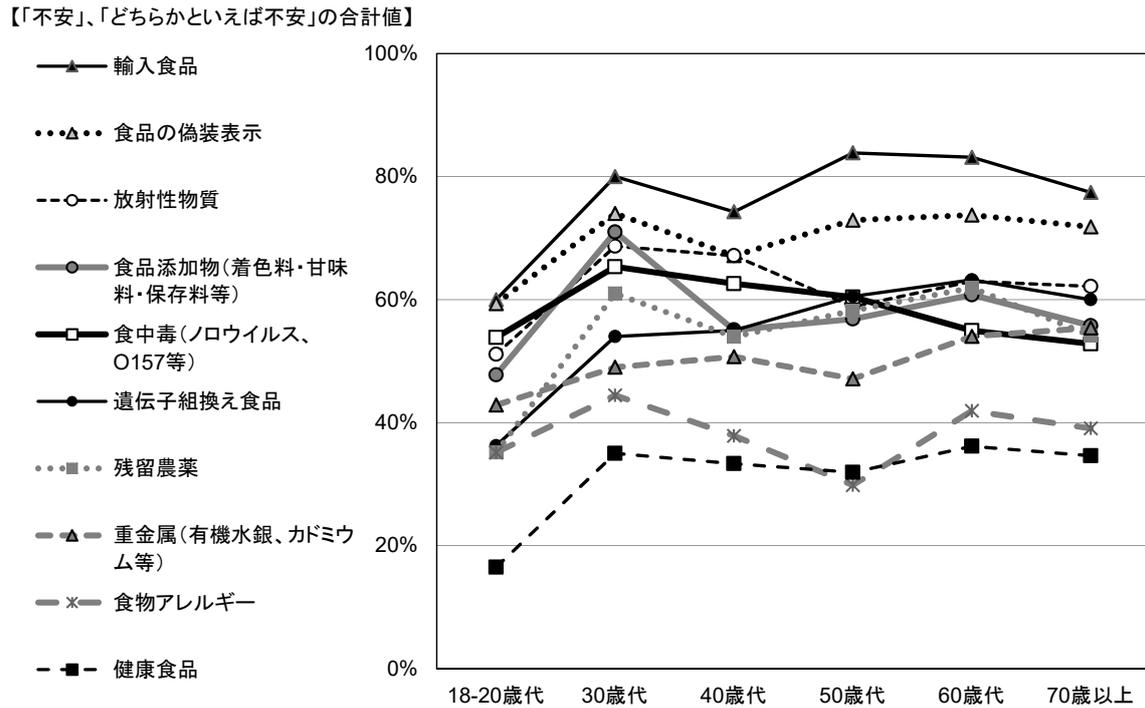
※平成26年度は「食物アレルギー」は「食品中のアレルギー物質」として設定

※nは無回答を除く

※「不安」と「どちらかといえば不安」の合計値が高い順に表示

「不安」と「どちらかといえば不安」を合わせた『不安』である人の割合について年代別に見ると、すべての項目で18-20歳代が最も低くなっている。また、すべての年代で「輸入食品」が最も高く、30歳代が80.0%、50歳代が83.9%、60歳代が83.1%となっている。一方、「健康食品」は50歳代の31.9%を除き、いずれの年代でも最も低く、特に18-20歳代が16.5%で低くなっている。50歳代は「食物アレルギー」が29.8%で最も低くなっている。

図3(1)-3 項目別に見た食品の安全性への不安の状況(合計値『不安』)
(一般県民 年代別:それぞれ1つ選択)



平成30年度	18-20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上
輸入食品	60.0	80.0	74.3	83.9	83.1	77.4
食品の偽装表示	59.3	74.0	67.1	72.9	73.7	71.8
放射性物質	51.1	68.7	67.1	58.9	63.0	62.1
食品添加物(着色料・甘味料・保存料等)	47.8	71.0	55.1	56.8	60.8	55.8
食中毒(ノロウイルス、O157等)	53.8	65.3	62.6	60.4	55.0	52.8
遺伝子組換え食品	36.3	54.0	55.0	60.5	63.2	60.0
残留農薬	35.2	61.0	54.0	58.2	61.9	54.2
重金属(有機水銀、カドミウム等)	42.9	49.0	50.7	47.1	54.0	55.4
食物アレルギー	35.2	44.4	37.9	29.8	41.9	39.1
健康食品	16.5	35.0	33.3	31.9	36.2	34.6

※ nは無回答を除く

※全体で「不安」と「どちらかといえば不安」の合計値が高い順に表示

(2) 不安の理由を選んでください。(2つまで選択)

「不安」と「どちらかといえば不安」を合わせた『不安』である理由について項目別に見ると、「食中毒」は「食の安全に関する事件・事故が発生しているから」とした人の割合が50.3%で最も高くなっているが、「残留農薬」(32.7%)、「食品の偽装表示」(30.3%)、「輸入食品」(29.6%)の3項目は、「生産者や事業者の法令遵守や衛生管理が不安だから」が最も高くなっている。

また、「遺伝子組換え食品」(28.3%)、「健康食品」(27.3%)、「食品添加物」(24.8%)、「放射性物質」(21.8%)の4項目は、「食品の安全性に関する科学的根拠に不安があるから」が最も高くなっている。また、「食物アレルギー」(32.2%)、「重金属」(26.8%)は「食品の安全性に関する自分の知識が不足しているから」が最も高くなっており、「食品の安全性」への『不安』の理由は項目によって異なっている。

前回との比較では、『不安』とした人の割合が特に減少した「輸入食品」、「食品の偽装表示」の2項目について見ると、前回の主な不安の理由であった「食の安全に関する事件・事故が発生しているから」が、「輸入食品」は42.5%から18.4%に24.1ポイント、「食品の偽装表示」は39.6%から27.1%に12.5ポイント低くなっている。

一方、『不安』とした人の割合が前回より若干増加している「遺伝子組換え食品」、「重金属(有機水銀、カドミウム等)」の2項目について見ると、前回の主な不安の理由であった項目が、今回も同様に高くなっている。

表3(2)-1 項目別に見た「食品の安全性への不安」の理由（一般県民：2つまで選択）

		(%)	n	「不安」と「どちらかといえば不安」を合わせた『不安』	法律、条例などの規制が不十分だから	行政の監視指導や食品検査が不十分だから	生産者や事業者の法令遵守や衛生管理が不安だから	食の安全に関する事件・事故が発生しているから	食品の安全性に関する情報提供が不十分だから	食品の安全性に関する科学的根拠に不安があるから	食品の安全性に関する自分の知識が不足しているから	その他	無回答
輸入食品	平成30年度	78.3	784	14.9	20.2	29.6	18.4	17.0	5.5	13.6	2.0	21.9	
	平成26年度	86.1	675	15.0	15.7	35.4	42.5	13.3	3.7	4.9	4.0	15.4	
食品の偽装表示	平成30年度	71.0	706	13.2	27.5	30.3	27.1	8.2	3.7	6.8	0.8	22.4	
	平成26年度	80.2	621	14.5	25.3	31.4	39.6	7.1	1.3	4.5	1.4	18.4	
放射性物質	平成30年度	62.1	619	11.8	18.3	8.4	5.8	20.2	21.8	19.5	3.2	25.4	
	平成26年度	65.3	499	17.8	17.0	9.4	14.0	19.2	21.2	19.2	2.8	21.6	
食品添加物 (着色料・甘味料・保存料等)	平成30年度	58.0	577	11.6	11.3	14.9	5.7	19.2	24.8	24.4	2.1	23.9	
	平成26年度	59.5	459	13.5	10.7	19.0	7.0	19.2	24.0	24.2	2.4	20.5	
食中毒 (ノロウイルス、O157等)	平成30年度	57.6	575	2.4	11.1	34.3	50.3	9.2	2.4	13.4	3.5	19.5	
	平成26年度	60.6	466	2.4	10.5	40.3	34.8	7.5	5.8	11.4	2.1	22.3	
遺伝子組換え食品	平成30年度	57.5	573	11.3	10.1	11.5	3.8	19.7	28.3	26.9	1.0	23.9	
	平成26年度	50.7	393	15.3	8.4	12.2	1.5	17.3	29.5	26.5	1.8	25.7	
残留農薬	平成30年度	55.9	556	11.2	16.2	32.7	7.9	16.9	9.9	16.0	1.8	23.9	
	平成26年度	61.5	482	10.0	13.7	40.0	17.6	17.6	10.0	13.5	2.7	19.5	
重金属 (有機水銀、カドミウム等)	平成30年度	51.0	508	9.3	16.3	12.6	10.0	17.9	15.9	26.8	1.8	25.2	
	平成26年度	47.3	364	11.5	18.1	16.2	11.0	16.2	12.4	26.4	1.9	24.2	
食物アレルギー	平成30年度	38.1	379	3.4	5.5	7.7	17.2	20.1	8.7	32.2	4.5	30.1	
	平成26年度	39.4	303	6.6	6.9	12.2	10.6	21.1	11.2	29.0	4.0	30.4	
健康食品	平成30年度	32.7	322	10.6	16.5	12.1	10.9	16.8	27.3	18.3	1.2	26.4	
	平成26年度	32.9	254	20.5	14.2	13.8	13.0	15.4	26.8	15.4	2.4	22.4	

※各項目における最も高い値を、平成30年度は濃色、平成26年度は淡色網掛け表示

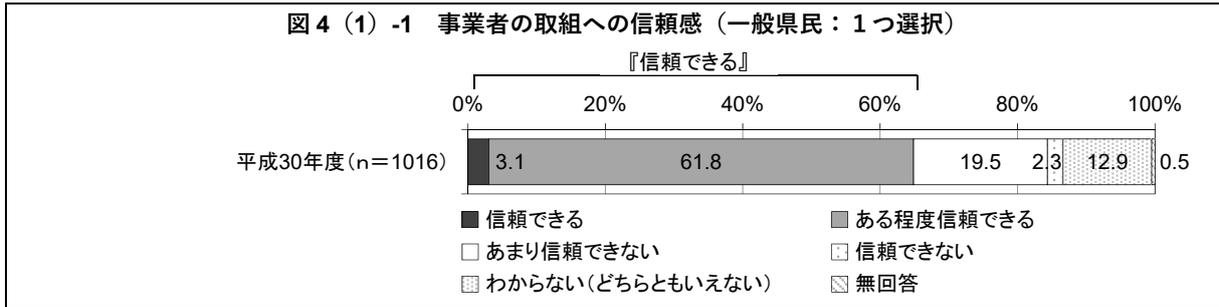
※「その他」の内訳については記述一覧を参照

※「行政の監視指導や食品検査が不十分だから」は、平成26年度では「行政の監視指導が不十分だから」として設定

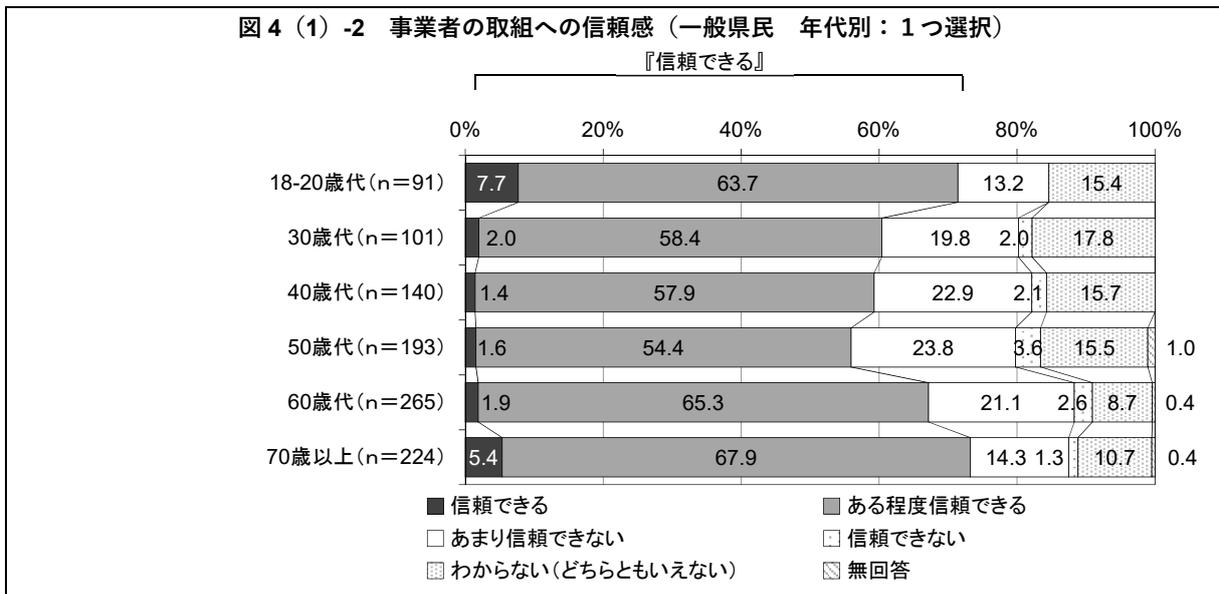
問4 事業者（生産者・食品事業者）の食の安全確保に向けた取組についてお答えください。
 (1) 事業者が行っている取組について、信頼できると思いますか。（1つ選択）

事業者（生産者・食品事業者）の食品の安全確保に向けた取組について、「信頼できる」と「ある程度信頼できる」を合わせた『信頼できる』とした人の割合は64.9%となっている。

一方、「信頼できない」と「あまり信頼できない」を合わせた『信頼できない』とした人の割合は21.8%となっている。



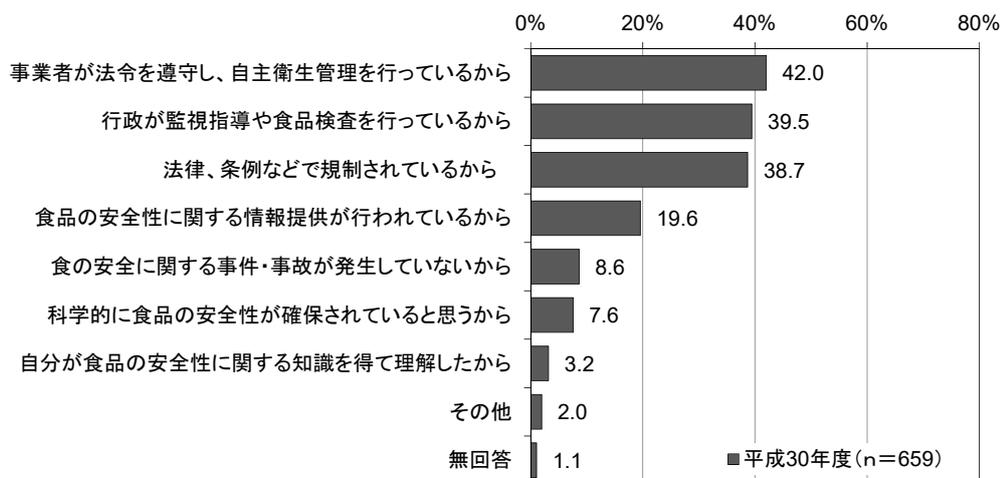
年代別では、「信頼できる」と「ある程度信頼できる」を合わせた『信頼できる』とした人の割合は、70歳以上が73.3%で最も高く、次いで18-20歳以上が71.4%、60歳代が67.2%となっている。一方、30歳代から50歳代は、約56~60%で比較的低くなっている。



(2) (1) において、「信頼できる」「ある程度信頼できる」と回答された方にうかがいます。
その理由はどのようなことですか。(2つまで選択)

「事業者（生産者・食品事業者）の食品の安全確保に向けた取組を信頼できる」理由については、「事業者が法令を遵守し、自主衛生管理を行っているから」とした人の割合が42.0%で最も高く、次いで「行政が監視指導や食品検査を行っているから」が39.5%、「法令、条例などで規制されているから」が38.7%となっている。

図4 (2) 業者の取組を『信頼できる』理由（一般県民：2つまで選択）



【その他の主な内容】

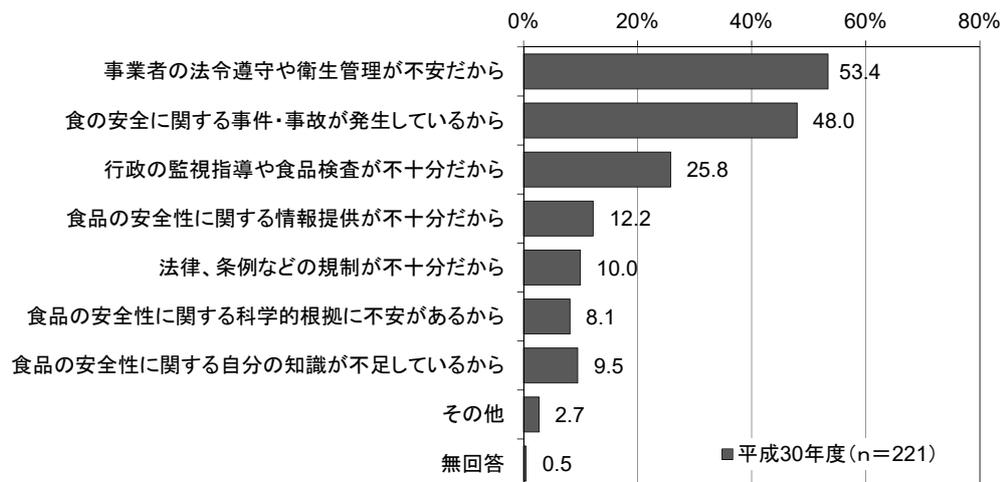
- ・売っているものは安全だと思っているから
- ・農家に良識があると思うから
- ・企業はある程度法律・条例を守った中で製造出荷すると思うから
- ・失礼にあたるから

- ・信頼しないと何も食べられないから
- ・気にしても仕方がないから
- ・失敗するとメディアが大きく取り上げるから
- ・何となく

(3) (1) において、「あまり信頼できない」「信頼できない」と回答された方にうかがいます。
その理由はどのようなことですか。(2つまで選択)

「事業者（生産者・食品事業者）の食品の安全確保に向けた取組を信頼できない」理由については、「事業者の法令遵守や衛生管理が不安だから」とした人の割合が53.4%で最も高く、次いで「食の安全に関する事件・事故が発生しているから」が48.0%、「行政の監視指導や食品検査が不十分だから」が25.8%となっている。

図4 (3) 業者の取組を『信頼できない』理由（一般県民：2つまで選択）



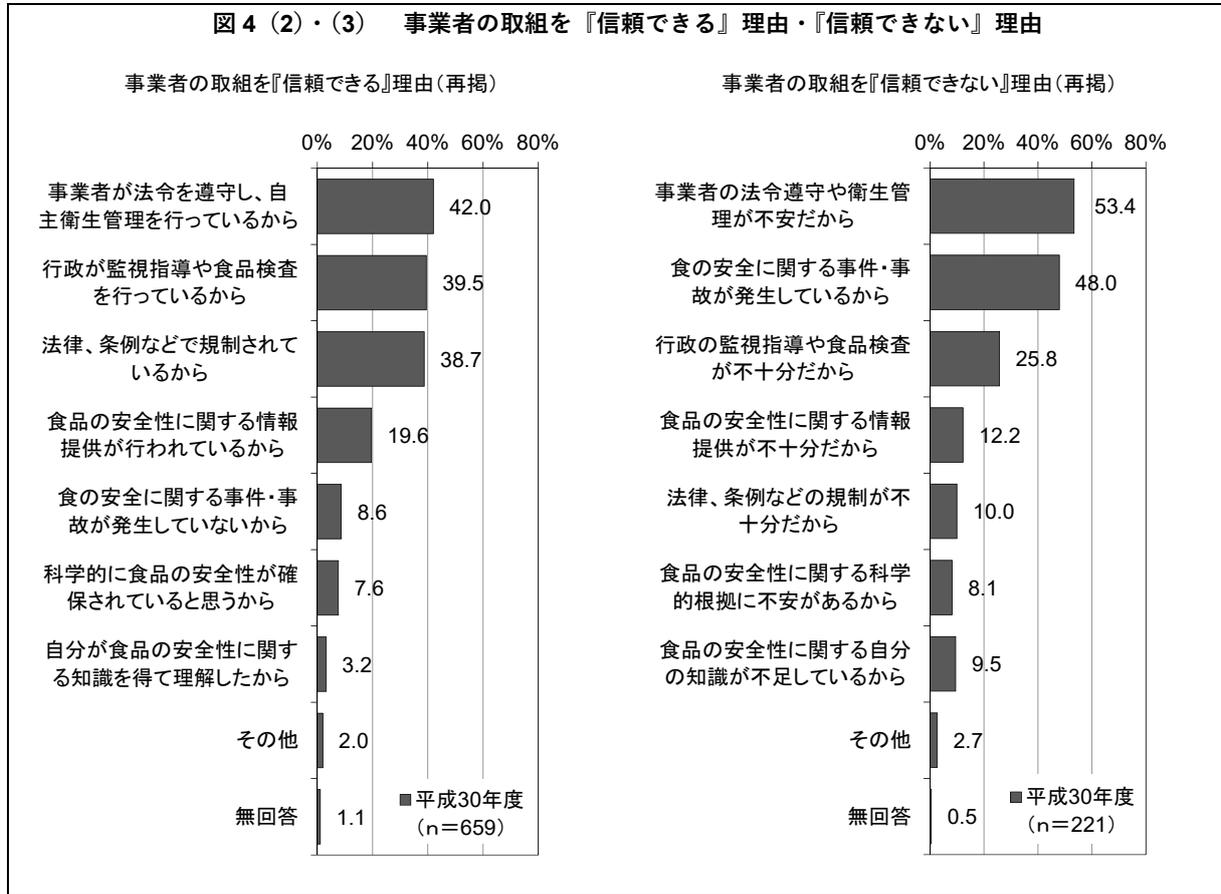
【その他の主な内容】

- ・事業者の損得についての自分の知識が不足しているから
- ・不安なものには、手を出さないから

- ・業者の金もうけのために手をくわえるな
- ・今の政治は、信用できないから

「(2) 信頼できる理由」と「(3) 信頼できない理由」を合わせて見ると、どちらの理由でも「事業者の法令遵守や衛生管理」に関する割合が最も高く、次いで「信頼できる理由」は「行政の監視指導や食品検査」、「信頼できない理由」は「事件・事故の発生」となっている。

図4 (2)・(3) 事業者の取組を『信頼できる』理由・『信頼できない』理由

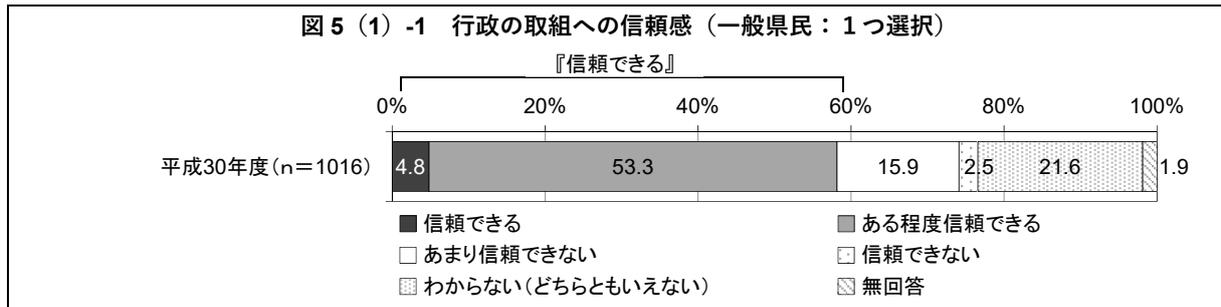


問5 行政の食の安全性に向けた取組についてお答えください。

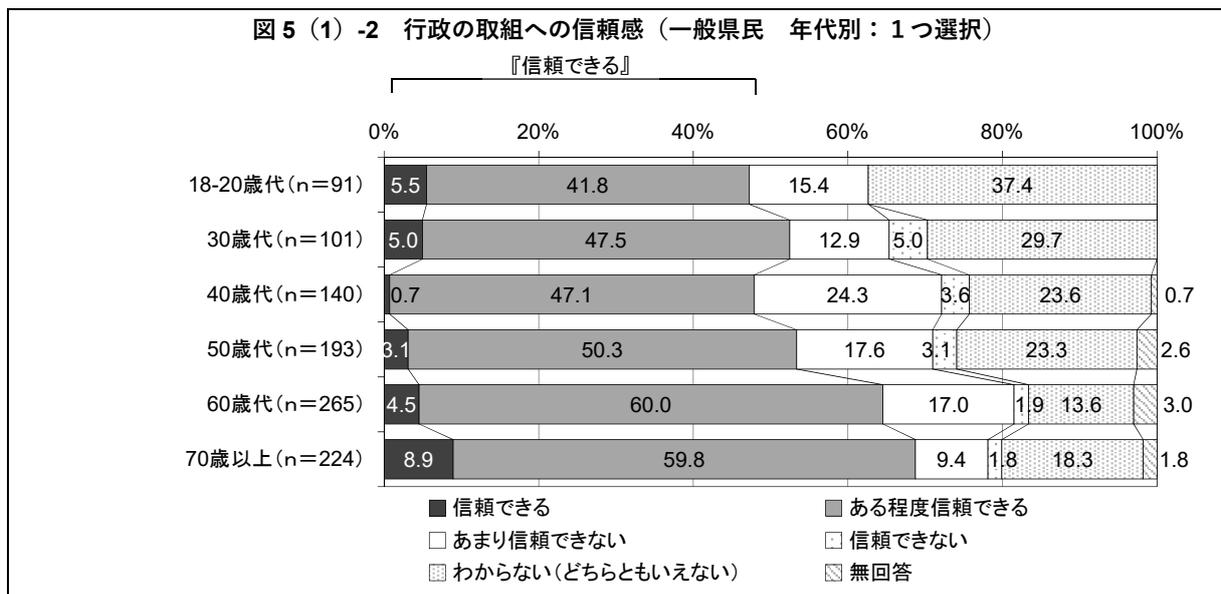
(1) 行政が行っている取組について、信頼できると思いますか。(1つ選択)

行政の食品の安全確保に向けた取組について、「信頼できる」と「ある程度信頼できる」を合わせた『信頼できる』とした人の割合は58.1%となっている。

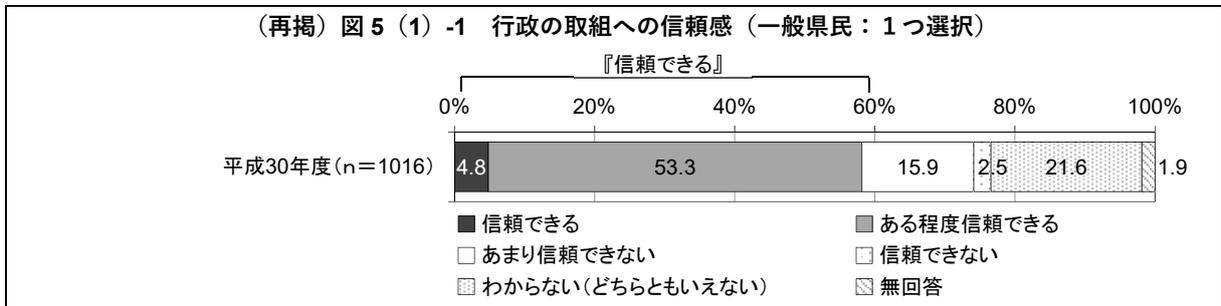
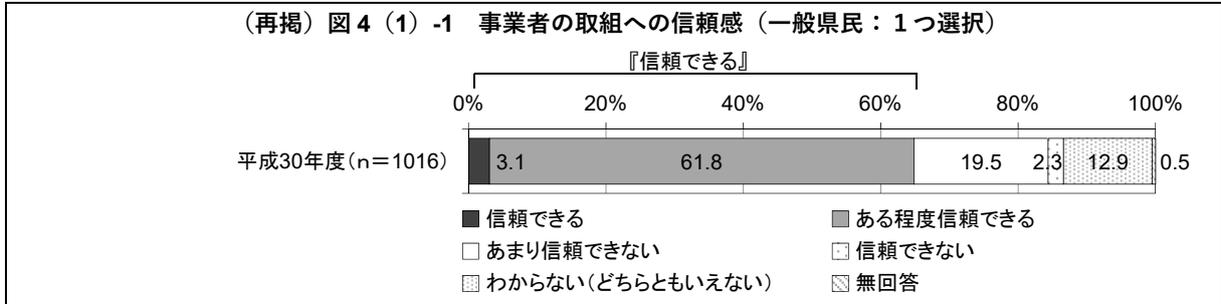
一方、「信頼できない」と「あまり信頼できない」を合わせた『信頼できない』とした人の割合は18.4%となっている。



年代別の『信頼できる』とした人の割合は、70歳以上が68.7%で最も高く、次いで60歳代が64.5%となっている。一方、『信頼できる』が低いのは、18-20歳代の47.3%、40歳代の47.8%となっている。



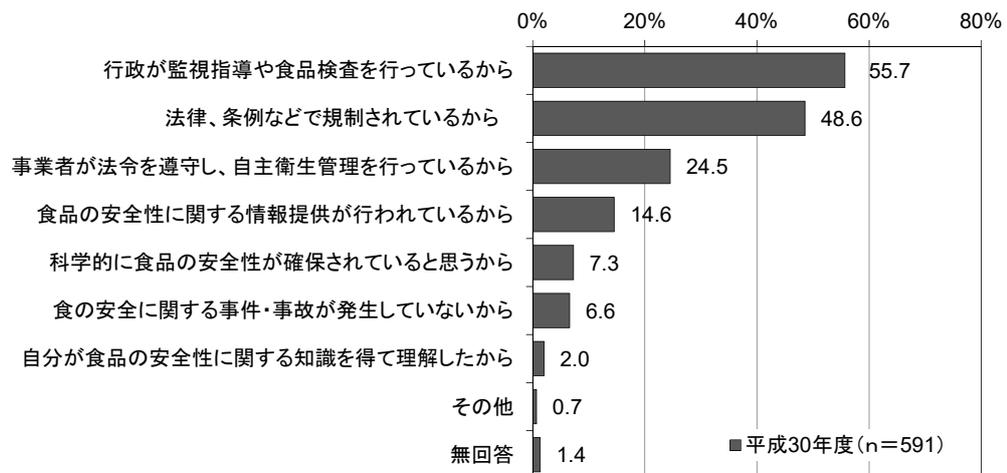
「事業者（生産者・食品事業者）の取組（問4）」と「行政の取組（問5）」を合わせて見ると『信頼できる』とした人の割合は、「事業者（生産者・食品事業者）」が64.9%、「行政」が58.1%で、「事業者（生産者・食品事業者）」が「行政」より高くなっている。また、「わからない（どちらともいえない）」は、「事業者（生産者・食品事業者）」が12.9%、「行政」が21.6%で、「行政」が「事業者（生産者・食品事業者）」より高くなっている。



(2) (1) において、「信頼できる」「ある程度信頼できる」と回答された方にうかがいます。
その理由はどのようなことですか。(2つまで選択)

「行政の食品の安全確保に向けた取組を信頼できる」理由について、「行政が監視指導や食品検査を行っているから」とした人の割合が55.7%で最も高く、次いで「法令、条例などで規制されているから」が48.6%、「事業者が法令を遵守し、自主衛生管理を行っているから」が24.5%となっている。

図5 (2) 行政の取組を『信頼できる』理由 (一般県民：2つまで選択)



【その他の主な内容】

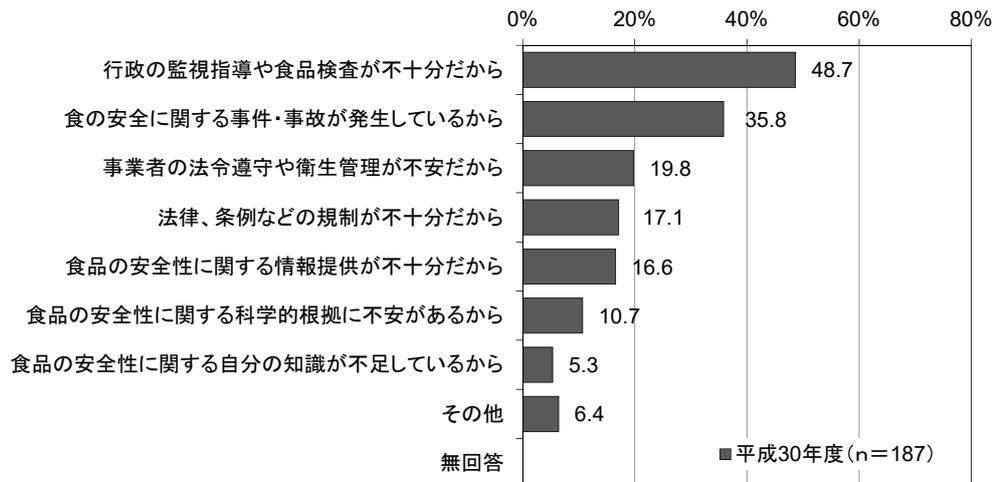
- ・行政が取組をサポートして得になることがないから
- ・食当たりしてないから

- ・何となく信頼できているから
- ・信じたいと思っている。信じているが、時々「えっ」と思うことが発覚するのである程度です

(3) (1) において、「あまり信頼できない」「信頼できない」と回答された方にうかがいます。
その理由はどのようなことですか。(2つまで選択)

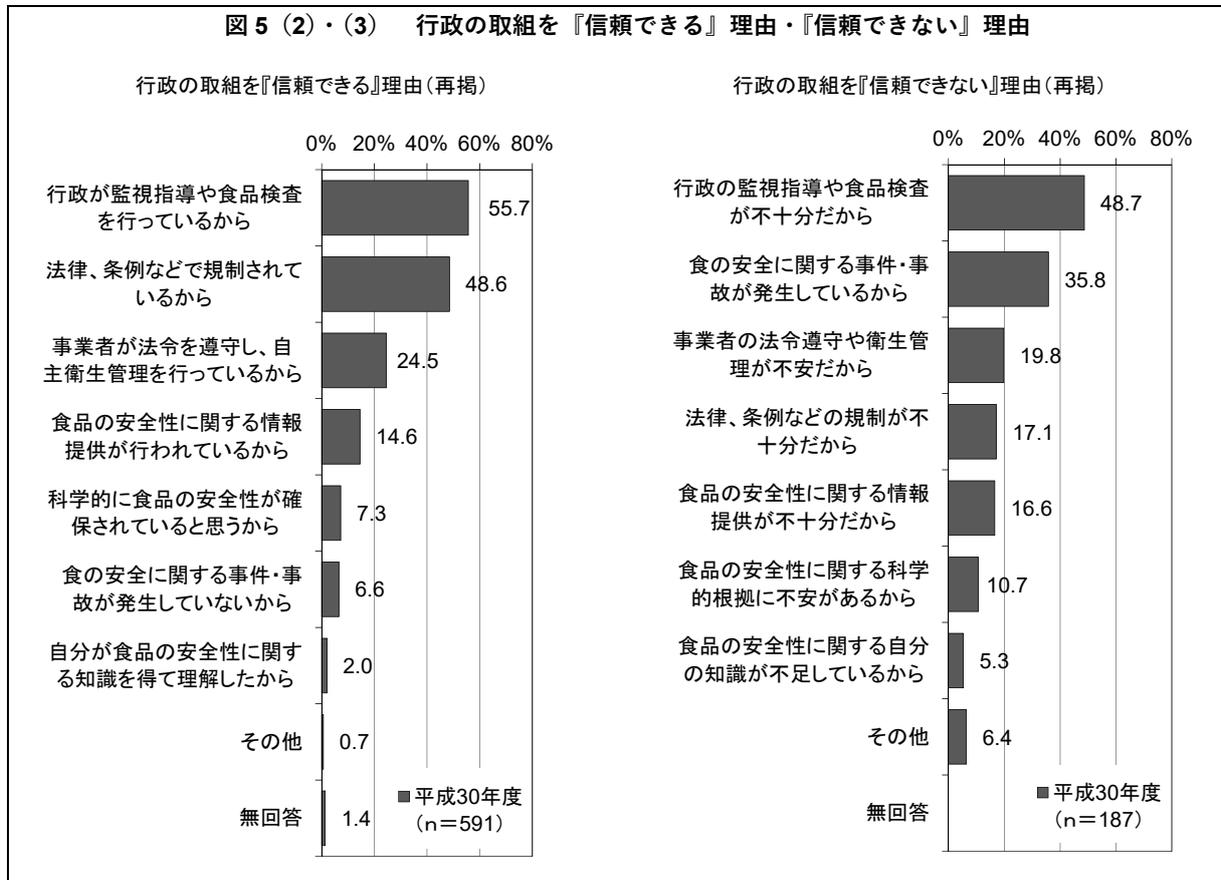
「行政の食品の安全確保に向けた取組を信頼できない」理由について、「行政の監視指導や食品検査が不十分だから」とした人の割合が48.7%で最も高く、次いで「食の安全に関する事件・事故が発生しているから」が35.8%、「事業者の法令遵守や衛生管理が不安だから」が19.8%となっている。

図5 (3) 行政の取組を『信頼できない』理由（一般県民：2つまで選択）



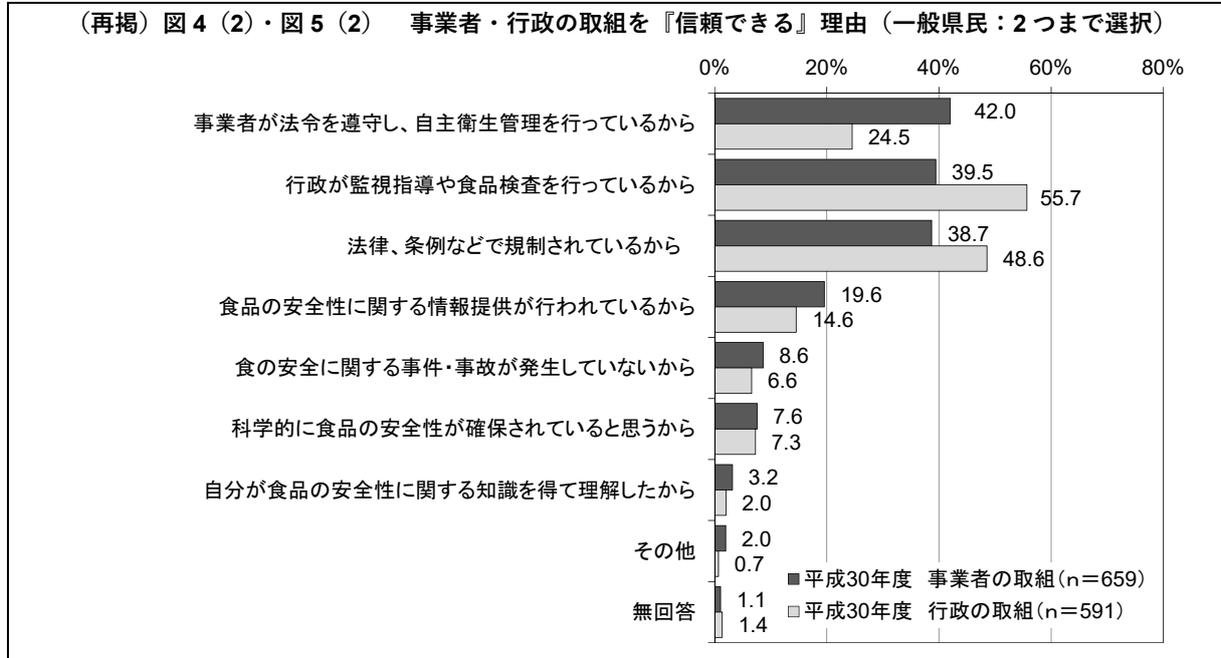
※「その他」への具体的な記述なし

「(2) 信頼できる理由」と「(3) 信頼できない理由」を合わせて見ると、どちらの理由でも「行政の監視指導・食品検査」に関することが最も高く、次いで「信頼できる理由」は「法律、条例などの規制」、「信頼できない理由」は「事件・事故の発生」となっている。



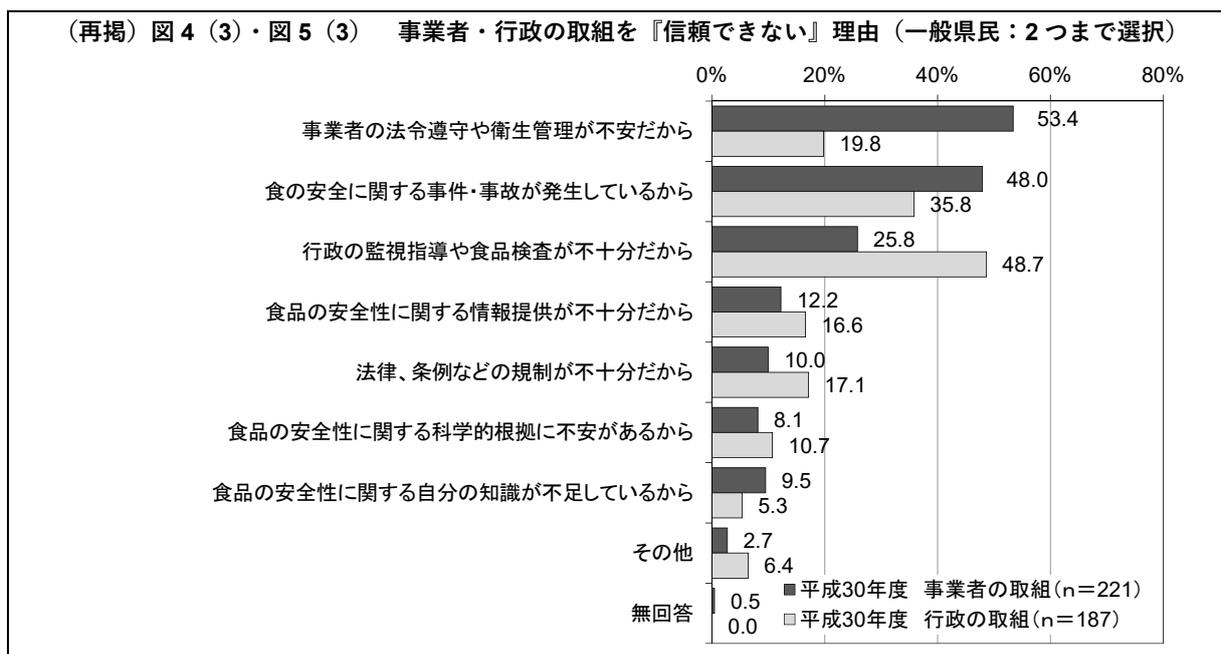
「(2) 信頼できる理由」について、「問4 事業者（生産者・食品事業者）の取組」と「問5 行政の取組」を合わせて見ると、上位3項目は同じ項目となっている。

ただし、「事業者が法令を遵守し、自主衛生管理を行っているから」は「事業者」、「監視指導や食品検査を行っているから」と「法律、条例などで規制されているから」は「行政」が特に高くなっている。



「(3) 信頼できない理由」について、「問4 事業者（生産者・食品事業者）の取組」と「問5 行政の取組」を合わせて見ると、上位3項目は同じ項目となっている。

ただし、「事業者の法令遵守や衛生管理が不安だから」と「食の安全に関する事件・事故が発生しているから」は「事業者」、「行政の監視指導や食品検査が不十分だから」は「行政」が高くなっている。

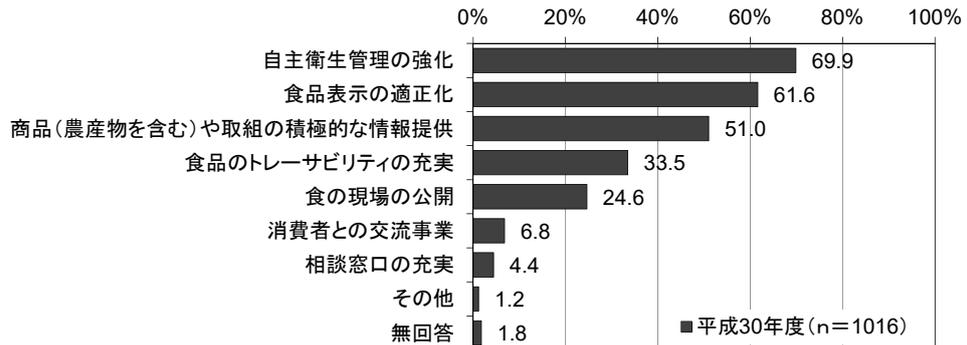


問6 食の安全に関する信頼を高めるため、事業者（生産者、食品事業者）及び行政はどのようなことに取り組むべきだと思いますか。

(1) 事業者が取り組むべきこと（3つまで選択）

「食の安全に関する信頼を高めるために事業者（生産者・食品事業者）が取り組むべきこと」について、「自主衛生管理の強化」とした人の割合が69.9%で最も高く、次いで「食品表示の適正化」が61.6%、「商品（農産物を含む）や取組の積極的な情報提供」が51.0%となっている。

図6(1) 事業者が食の安全に関する信頼を高めるために取り組むべきこと（一般県民：3つまで選択）



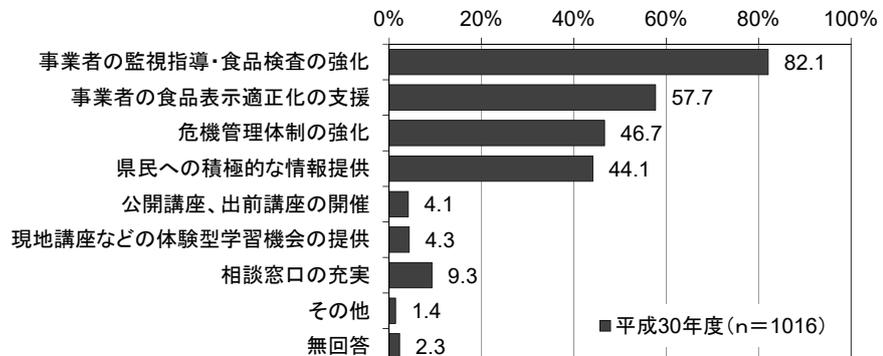
【その他の主な内容】

- | | |
|--------------------|--------------------------|
| ・生産者のモラル向上 | ・複雑な制度でなく、誰でもわかりやすい制度にする |
| ・世界的な認証を得た食品の生産と流通 | ・衛生管理に関わる人への教育・指導 |
| ・法令遵守 | ・トイレウォッシュレット導入、ハンドフリー消毒 |

(2) 行政が取り組むべきこと（3つまで選択）

「食の安全に関する信頼を高めるために行政が取り組むべきこと」については、「事業者の監視指導・食品検査の強化」とした人の割合が82.1%で最も高く、次いで「事業者の食品表示適正化の支援」が57.7%、「危機管理体制の強化」が46.7%、「県民への積極的な情報提供」が44.1%となっている。

図6(2) 行政が食の安全に関する信頼を高めるために取り組むべきこと（一般県民：3つまで選択）



【その他の主な内容】

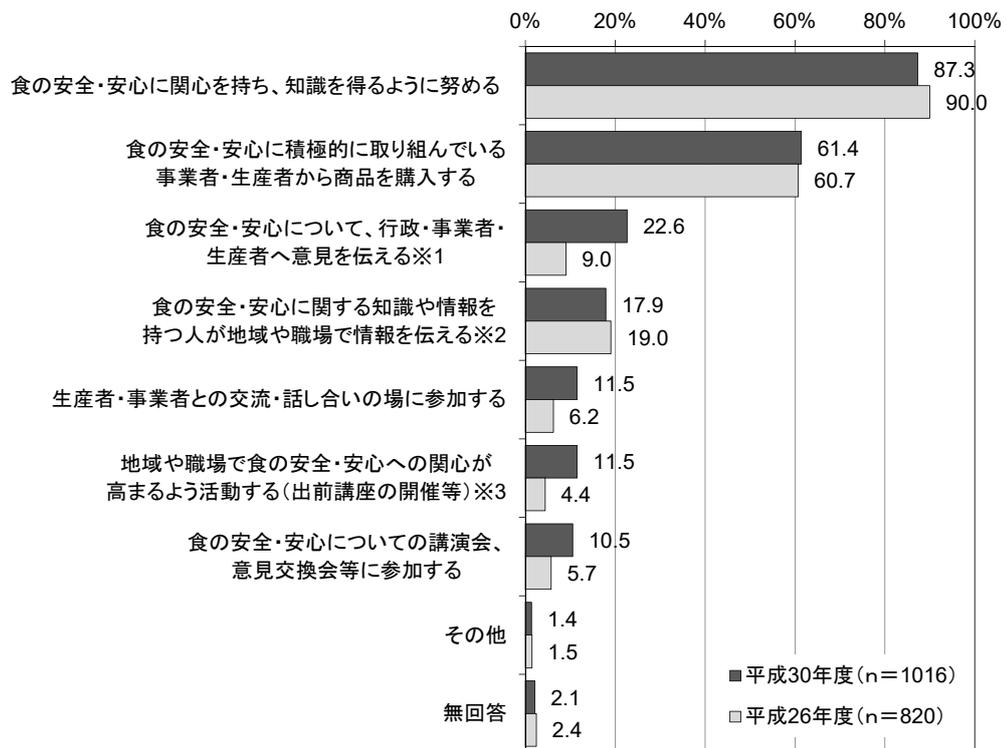
- | | | |
|-----------------|---------------|------------------|
| ・消費者の立場に立った規制強化 | ・事業者に対する罰則の強化 | ・現地訪問 |
| ・欧米基準に追いついた規則 | ・行政の意識を向上させる | ・事故の詳細の公開 |
| ・優良事業者のアピール | ・抜き打ち検査 | ・何ごとにもウソなくまじめにやる |

問7 食の安全に関する知識や理解を深めるため、消費者はどのようなことをすべきだと思いますか。(3つまで選択)

「食の安全に関する知識や理解を深めるために消費者がすべきこと」について、「食の安全・安心に関心を持ち、知識を得るように努める」とした人の割合が87.3%で最も高く、次いで「食の安全・安心に積極的に取り組んでいる事業者・生産者から商品を購入する」が61.4%となっている。

前回と比較すると、概ね同様の傾向となっている。

図7 食の安全に関する知識や理解を深めるため消費者がすべきこと（一般県民：3つまで選択）



※平成26年度は「食の安全確保のため、消費者がすべきことはどんなことだと思いますか」として9選択肢を設定

※1 平成26年度は「食の安全・安心について、行政・事業者・生産者へ提言や意見表明を行う」

※2 平成26年度は「食の安全・安心に関する知識を持つ消費者が、地域の消費者に情報を伝える」

※3 平成26年度は「消費者相互の連携を図る(グループ活動)」

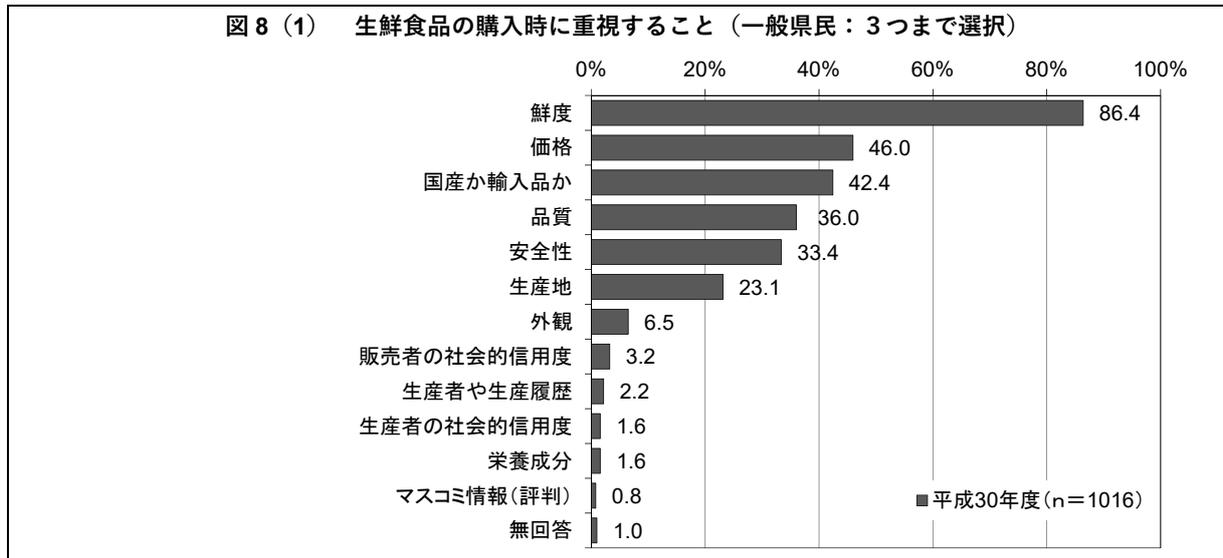
【その他の主な内容】

- ・環境・衛生に配慮した商品を購入するように努める。そのためにも、信頼できる第三者機関（企業でも行政でもない機関）の認証制度導入が不可欠
- ・学校で学生のうちに教える
- ・親（学校）が食品安全衛生等の知識を伝える。一諸に勉強する
- ・ホームページなど（スマホ含）で情報提供をアップしてもらえたら
- ・情報におどらされないようにする
- ・形や色などにこだわらず、本物を大切にす気持ちを持つ
- ・科学的な事故原因の公開を求める

問8 食品を購入する時、どのようなことを重視しますか。

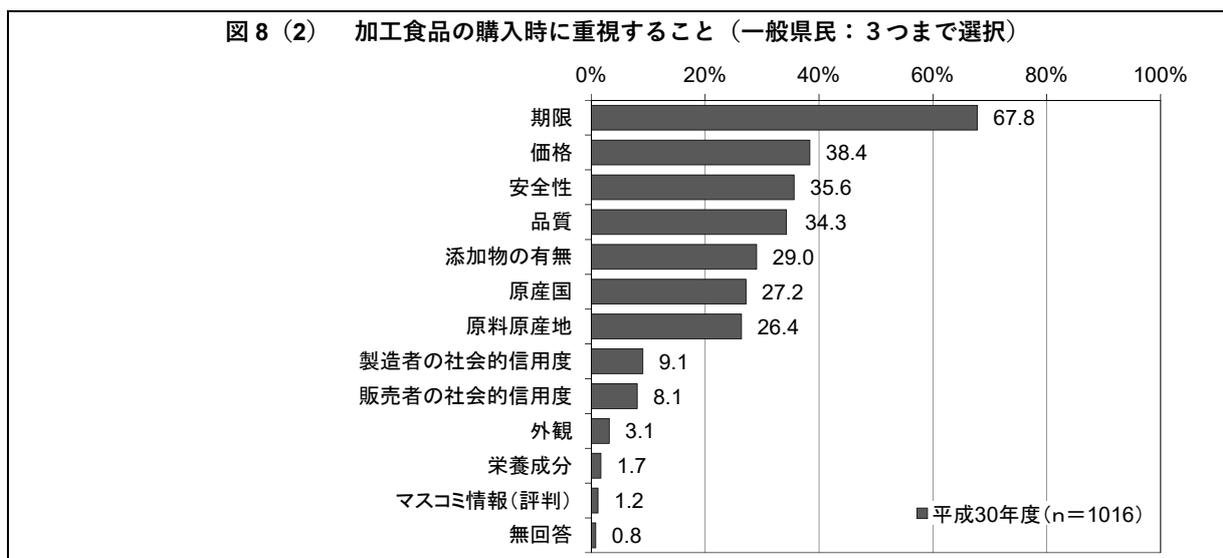
(1) 生鮮食品（野菜、くだもの）を買うとき（3つまで選択）

「生鮮食品（野菜、くだもの）の購入時に重視すること」について、「鮮度」とした人の割合が86.4%で最も高く、次いで「価格」が46.0%、「国産か輸入品か」が42.4%、「品質」が36.0%、「安全性」が33.4%となっている。



(2) 加工食品（漬物、ハム・ソーセージ、乳製品など）を買うとき（3つまで選択）

「加工食品（漬物、ハム・ソーセージ、乳製品など）の購入時に重視すること」については、「期限」とした人の割合が67.8%で最も高く、次いで「価格」が38.4%、「安全性」が35.6%、「品質」が34.3%となっている。

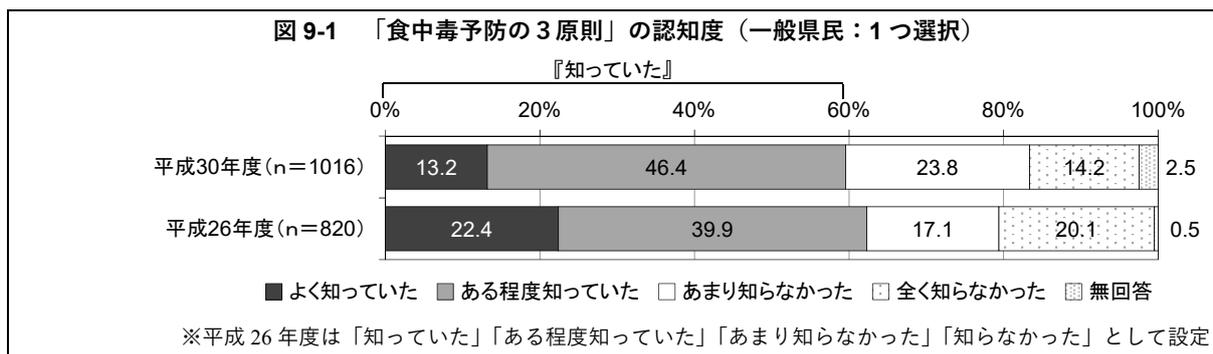


2-2 食中毒予防について

問9 食中毒にならないようにするための「食中毒予防の3原則」を知っていましたか。
(1つ選択)

「食中毒予防の3原則」について、「よく知っていた」と「ある程度知っていた」を合わせた『知っていた』とした人の割合（認知度）は59.6%となっている。

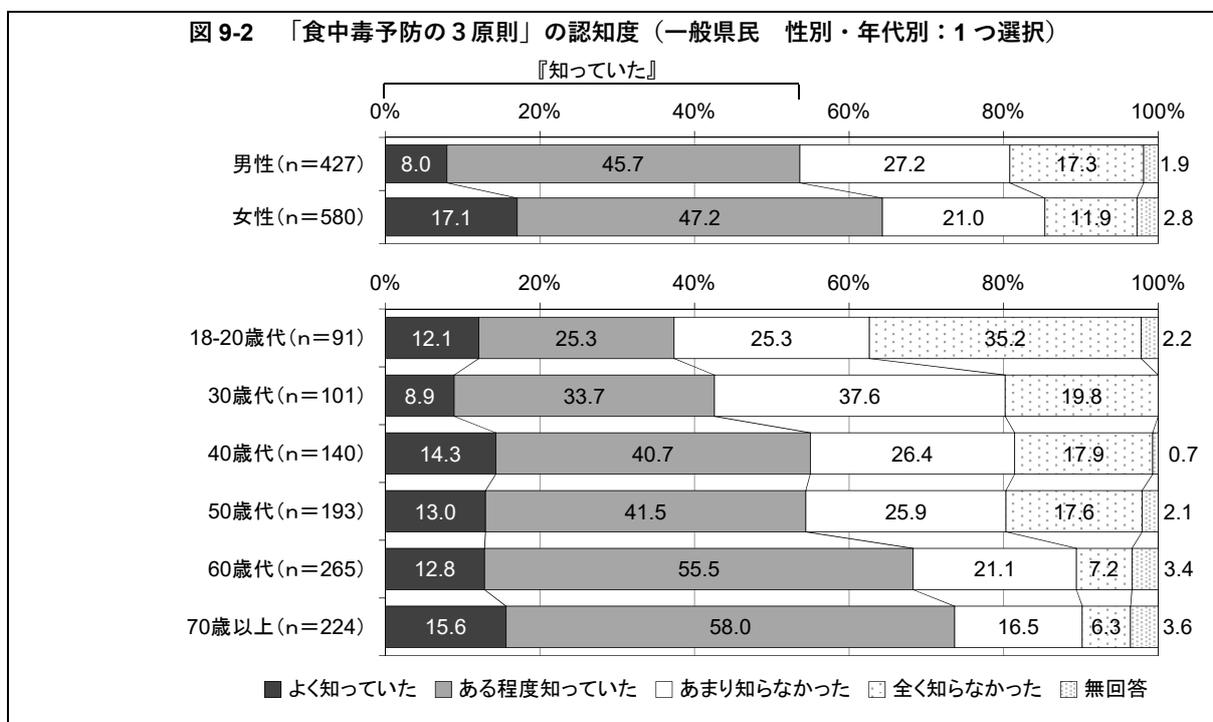
前回の認知度62.3%と比較すると、若干低くなっている。



性別の認知度では、男性が53.7%、女性が64.3%となっている。

年代別の認知度は、70歳以上が73.6%で最も高く、次いで60歳代が68.3%となっている。一方、18-20歳代が37.4%で最も低く、概ね年代が高いほど認知度も高くなっている。

なお、18-20歳代では「全く知らなかった」とした人の割合が35.2%で最も高くなっている。

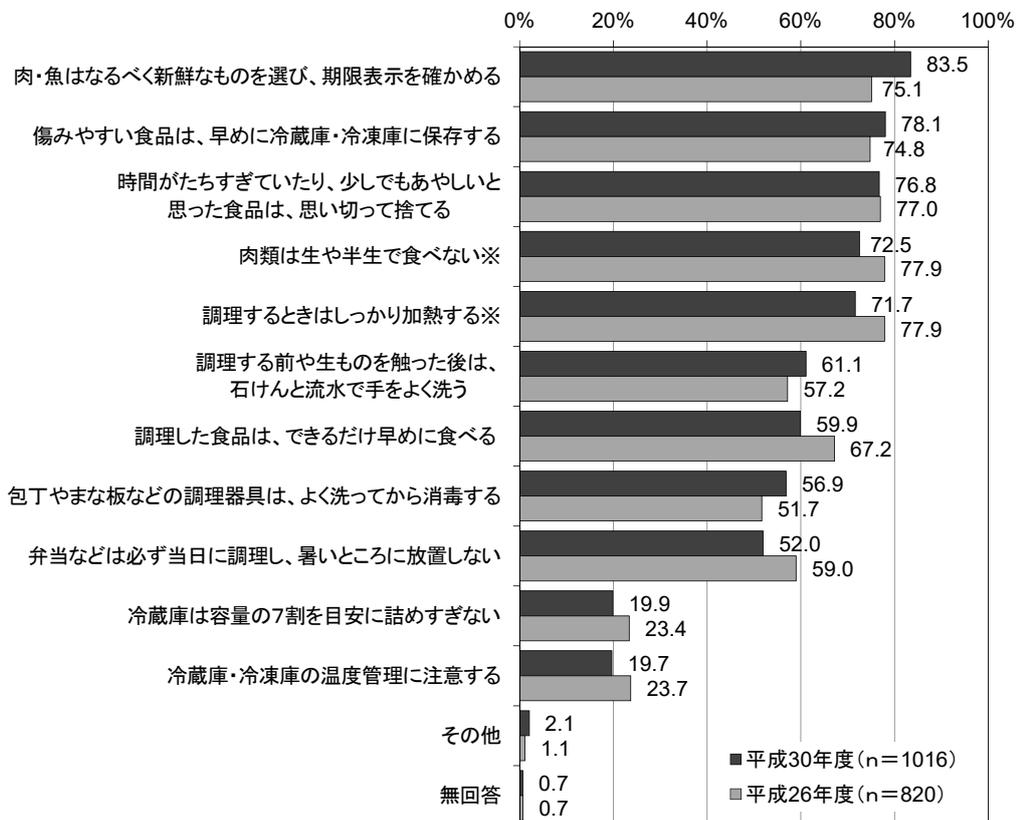


問10 ふだん、食中毒を予防するために、どのようなことを行っていますか。(すべて選択)

「ふだん、食中毒を予防するために行っていること」について、「肉・魚はなるべく新鮮なものを選び、期限表示を確かめる」とした人の割合が83.5%で最も高く、次いで「傷みやすい食品は、早めに冷蔵庫・冷凍庫に保存する」が78.1%、「時間がたちすぎていたり、少しでもあやしいと思った食品は、思い切って捨てる」が76.8%、「肉類は生や半生で食べない」が72.5%、「調理するときにはしっかり加熱する」が71.7%となっている。一方、「冷蔵庫は容量の7割を目安に詰めすぎない」は19.9%、「冷蔵庫・冷凍庫の温度管理に注意する」は19.7%で低くなっている。

前回と比較すると、ほとんどの項目が同程度または減少しているが、「肉・魚はなるべく新鮮なものを選び、期限表示を確かめる」は前回の75.1%から8.4ポイント高くなっている。

図10 ふだん食中毒を予防するために行っていること（一般県民：すべて選択）



※「肉類は生や半生で食べない」「調理するときにはしっかり加熱する」は平成26年度では合わせて「加熱は中心までよく火を通し、特に肉類は生で食べない」として設定

【その他の主な内容】

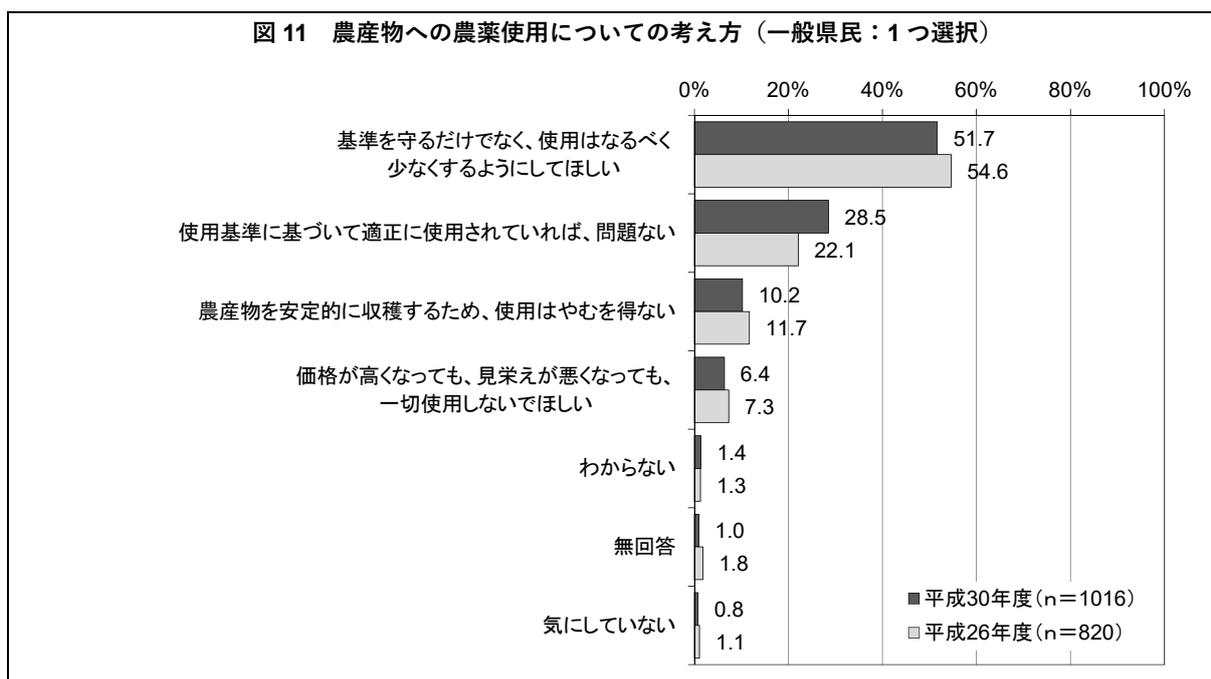
- ・調理しない
- ・野菜と肉でまな板と包丁を分ける
- ・あまり気にしない
- ・食べきれる量をつくる。多量につくらない
- ・当日食べる分のみ購入
- ・おにぎりは使い捨て手袋をしてにぎる、またはラップを使用する
- ・お弁当箱は使用する前に酢で洗う
- ・肉や魚は小分けにして冷凍庫に保存
- ・買ったもの、すぐ食べない時は冷凍保存する
- ・料理は1度にたくさんつくらない。残りは危ない
- ・料理をつくらない
- ・口飲みなしたペットボトルを夏の車の中に放置しない。そして、長時間放置したペットボトルは飲まない

2-3 農産物への農薬使用について

問 11 農産物への農薬使用について、どのように考えますか。(1つ選択)

「農産物への農薬使用」について、「基準を守るだけでなく、使用はなるべく少なくするようにしてほしい」とした人の割合が 51.7%で最も高く、次いで「使用基準に基づいて適正に使用されていれば、問題ない」が 28.5%となっている。

前回と比較すると、概ね同様の傾向となっているが、その中で「使用基準に基づいて適正に使用されていれば、問題ない」は前回の 22.1%から 6.4ポイント高くなっている。

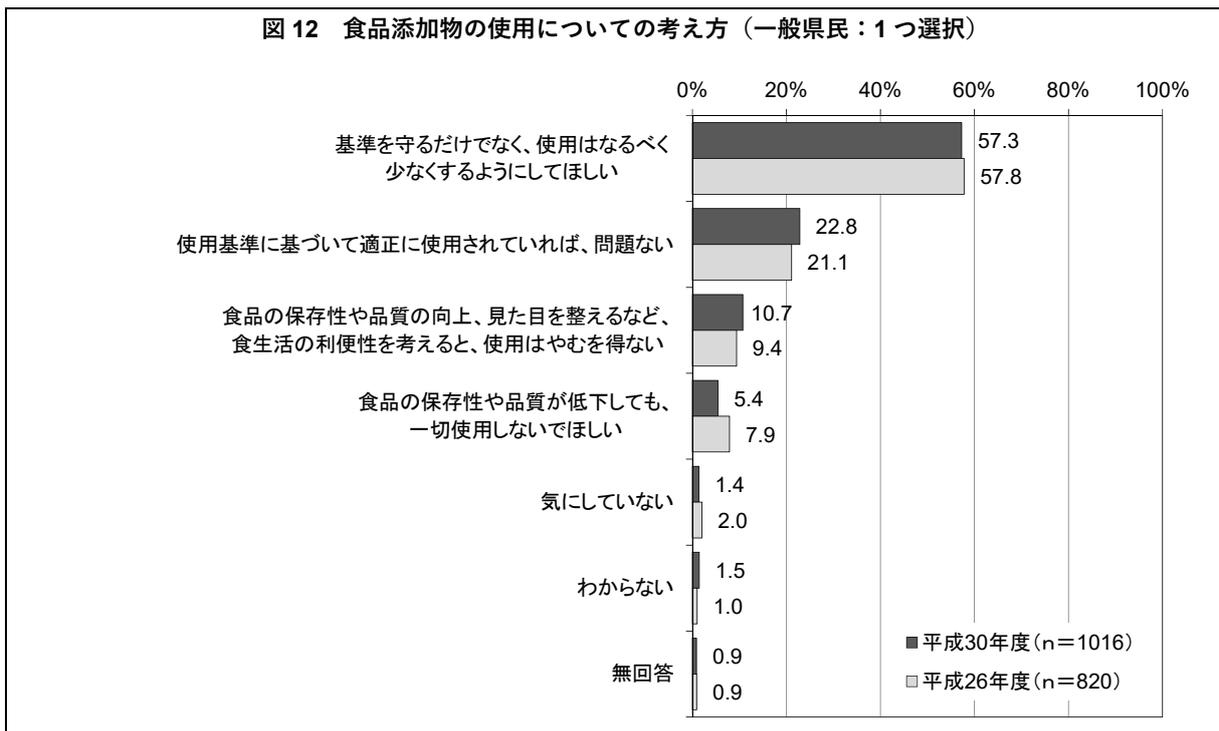


2-4 食品添加物の使用について

問12 食品添加物の使用について、どのように考えますか。(1つ選択)

「食品添加物の使用」について、「基準を守るだけでなく、使用はなるべく少なくするようにしてほしい」とした人の割合が57.3%で最も高く、次いで「使用基準に基づいて適正に使用されていれば、問題ない」が22.8%となっている。

前回と比較すると、概ね同様の傾向となっている。

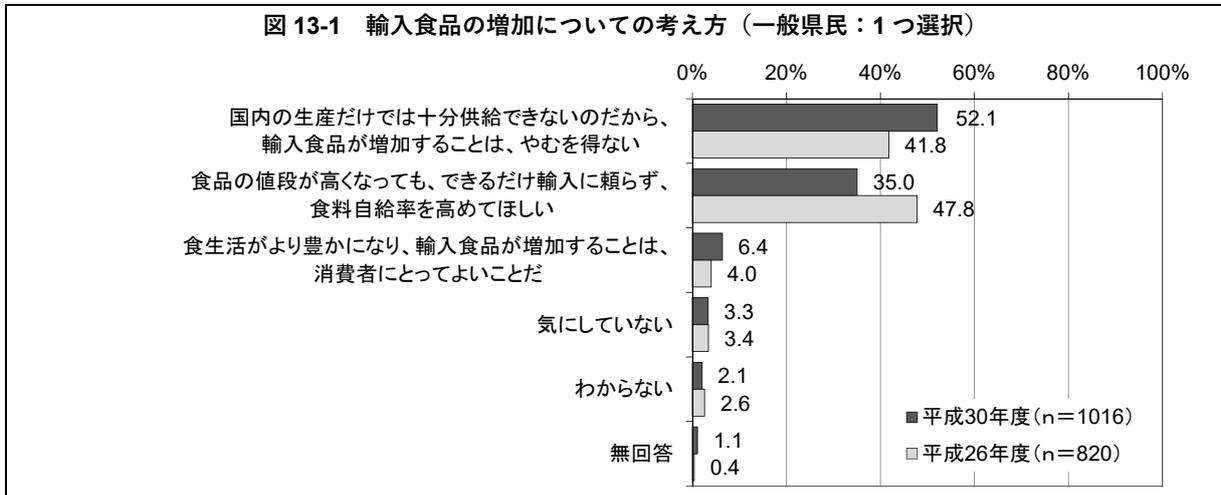


2-5 輸入食品について

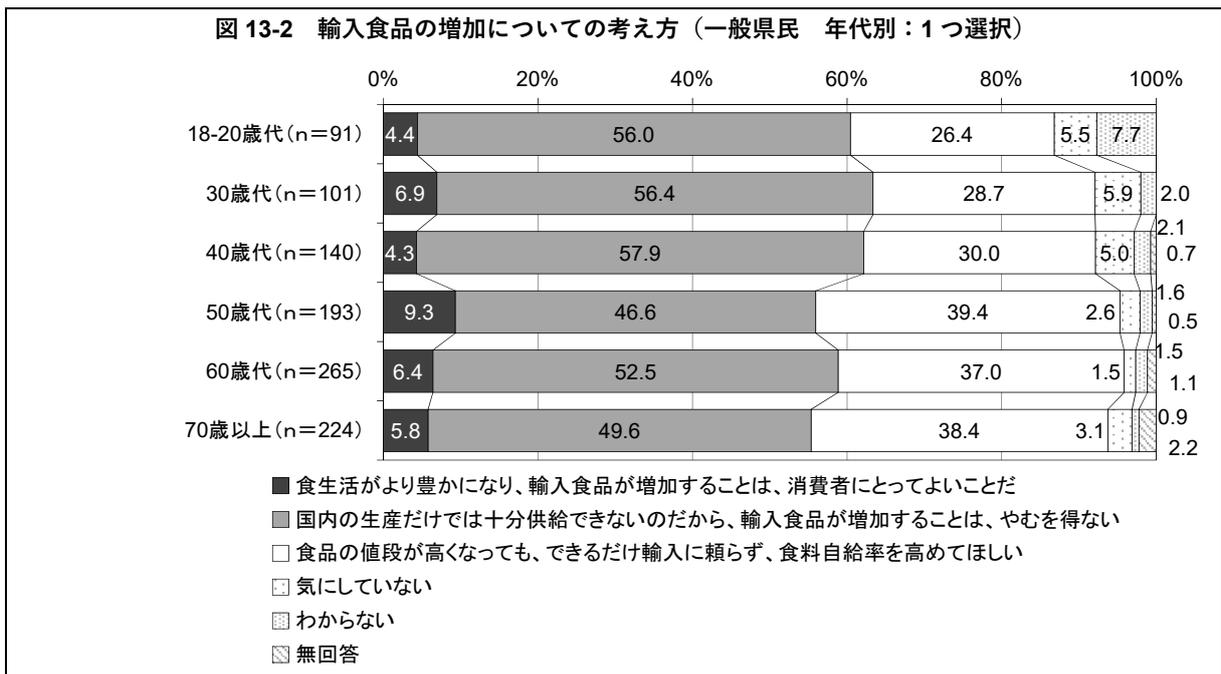
問 13 輸入食品が増加していることについて、どのように考えますか。(1つ選択)

「輸入食品が増加していること」について、「国内の生産だけでは十分供給できないのだから、輸入食品が増加することは、やむを得ない」とした人の割合が 52.1%で最も高く、次いで「食品の値段が高くなっても、できるだけ輸入に頼らず、食料自給率を高めてほしい」が 35.0%となっている。

前回と比較すると、概ね同様の傾向となっているが、その中で「国内の生産だけでは十分供給できないのだから、輸入食品が増加することは、やむを得ない」は前回の 41.8%から 10.3 ポイント高く、「食品の値段が高くなっても、できるだけ輸入に頼らず、食料自給率を高めてほしい」は 47.8%から 12.8 ポイント低くなっている。



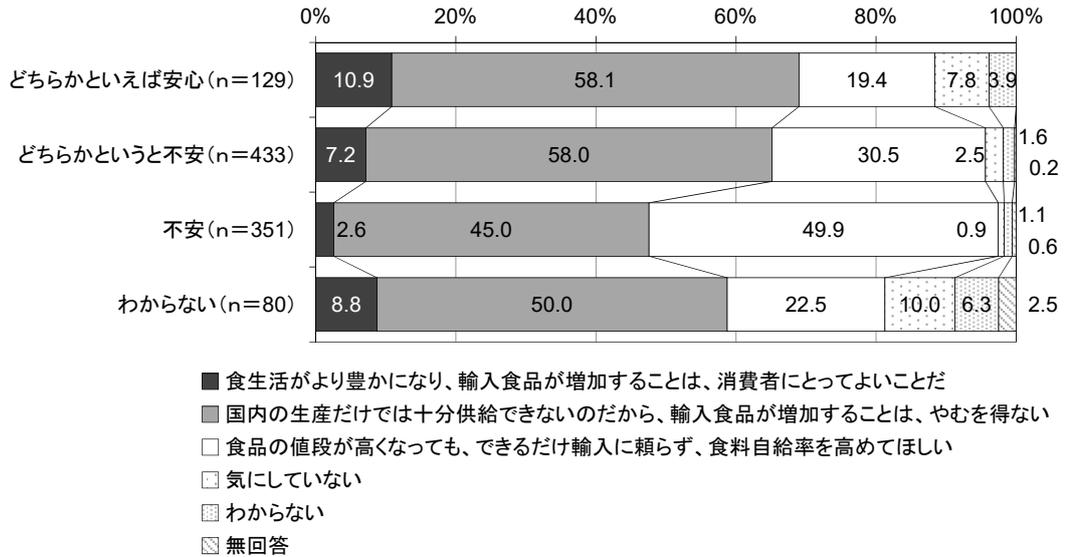
年代別では、すべての年代で上位の順位は、同様の傾向となっている。



「輸入食品が増加していること」について、「問3（1）「輸入食品」について食品の安全性の観点からどのように感じているか」と合わせて見ると、「食品の値段が高くなっても、できるだけ輸入に頼らず、食料自給率を高めてほしい」とした人の割合は、不安感が強いほど高くなる傾向がうかがえる。

図 13-3 輸入食品の増加についての考え方・問3（1）「輸入食品」について
「食品の安全性への不安の状況」（一般県民 年代別：1つ選択）

【問3(1)「輸入食品」について「食品の安全性の観点からどのように感じているか」について】



※問3（1）「輸入食品」について「食品の安全性の観点からどのように感じているか」の「安心」（n=8）は非表示

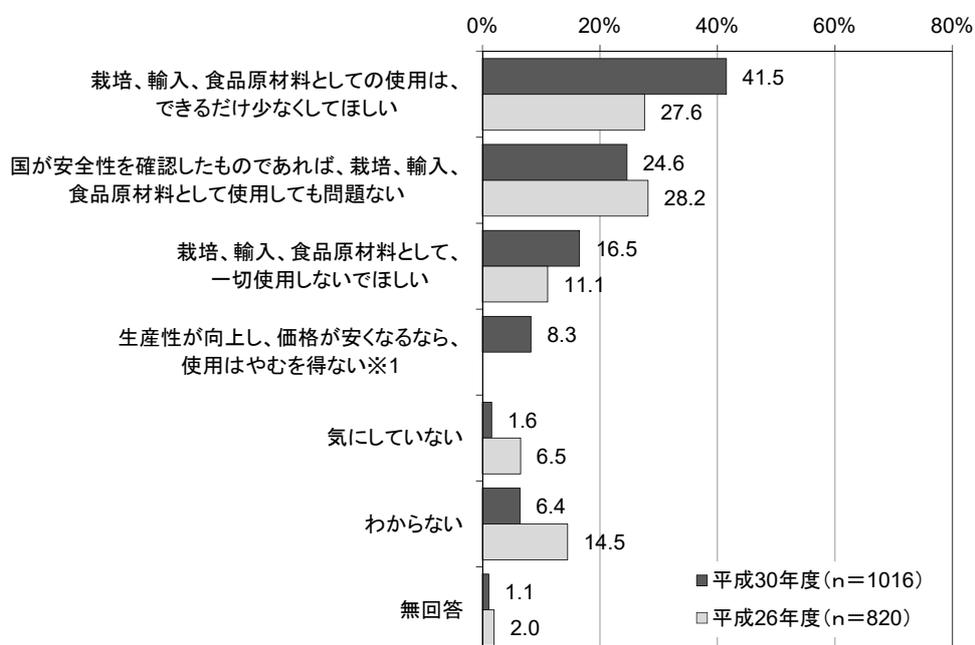
2-6 遺伝子組換え食品について

問 14 遺伝子組換え食品について、どのように考えますか。(1つ選択)

「遺伝子組換え食品」について、「栽培、輸入、食品原材料としての使用は、できるだけ少なくしてほしい」とした人の割合が 41.5%で最も高く、次いで「国が安全性を確認したものであれば、栽培、輸入、食品原材料として使用しても問題ない」24.6%となっている。

前回と比較すると、「栽培、輸入、食品原材料としての使用は、できるだけ少なくしてほしい」は前回の 27.6%から 13.9 ポイント、「栽培、輸入、食料原材料として一切使用しないでほしい」は 11.1%から 16.5%に 5.4 ポイント高くなるなど、「遺伝子組み換え食品」の使用について否定的な項目が増加している。

図 14 遺伝子組換え食品の使用についての考え方（一般県民：1つ選択）



※平成 26 年度は上記以外に「農薬の量を減らすことができ、環境にやさしいので、積極的に利用すべきだ」を選択肢として設定

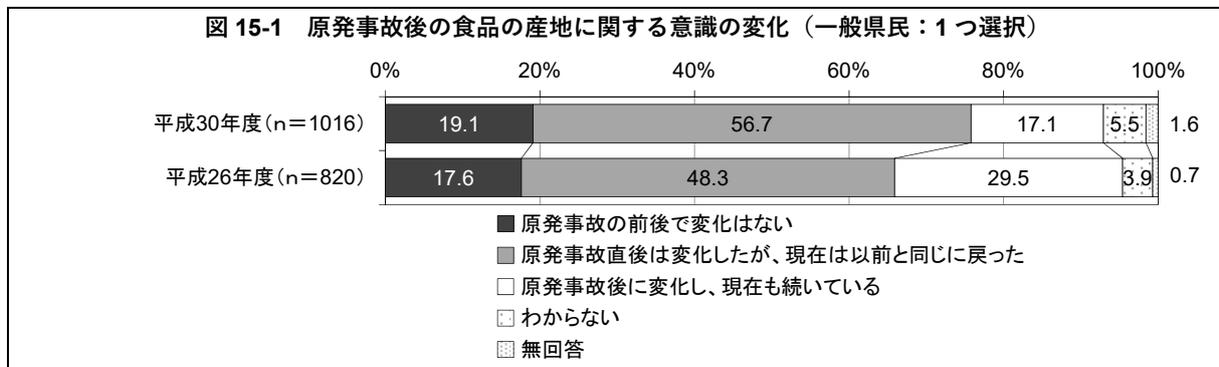
※1 平成 26 年度は「生産性が向上し、価格が安くなるなら、積極的に利用すべきだ」（前回 3.5%）として設定

2-7 放射性物質について

問 15 福島第一原子力発電所の事故後、食品の購入に当たって、産地に関する意識の変化はありましたか。(1つ選択)

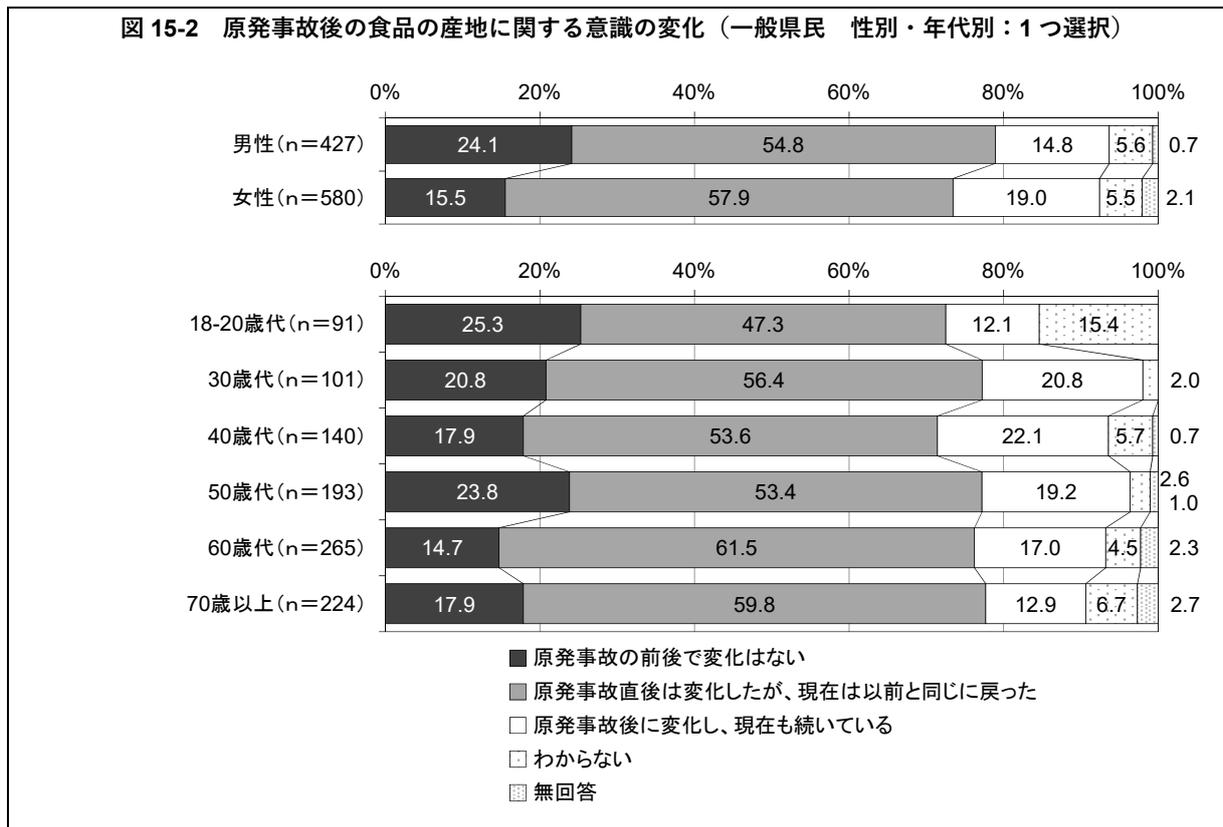
福島原子力発電所事故後の「食品の購入に当たっての産地に関する意識の変化」について、「原発事故直後は変化したけど、現在は以前と同じに戻った」とした人の割合が56.7%で最も高く、次いで「原発事故の前後で変化はない」が19.1%、「原発事故後に変化し、現在も続いている」が17.1%となっている。

今回の調査は原発事故から7年が経過しているが、3年を経過した時点の前回と比較すると、「原発事故直後は変化したけど、現在は以前と同じに戻った」は前回の48.3%から8.4ポイント高く、「原発事故後に変化し、現在も続いている」は29.5%から12.4ポイント低くなっており、産地に対する意識は以前の状況に近づいている。



性別では、男女とも「原発事故直後は変化したが、現在は以前と同じに戻った」とした人の割合が最も高くなっている。一方、「原発事故の前後で変化はない」は、男性が24.1%、女性が15.5%で男性の割合が高く、「原発事故後に変化し、現在も続いている」は男性が14.8%、女性が19.0%で、女性の割合が若干高くなっている。

年代別では、すべての年代で「原発事故直後は変化したが、現在は以前と同じに戻った」とした人の割合が最も高くなっている。一方、「原発事故後に変化し、現在も続いている」は、18-20歳代が12.1%、70歳以上が12.9%で、他の年代よりも低くなっている。

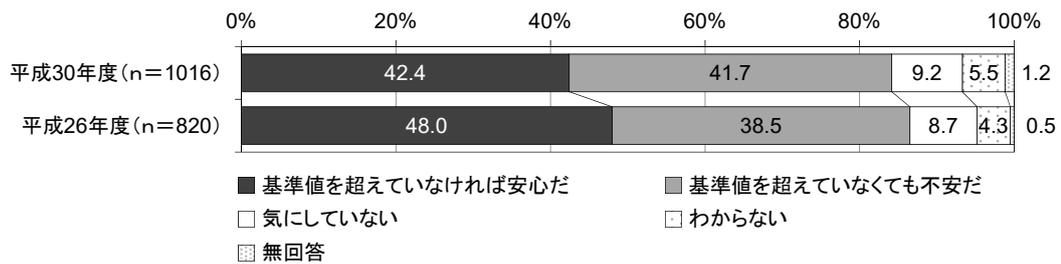


問16 食品中の放射性物質について、どのように考えますか。(1つ選択)

「食品中の放射性物質」について、「基準値を超えていなければ安心だ」とした人の割合が42.4%で最も高く、次いで「基準値を超えていなくても不安だ」が41.7%となっている。

前回と比較すると、「基準値を超えていなければ安心だ」は前回の48.0%から5.6ポイント低く、「基準値を超えていなくても不安だ」は38.5%から3.2ポイント高くなっており、放射性物質への不安について減少は見られない。

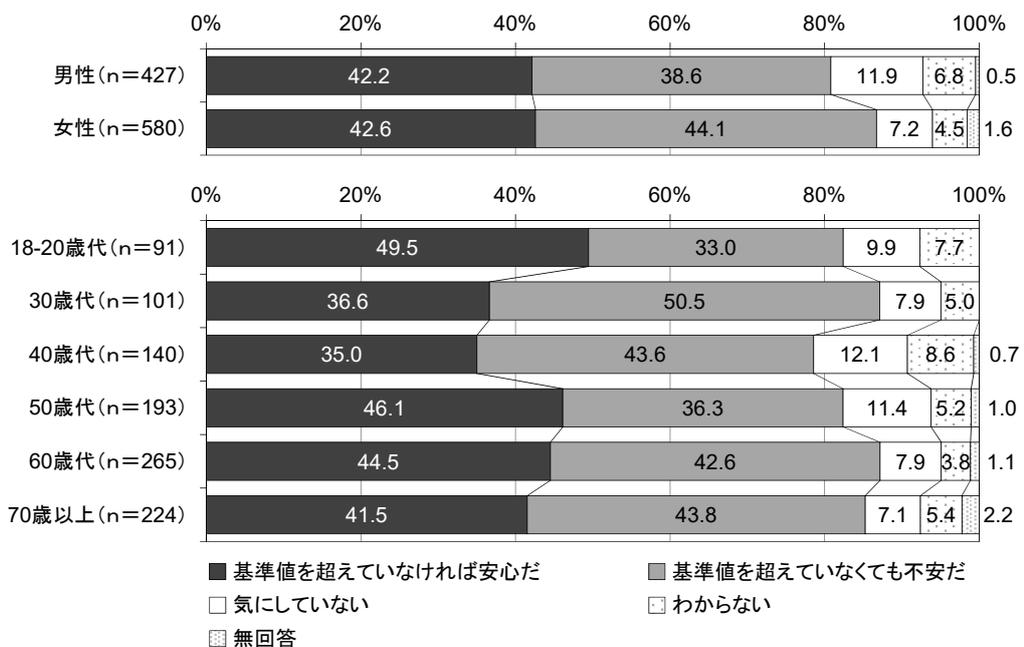
図16-1 食品中の放射性物質についての考え方（一般県民：1つ選択）



性別では、「基準値を超えていなければ安心だ」とした人の割合に差は見られないが、「基準値を超えていなくても不安だ」は、男性が38.6%、女性が44.1%となっている。

年代別では、18-20・50・60歳代は「基準値を超えていなければ安心だ」とした人の割合が最も高くなっている。30・40歳代と70歳以上は「基準値を超えていなくても不安だ」が最も高くなっている。

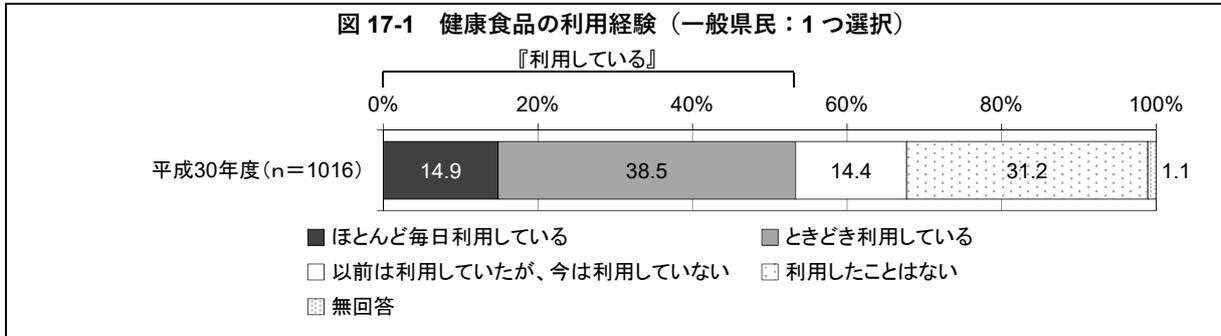
図16-2 食品中の放射性物質についての考え方（一般県民 性別・年代別：1つ選択）



2-8 健康食品の利用について

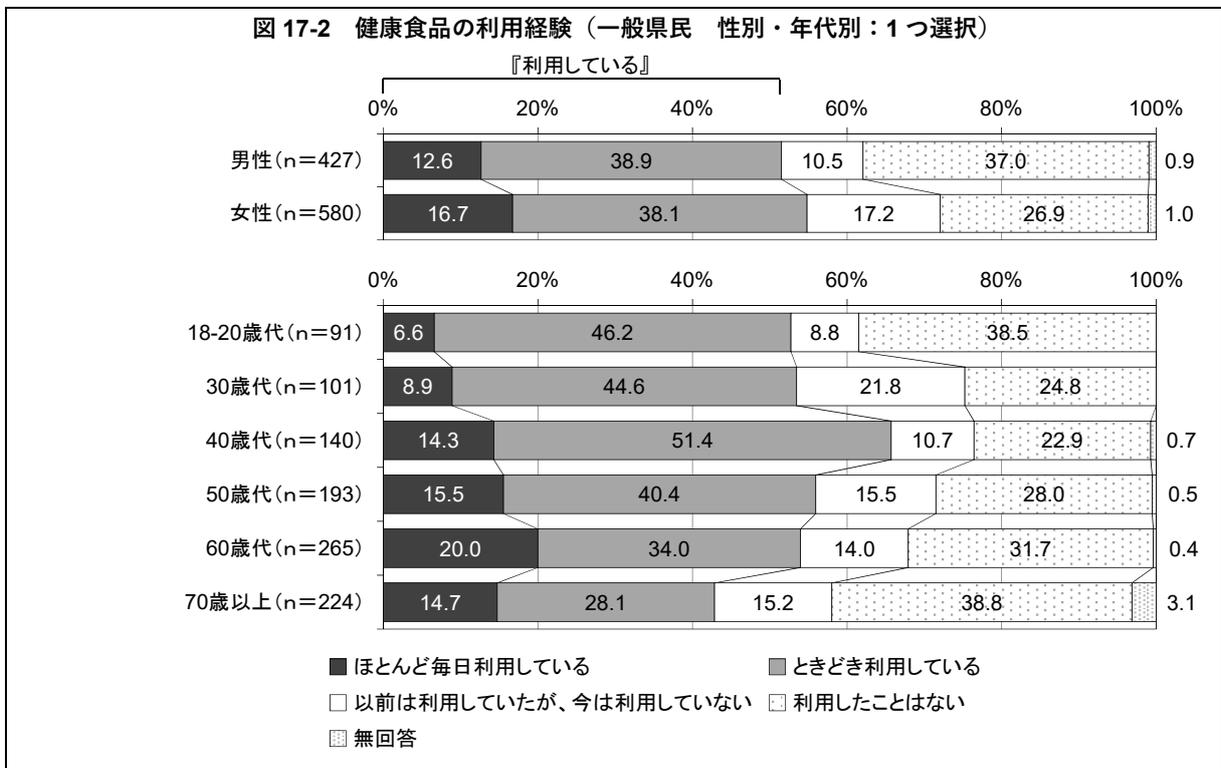
問 17 健康食品を利用したことがありますか。(1つ選択)

健康食品を「ほとんど毎日利用している」と「ときどき利用している」を合わせた『利用している』とした人の割合は53.4%となっている。



性別の『利用している』とした人の割合は、男性が51.5%、女性が54.8%で、ともに約5割となっているが、「利用したことがない」とした人の割合は、男性が37.0%、女性が26.9%で、男性が高くなっている。

年代別の『利用している』とした人の割合は、70歳以上(42.8%)を除く年代で50%を超えており、最も高い40歳代では65.7%となっている。また、「毎日利用している」とした人の割合は、18-20歳代から30歳代は10%未満であるが、40歳代以上で10%を超え、60歳代が20.0%で最も高くなっている。



問18 問17において、「ほとんど毎日利用している」「ときどき利用している」「以前は利用していたが、今は利用していない」と回答された方にうかがいます。
健康食品を利用する（利用した）目的を教えてください。（すべて選択）

「健康食品を利用するまたは過去に利用した目的」について、「健康の維持」とした人の割合が55.7%で最も高く、次いで「栄養補給」が39.8%、「疲労回復」が35.2%となっている。

また、「病気の予防」が17.7%、「病気の改善」が8.0%あり、医薬品と同様の目的で利用している人も見られる。

性別で特に差が見られたのは「美容」で、男性が3.0%、女性が18.9%となっている。

図18-1 健康食品の利用目的（一般県民：1つ選択）

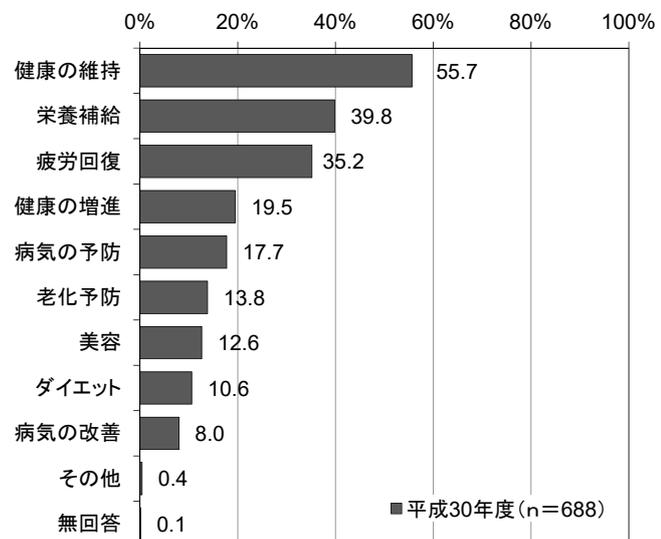
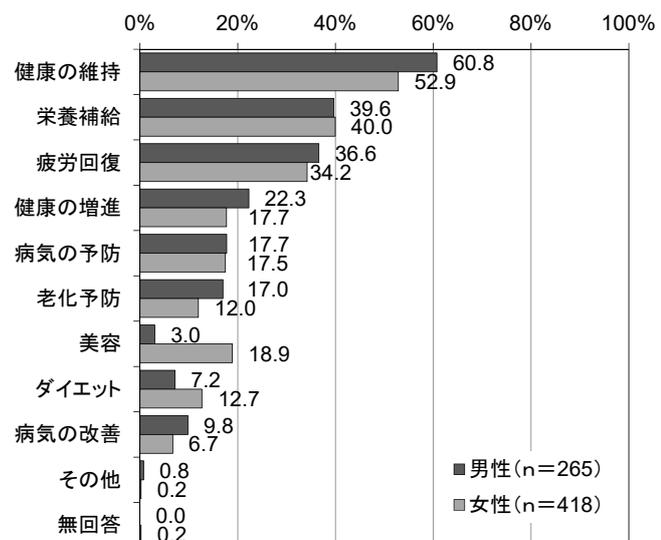


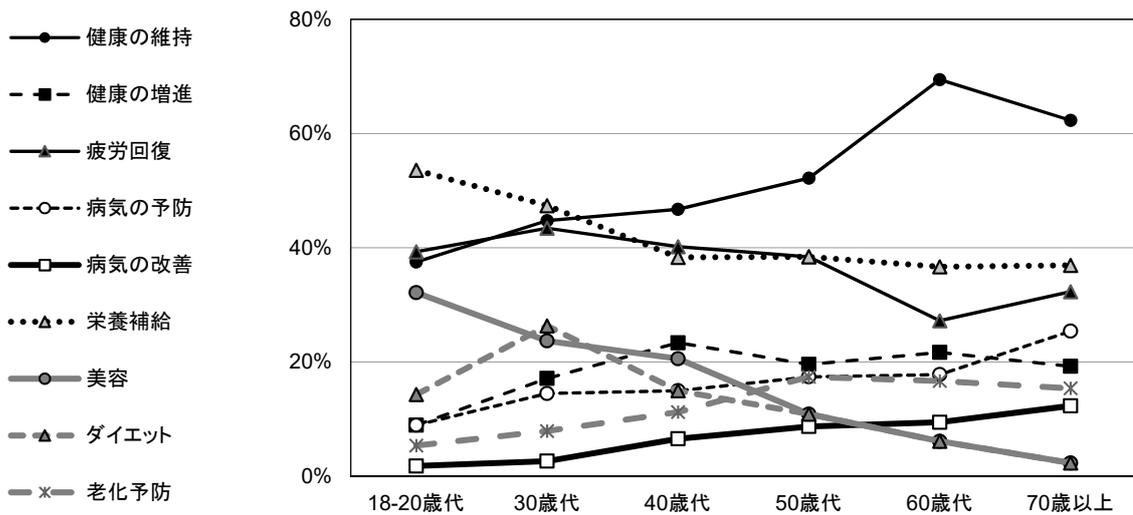
図18-2 健康食品の利用目的（一般県民 性別：1つ選択）



年代別では、18-20 歳代から 30 歳代は「栄養補給」とした人の割合が最も高くなっている。40 歳代以降は「健康の維持」とした人の割合が最も高く、60 歳代 (69.4%) と 70 歳以上 (62.3%) で特に高くなっている。また、「美容」は若い年代ほど高い傾向がうかがえる。

なお、医薬品と同様の目的である「病気の予防」と「病気の改善」とした人の割合は高い年代ほど高くなっており、70 歳以上では、「病気の予防」が 25.4%、「病気の改善」が 12.3%となっている。

図 18-3 健康食品の利用目的 (一般県民 年代別: 1 つ選択)



平成 30 年度	18-20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上
n	56	76	107	138	180	130
健康の維持	37.5	44.7	46.7	52.2	69.4	62.3
健康の増進	8.9	17.1	23.4	19.6	21.7	19.2
疲労回復	39.3	43.4	40.2	38.4	27.2	32.3
病気の予防	8.9	14.5	15.0	17.4	17.8	25.4
病気の改善	1.8	2.6	6.5	8.7	9.4	12.3
栄養補給	53.6	47.4	38.3	38.4	36.7	36.9
美容	32.1	23.7	20.6	10.9	6.1	2.3
ダイエット	14.3	26.3	15.0	10.9	6.1	2.3
老化予防	5.4	7.9	11.2	17.4	16.7	15.4

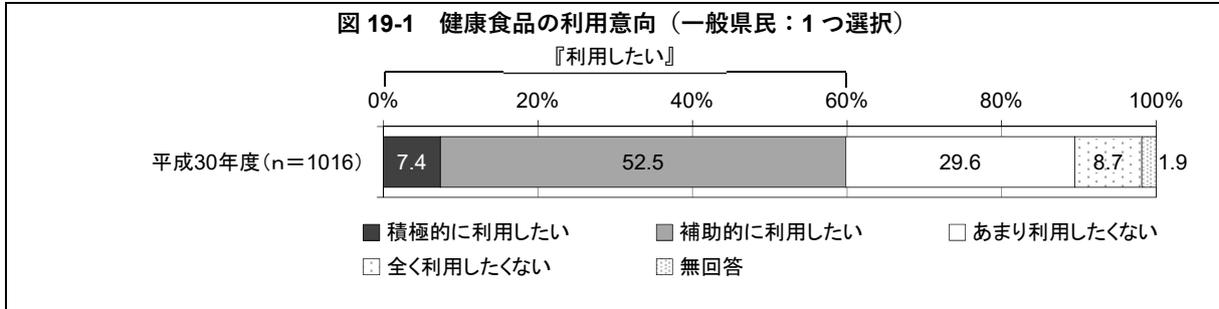
【その他の主な内容】

- ・健康に良い品物は食べている
- ・その時該当の商品を食べたくなったから

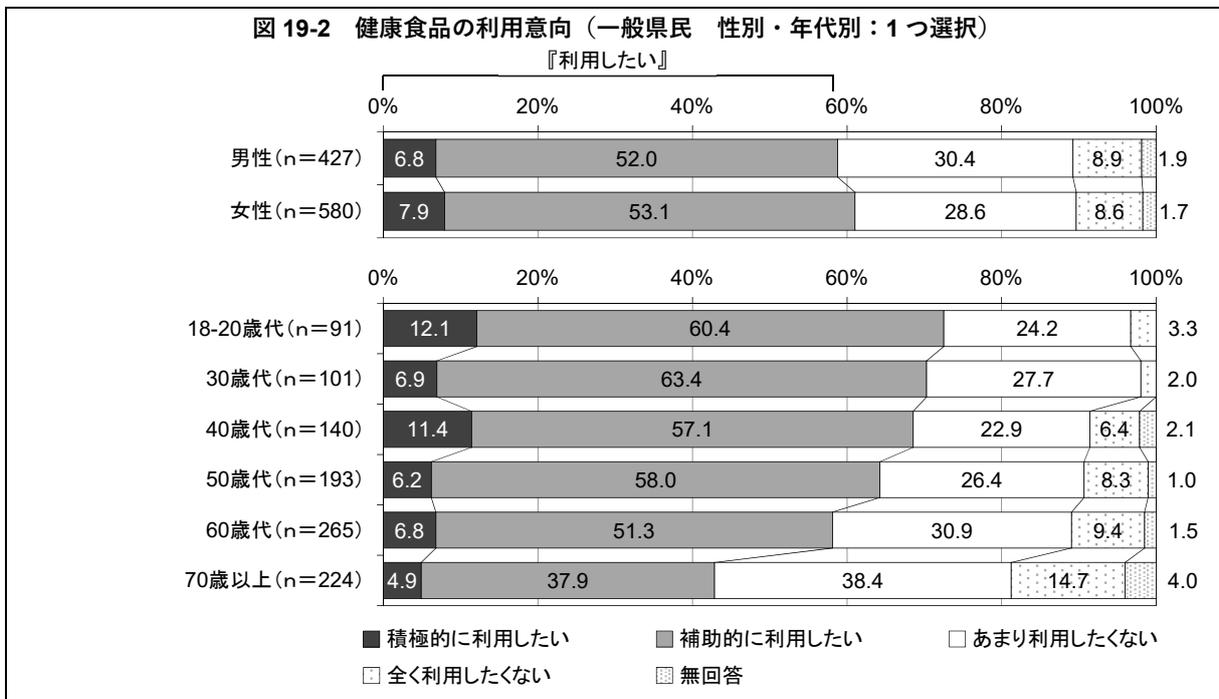
- ・以前に会社で販売していたため
- ・プラシーボ効果

問19 今後、健康食品を利用したいと思いますか。(1つ選択)

今後、健康食品を「積極的に利用したい」と「補助的に利用したい」を合わせた『利用したい』とした人の割合は59.9%となっている。



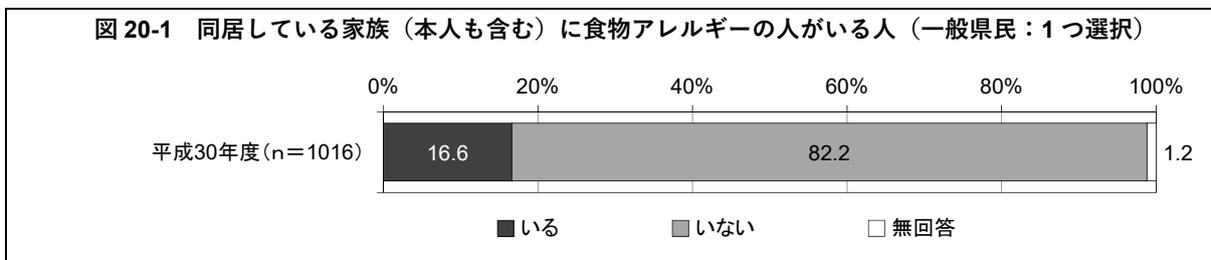
また、『利用したい』とした人の割合について性別による差は見られないが、年代別では、18-20歳代が72.5%で最も高く、若い年代ほど高い傾向がうかがえる。



2-9 食物アレルギーについて

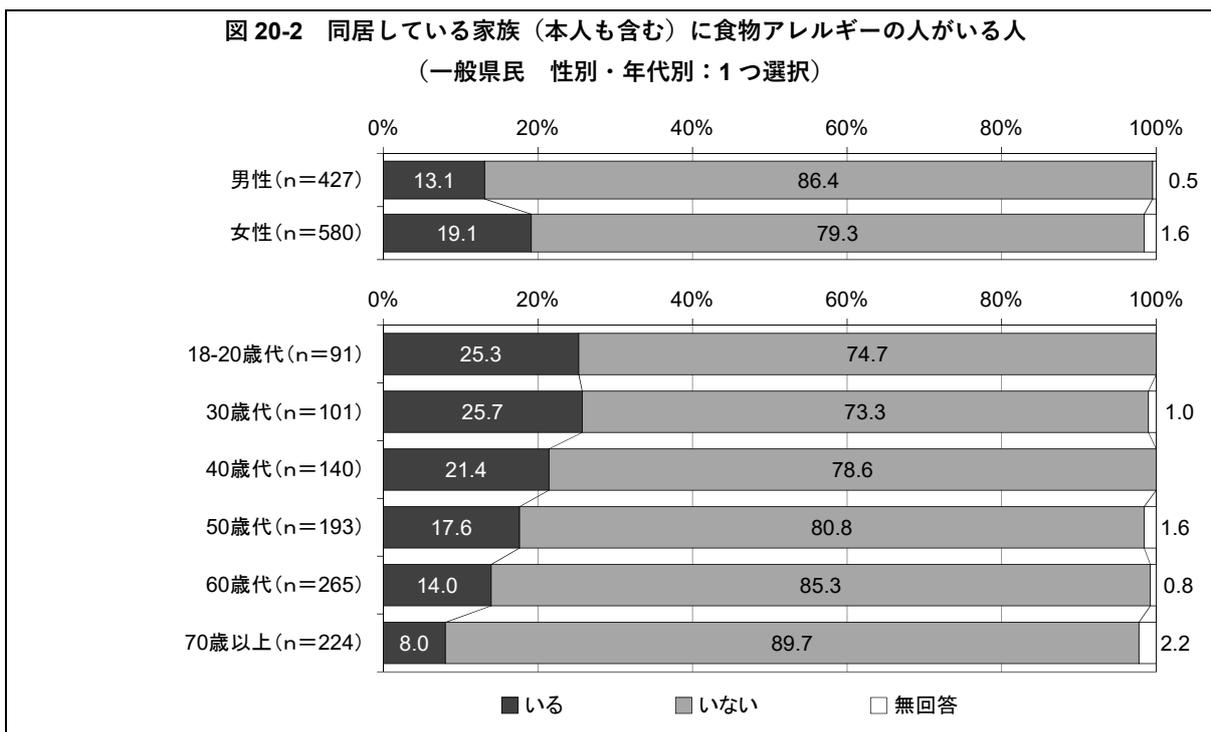
問 20 同居しているご家族（本人も含む）で食物アレルギーのある方はいますか。（1つ選択）

「同居している家族（本人も含む）に食物アレルギーの人がいる」とした人の割合は 16.6%となっている。



性別の「同居している家族（本人も含む）に食物アレルギーの人がいる」とした人の割合は、男性が 13.1%、女性が 19.1%となっている。

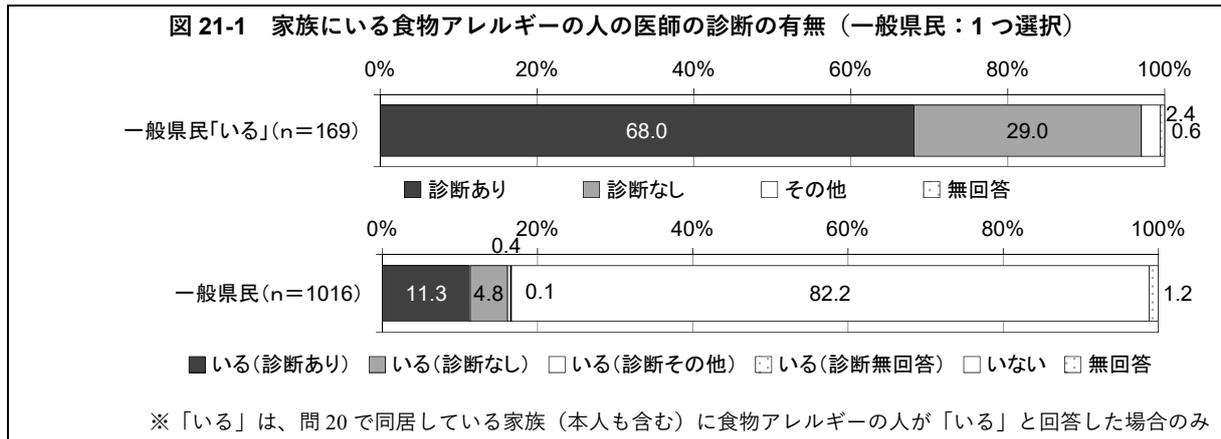
年代別では、18-20 歳代が 25.3%、30 歳代が 25.7%で他の年代より高くなっており、若い年代で高い傾向がうかがえる。



問21 問20で「いる」と回答された方にうかがいます。

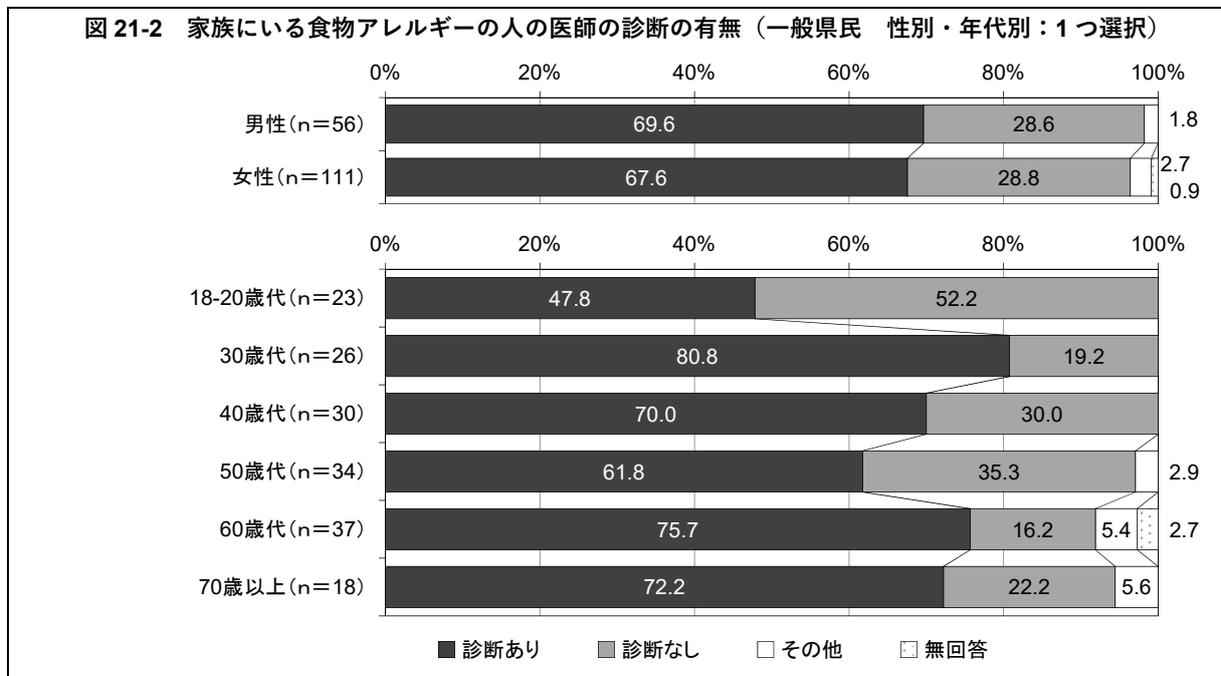
食物アレルギーのある方は医師の診断を受けていますか。(1つ選択)

前述(問20)のとおり、「同居している家族(本人も含む)に食物アレルギーの人がいる」とした人の割合は16.6%で、そのうち、家族にいる食物アレルギーの人が医師の診断を受けている割合は68.0%となっている。これらの結果から、家族に医師の診断を受けた食物アレルギーの人がいる割合は11.3%と推計される。



「家族に医師の診断を受けた食物アレルギーの人がいる」とした人の割合は、性別による差は見られない。

年代別では、30歳代が80.8%で、他の年代より高くなっている。一方、18-20歳代は47.8%で、他の年代より低くなっている。

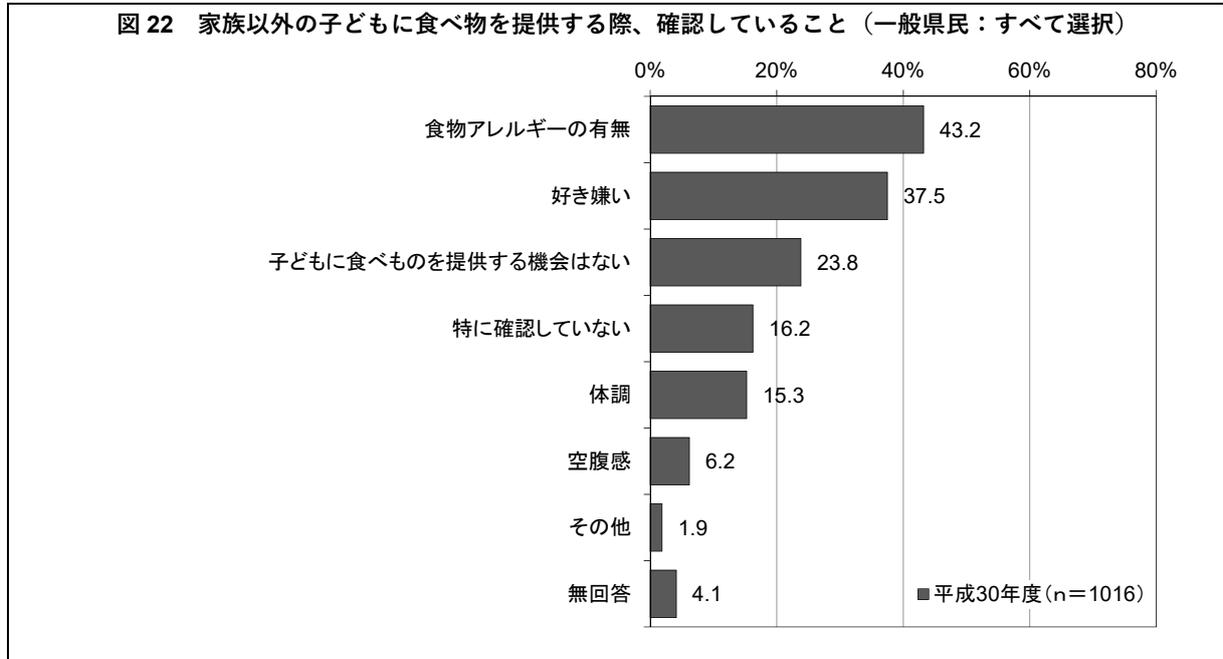


【その他の主な内容】

- ・その物を食べない

問 22 家族以外の子どもに食べ物を提供する際、確認していることはありますか。
(すべて選択)

「家族以外の子どもに食べ物を提供する際、確認していること」は、「食物アレルギーの有無」とした人の割合が43.2%で最も高く、次いで「好き嫌い」が37.5%、「子どもに食べものを提供する機会はない」が23.8%となっている。



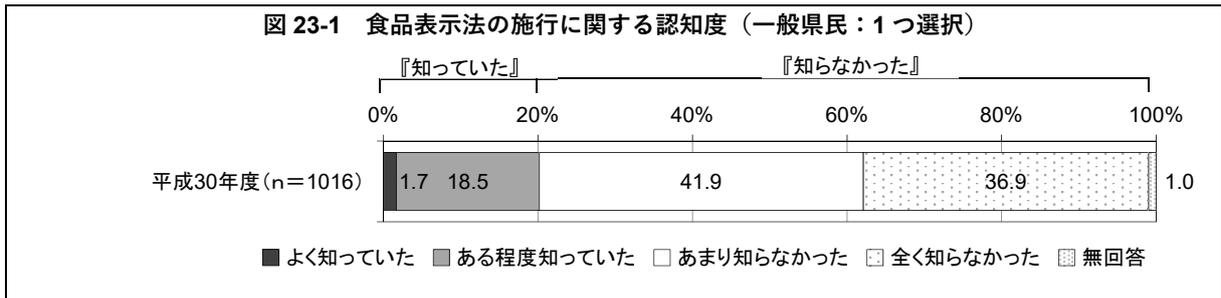
【その他の主な内容】

- ・提供したことがない
- ・まわりにそういう子どもがいない
- ・母親または日常世話をしている人にその食べ物をあげていいか事前に確認する
- ・親に確認
- ・親に大丈夫か確認する
- ・子どもに対して食べさせてはいけないものを聞く
- ・いろんな意味を含めて食べられるか聞く
- ・食べられるかどうか確認する。「食べる？」と聞いたりする
- ・成人本人の意志にまかしている
- ・親の方針
- ・親にあげていいか聞くようにしているが、ハロウィンの日子どもだけで訪問してくる子ども達にはそのままあげてしまっている
- ・食べたいものを聞く
- ・卵、バターよく見て食べている
- ・価格、鮮度

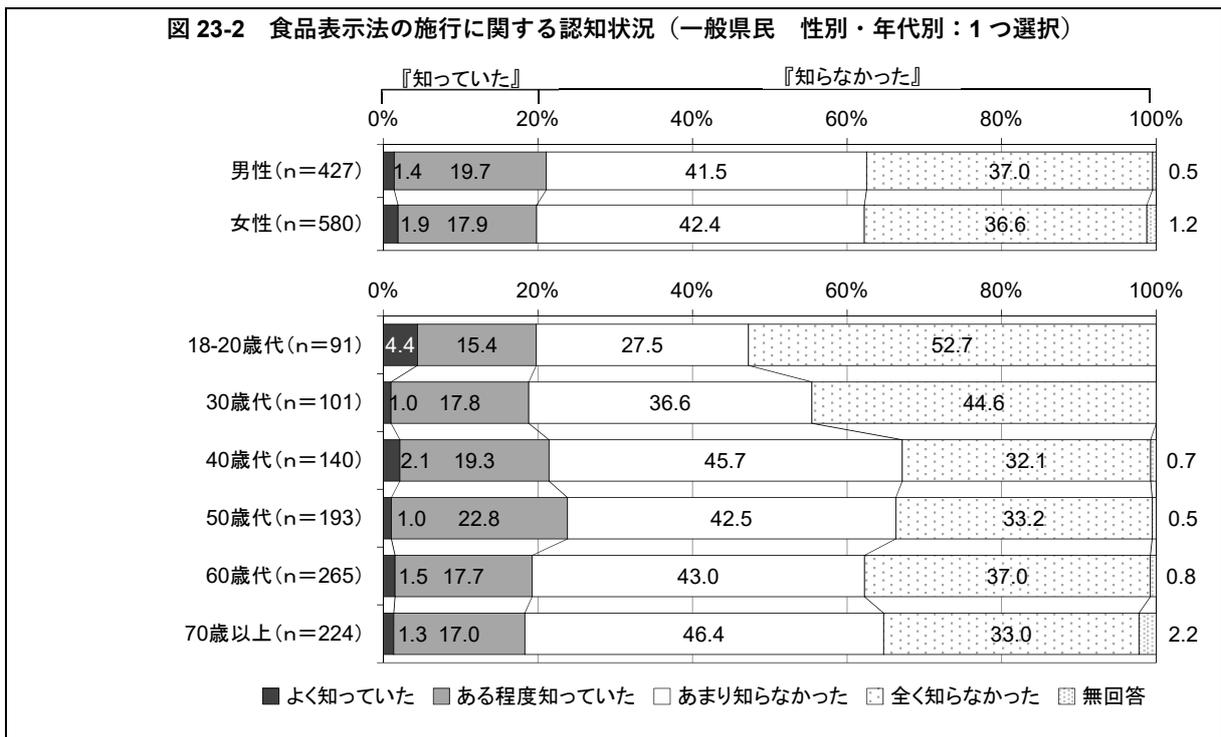
2-10 食品表示について

問 23 2015年4月に食品表示法が改正され、新しい基準ができたり、一部の表示方法が変更になりました（全ての表示が新しくなるのは2020年4月）。
このことを知っていましたか。（1つ選択）

「2015年4月に食品表示法が施行され、新しい基準ができたり、一部の表示方法が変更になったこと」について、「よく知っていた」と「ある程度知っていた」を合わせた『知っていた』とした人の割合（認知度）は20.2%となっている。



性別や年代別では、概ね同様の傾向となっている。

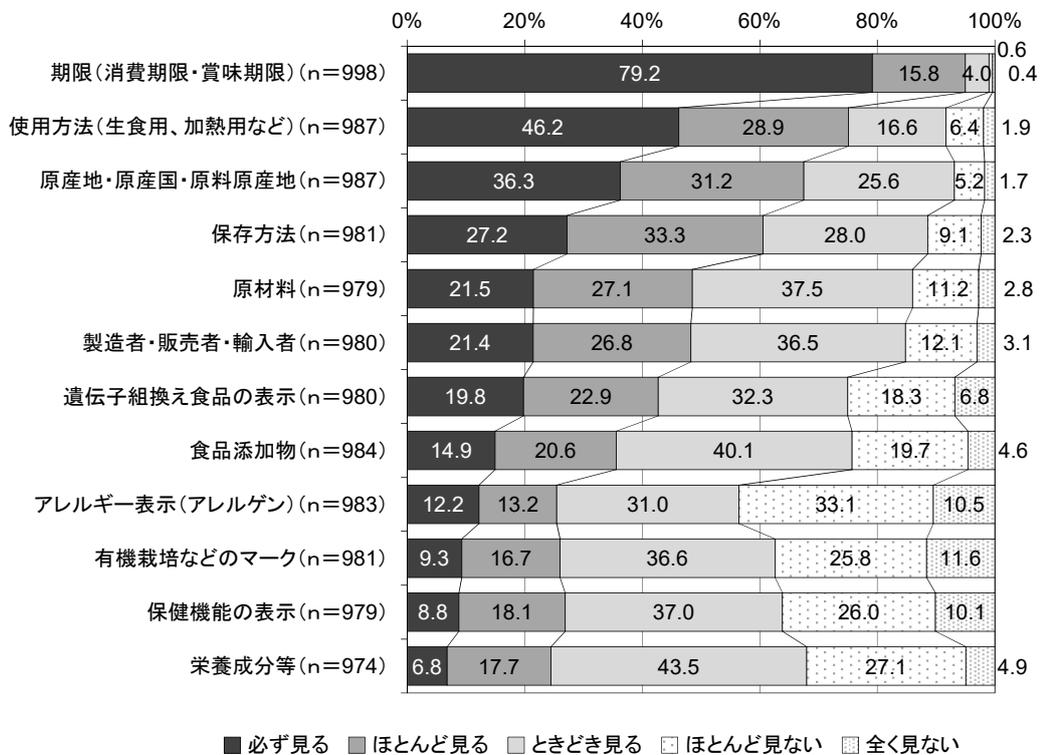


問 24 食品を購入する時、以下の表示について、どのくらい見ていますか(確認していますか)。
(それぞれ1つ選択)

食品を購入する際、表示を確認する頻度について「必ず見る」とした人の割合で比較すると、「期限(消費期限・賞味期限)」が79.2%で最も高く、次いで「使用方法(生食用、加熱用など)」が46.2%、「原産地・原産国・原料原産地」が36.3%となっている。一方、「必ず見る」とした人の割合は、「栄養成分等」が6.8%で最も低く、次いで「保健機能表示」が8.8%、「有機栽培などのマーク」が9.3%、「アレルギー表示(アレルゲン)」が12.2%となっている。

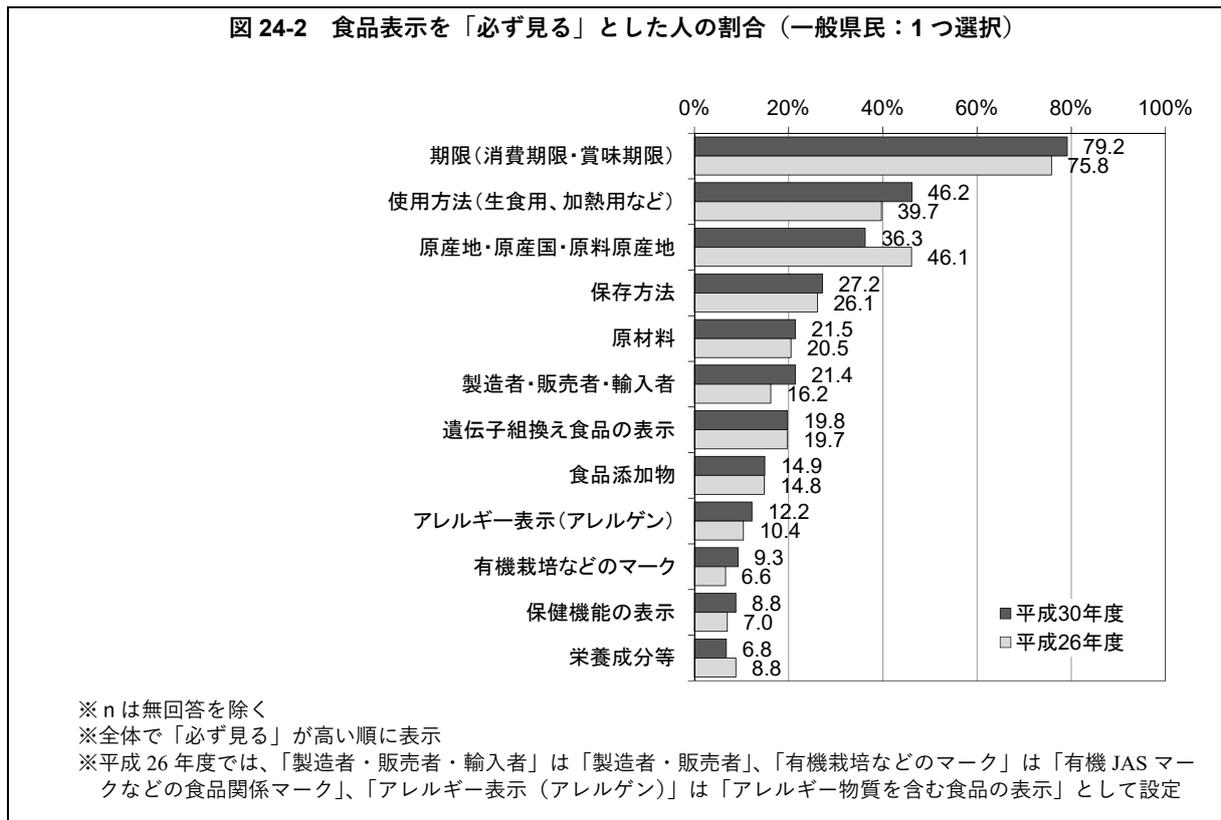
この結果は、前回と同様の傾向となっている。

図 24-1 食品表示を確認する頻度(一般県民:それぞれ1つ選択)

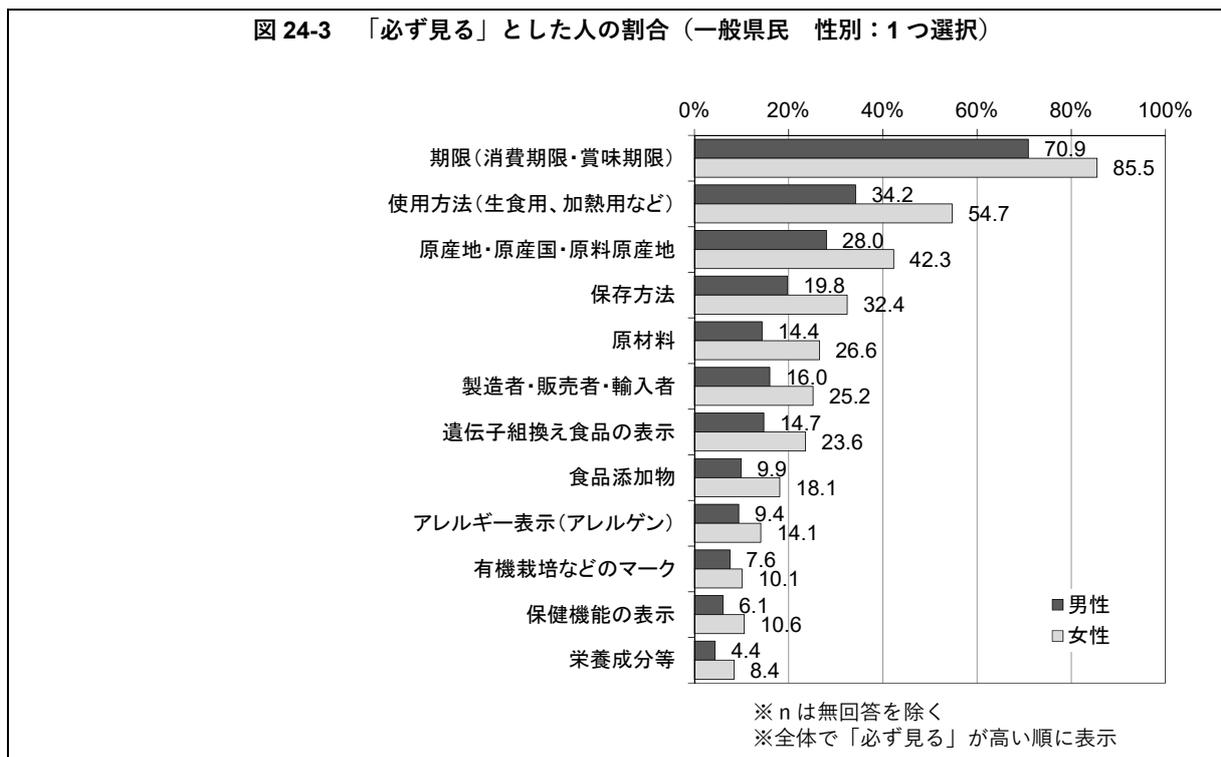


※ n は無回答を除く
※ 「必ず見る」が高い順に表示

「必ず見る」とした人の割合について前回と比較すると、概ね同様の傾向となっている。

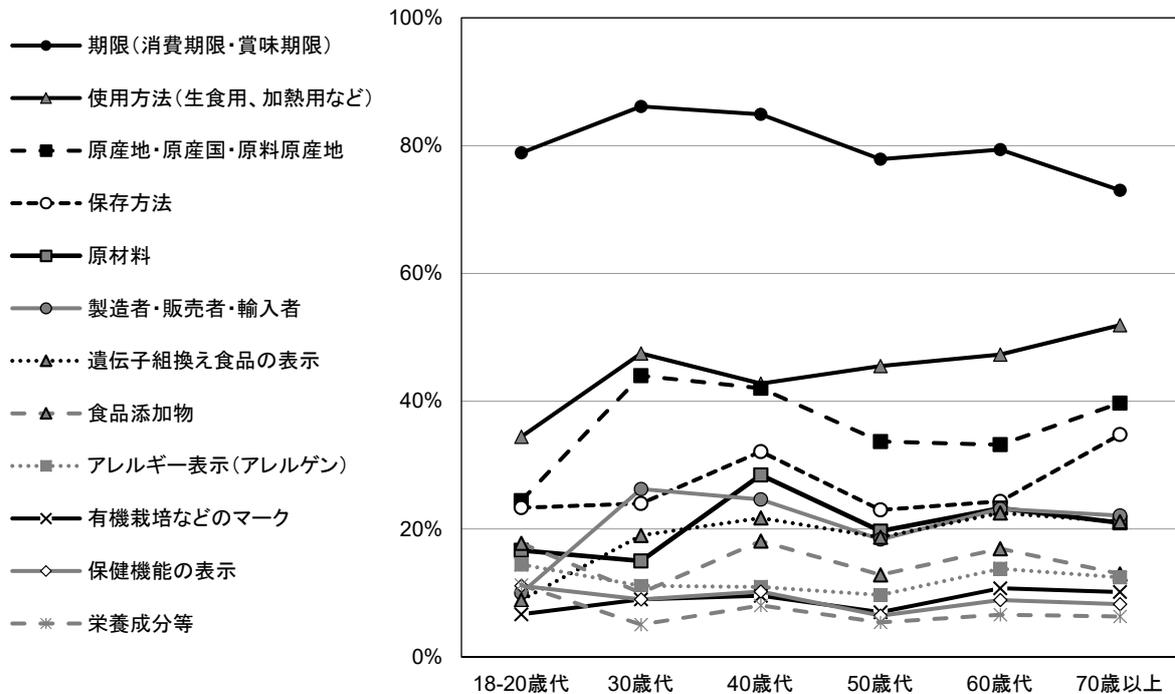


「必ず見る」とした人の割合について性別では、すべての項目において女性が男性より高くなっており、差は「使用方法 (生食用、加熱用など)」で最も大きく、男性が 34.2%、女性が 54.7% となっている。



「必ず見る」とした人の割合について年代別では、すべての年代で「期限（消費期限・賞味期限）」とした人の割合が90%以上で特に高くなっている。次いですべての年代で「使用方法（生食用、加熱用など）」が高くなっており、40歳代は「原産地・原産国・原料原産地」が「使用方法（生食用、加熱用など）」と同程度となっている。

図 24-4 「必ず見る」とした人の割合（一般県民 年代別：1つ選択）



平成 30 年度	18-20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上
期限(消費期限・賞味期限)	78.9	86.1	84.9	77.9	79.4	73.0
使用方法(生食用、加熱用など)	34.4	47.5	42.8	45.5	47.3	51.9
原産地・原産国・原料原産地	24.4	44.0	42.0	33.7	33.2	39.7
保存方法	23.3	24.0	32.1	23.0	24.3	34.8
原材料	16.7	15.0	28.5	19.7	23.3	21.0
製造者・販売者・輸入者	10.0	26.3	24.6	18.4	23.2	22.1
遺伝子組換え食品の表示	8.9	19.0	21.7	18.7	22.5	21.2
食品添加物	17.8	10.0	18.1	12.8	16.9	13.0
アレルギー表示(アレルゲン)	14.4	11.1	10.9	9.7	13.8	12.4
有機栽培などのマーク	6.7	9.0	9.6	7.0	10.7	10.1
保健機能の表示	11.1	9.0	10.2	6.5	8.9	8.3
栄養成分等	11.2	5.1	8.0	5.4	6.6	6.3

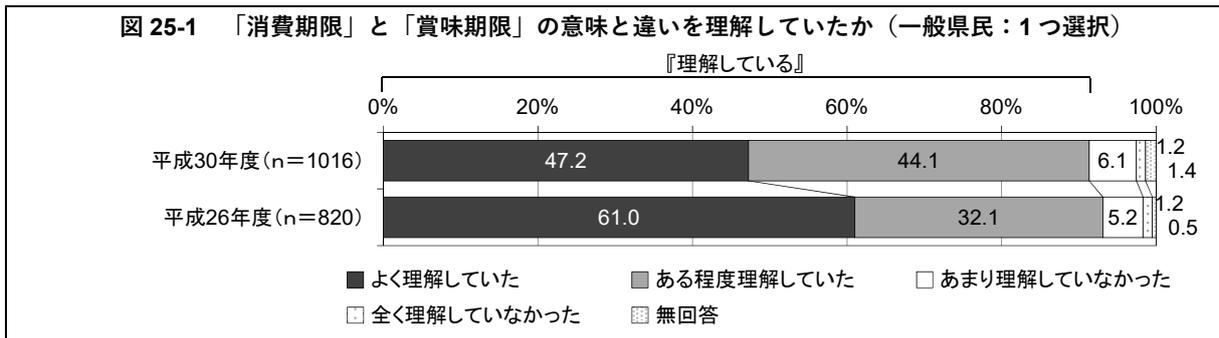
※ n は無回答を除く
 ※全体で「必ず見る」が高い順に表示

2-11 消費期限・賞味期限について

問25 「消費期限」と「賞味期限」の違いを理解していましたか。(1つ選択)

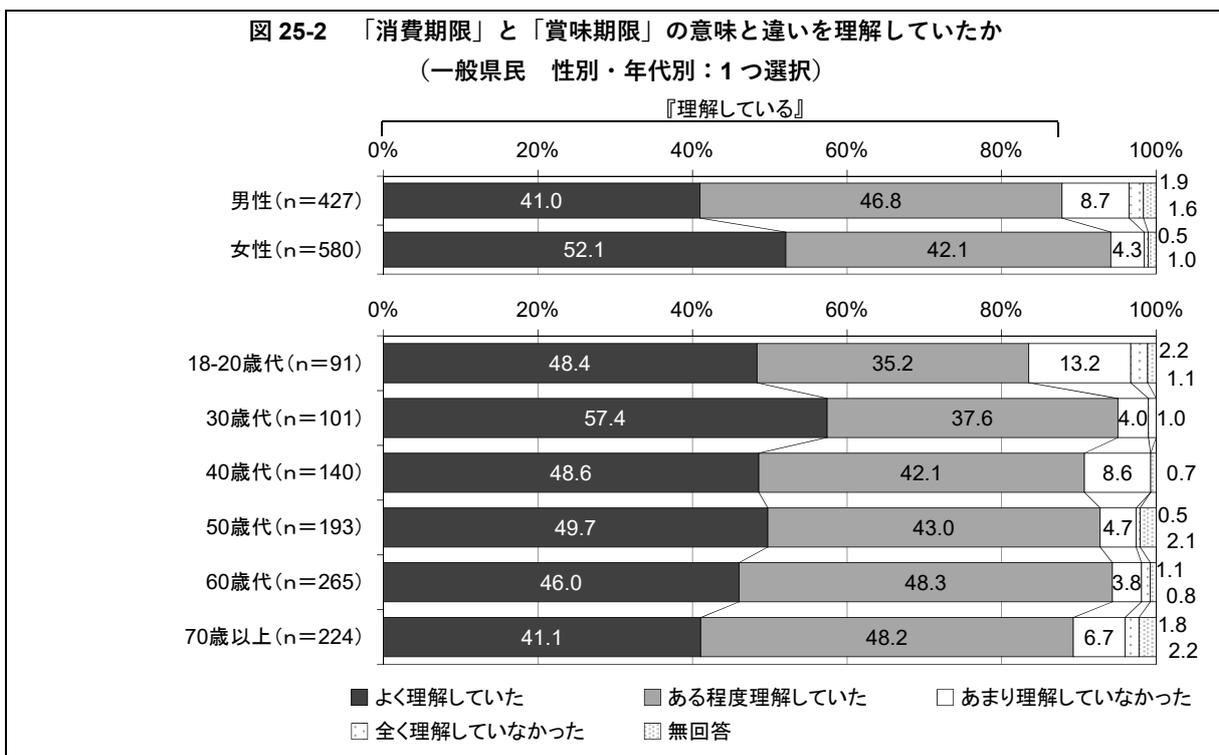
消費期限や賞味期限などの期限表示を「よく理解していた」と「ある程度理解していた」を合わせた『理解している』とした人の割合は91.3%となっている。

前回と比較すると、「よく理解していた」と「ある程度理解していた」を合わせた『理解している』とした人の割合は93.1%で同程度であったが、「よく理解していた」は前回の61.0%から13.8ポイント低くなっている。



「よく理解していた」と「ある程度理解していた」を合わせた『理解している』とした人の割合は、性別では、男性が87.8%、女性が94.2%となっている。

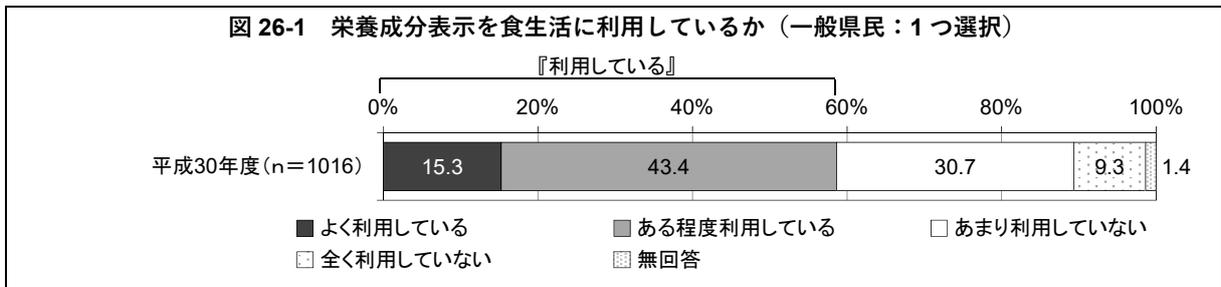
年代別では、『理解している』とした人の割合は、30歳代が95.0%で最も高く、18-20歳代が83.6%で最も低くなっている。また、50歳代以下は「よく理解していた」、60歳代以上は「ある程度理解していた」が最も高くなっている。



2-12 栄養成分表示について

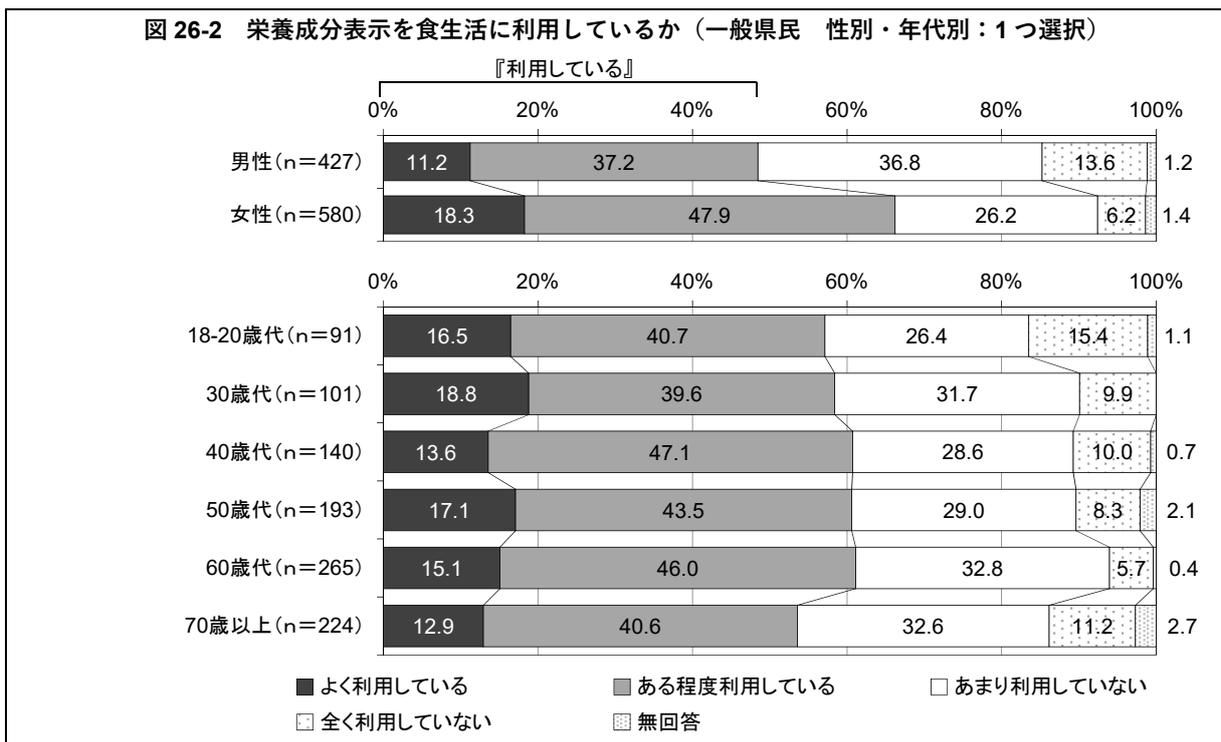
問 26 「栄養成分表示」を見て、カロリーのとり過ぎや減塩など、栄養成分の過不足の確認等、食生活に利用していますか。(1つ選択)

「栄養成分表示の食生活への利用」について、「よく利用している」と「ある程度利用している」を合わせた『利用している』とした人の割合は58.7%となっている。



「よく利用している」と「ある程度利用している」を合わせた『利用している』とした人の割合は、性別では、男性が48.4%、女性が66.2%となっている。

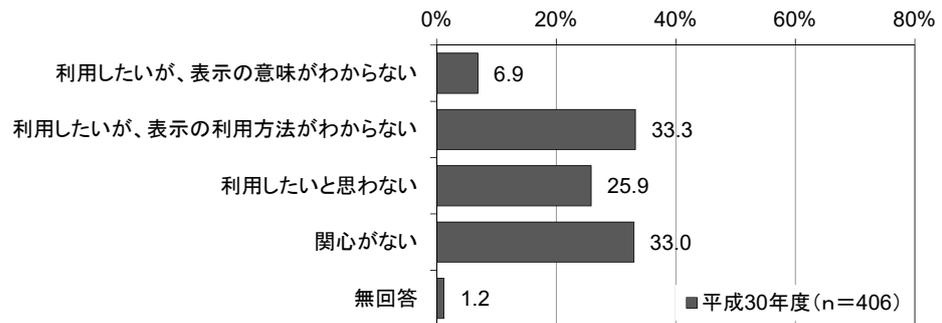
年代別では、概ね『利用している』とした人の割合に差は見られない。



問 27 問 26 で「あまり利用していない」、「全く利用していない」と回答された方にうかがいます。その理由を教えてください。(すべて選択)

「栄養成分表示の食生活への利用」をしていない理由について、「利用したいが、表示の利用方法がわからない」とした人の割合が 33.3%、「関心がない」の割合が 33.0%と同程度に高く、次いで「利用したいと思わない」が 25.9%となっている。

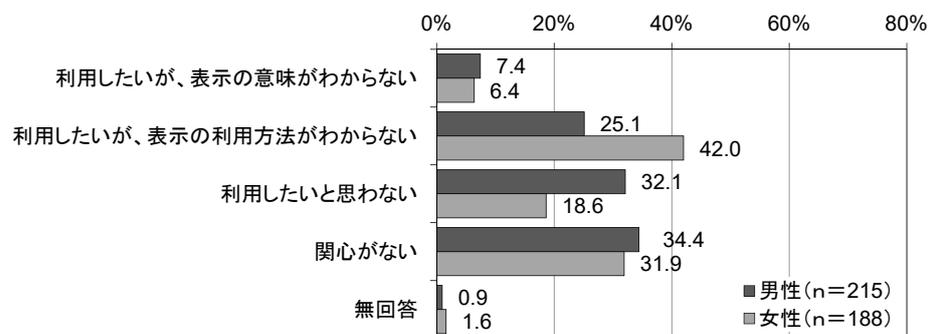
図 27-1 栄養成分表示を食生活に利用していない理由（一般県民：1つ選択）



性別では、男性は「関心がない」とした人の割合が 34.4%で最も高く、次いで「利用したいと思わない」が 32.1%と同程度に高くなっている。女性は「利用したいが、表示の利用方法がわからない」が 42.0%で最も高く、次いで「関心がない」が 31.9%となっている。

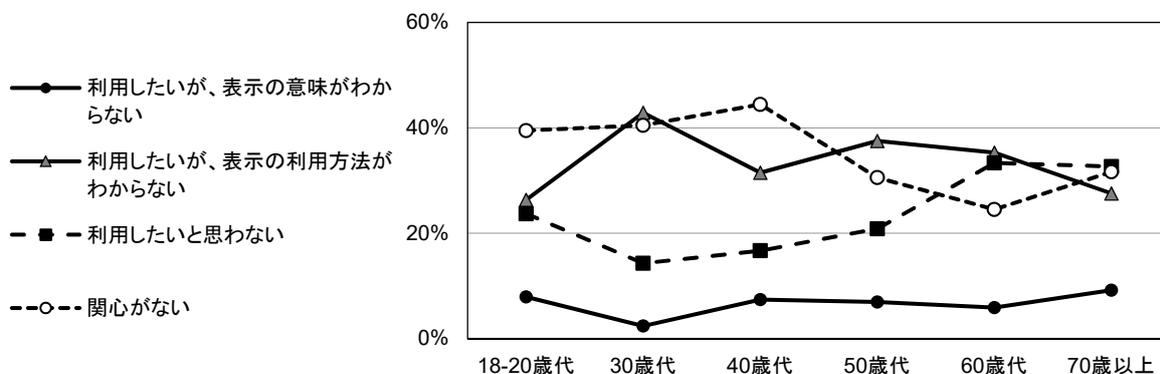
また、「利用したいが、表示の利用方法がわからない」は女性の割合が高く、「利用したいと思わない」は男性の割合が高くなっている。

図 27-2 栄養成分表示を食生活に利用していない理由（一般県民 性別：1つ選択）



年代別では、「利用したいが、表示の利用方法がわからない」とした人の割合は、30歳代が42.9%で最も高くなっている。また、「利用したいと思わない」は30歳代以上で概ね高い年代ほど高くなっている。「関心がない」は40歳代以下で高く、50歳以上で低くなる傾向がうかがえる。

図 27-3 栄養成分表示を食生活に利用していない理由（一般県民 年代別：1つ選択）



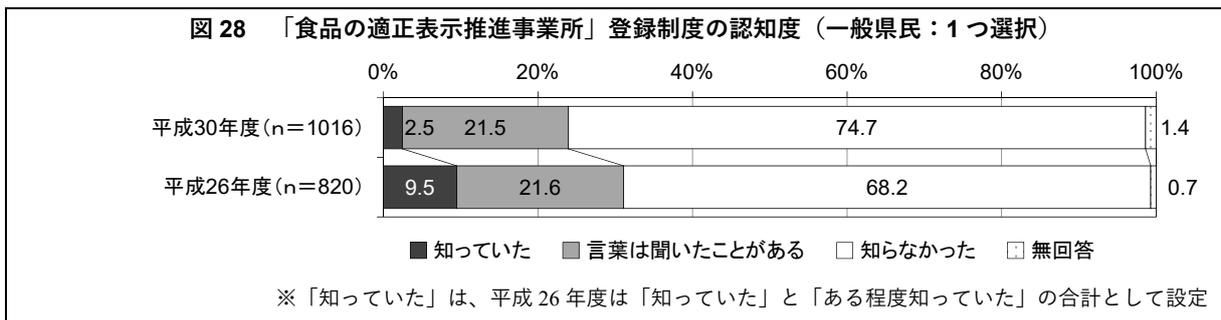
平成 30 年度	18-20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上
n	38	42	54	72	102	98
利用したいが、表示の意味がわからない	7.9	2.4	7.4	6.9	5.9	9.2
利用したいが、表示の利用方法がわからない	26.3	42.9	31.5	37.5	35.3	27.6
利用したいと思わない	23.7	14.3	16.7	20.8	33.3	32.7
関心がない	39.5	40.5	44.4	30.6	24.5	31.6

2-13 「食品の適正表示推進事業所」登録制度について

問28 「食品の適正表示推進事業所」登録制度について知っていますか。(1つ選択)

「食品の適正表示推進事業所」登録制度について、「知っていた」とした人の割合2.5%と「言葉は聞いたことがある」21.5%を合わせた『言葉の認知度』は24.0%となっている。「食品の適正表示推進事業所」登録制度について、「知っていた」と「言葉は聞いたことがある」を合わせた『知っていた』とした人の割合(言葉の認知度)は24.0%となっている。

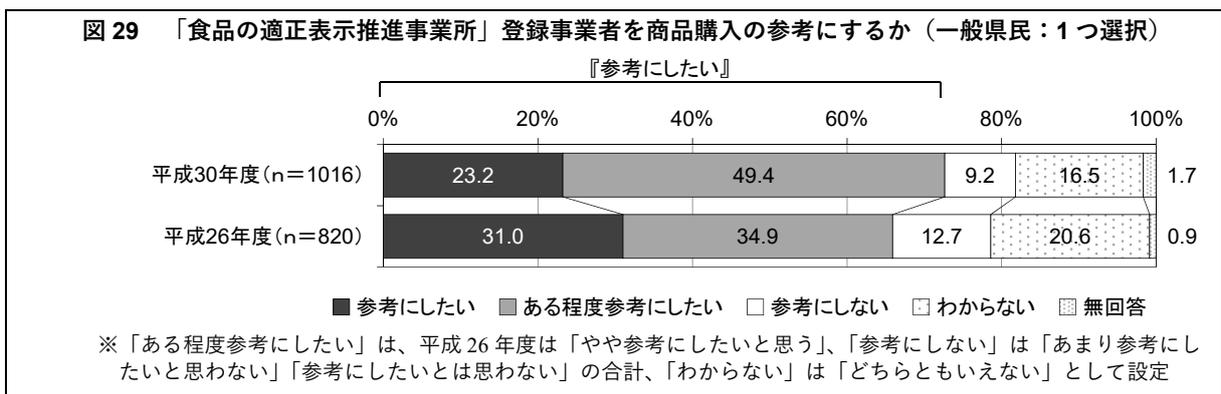
前回と比較すると、認知度は前回の31.1%から7.1ポイント低くなっている。



問29 食品の製造工場や販売店が「食品の適正表示推進事業所」として登録されていることを、商品購入の際の参考にしたいと思いますか。(1つ選択)

「商品購入の際に登録事業所であることを参考にするか」について、「参考にしたい」と「ある程度参考にしたい」を合わせた『参考にしたい』とした人の割合は72.6%となっている。

前回と比較すると、『参考にしたい』とした人の割合は前回の65.9%から6.7ポイント高くなっている。

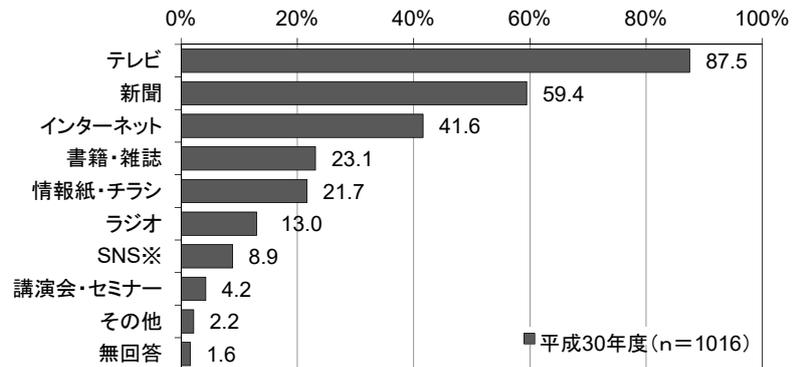


2-14 食の安全に関する情報について

問 30 食の安全に関する情報を何から入手していますか。(すべて選択)

「食の安全に関する情報を入手している媒体」について、「テレビ」とした人の割合が 87.5%で最も高く、次いで「新聞」59.4%、「インターネット」41.6%となっている。

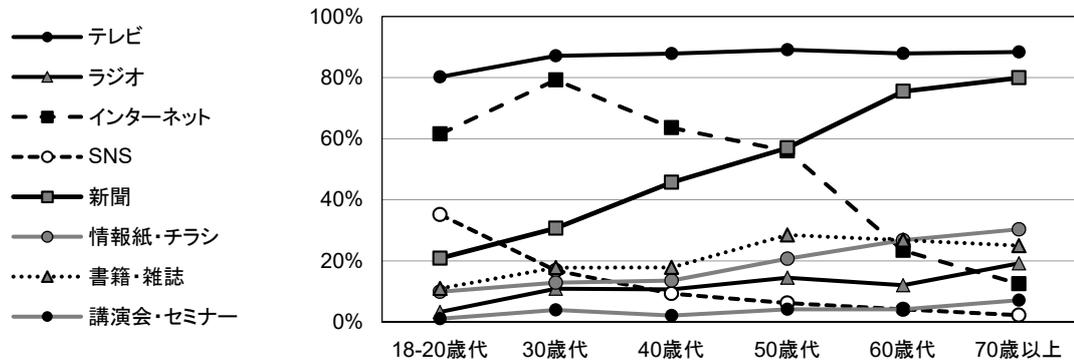
図 30-1 食の安全に関する情報を入手している媒体（一般県民：すべて選択）



※「SNS」は「SNS（フェイスブック、ツイッター等のソーシャルメディア）」として設定

年代別では、すべての年代で「テレビ」とした人の割合が 80%以上で最も高くなっている。また、「新聞」は高い年代ほど高く、70 歳以上では 79.9%となっている。「インターネット」は 30 歳代が 79.2%で最も高く、18-20 歳代を除き高い年代ほど低い傾向がうかがえる。また、18-20 歳代は「SNS」が 35.2%で比較的高くなっている。

図 30-2 食の安全に関する情報を入手している媒体（一般県民 年代別：すべて選択）



平成 30 年度 n	18-20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上
	テレビ	80.2	87.1	87.9	89.1	87.9
ラジオ	3.3	10.9	10.7	14.5	12.1	19.2
インターネット	61.5	79.2	63.6	56.0	23.4	12.5
SNS	35.2	16.8	9.3	6.2	4.2	2.2
新聞	20.9	30.7	45.7	57.0	75.5	79.9
情報紙・チラシ	9.9	12.9	13.6	20.7	26.8	30.4
書籍・雑誌	11.0	17.8	17.9	28.5	26.8	25.0
講演会・セミナー	1.1	4.0	2.1	4.1	4.2	7.1

【その他の主な内容】

友人との会話

家族の話

雑談の中で

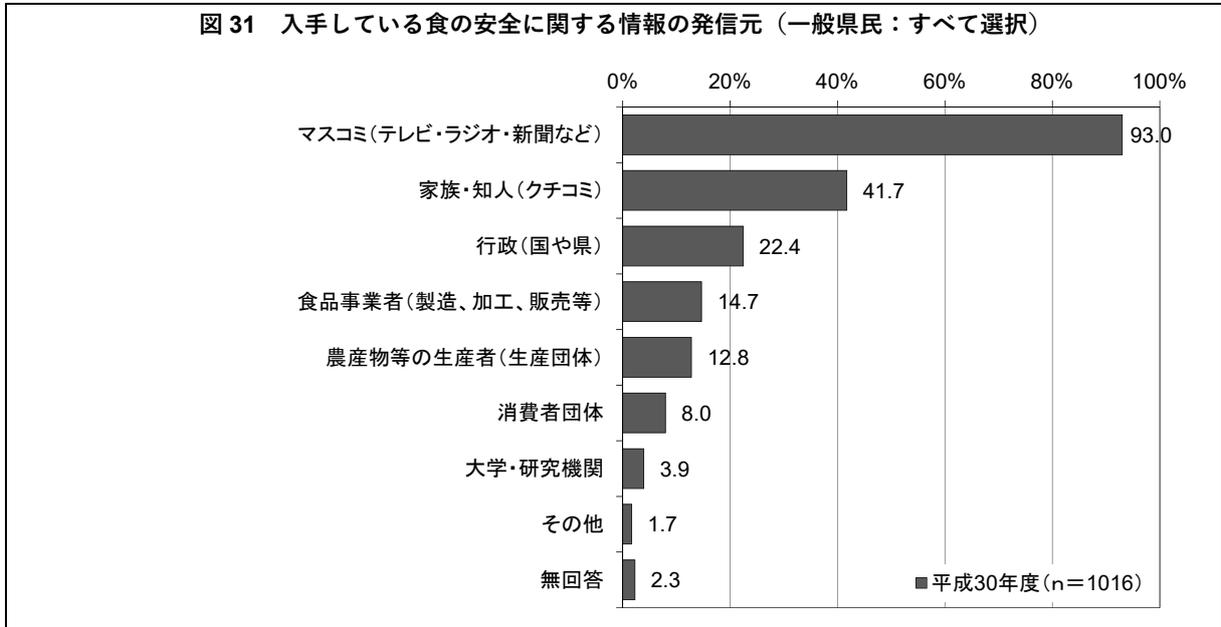
大学の講義

気にしない

入手していない

問 31 食の安全に関する情報をどんな発信元から入手していますか。(すべて選択)

「入手している情報の発信元」について、「マスコミ（テレビ・ラジオ・新聞など）」とした人の割合が93.0%で最も高く、次いで「家族・知人（クチコミ）」41.7%、「行政（国や県）」22.4%となっている。



【その他の主な内容】

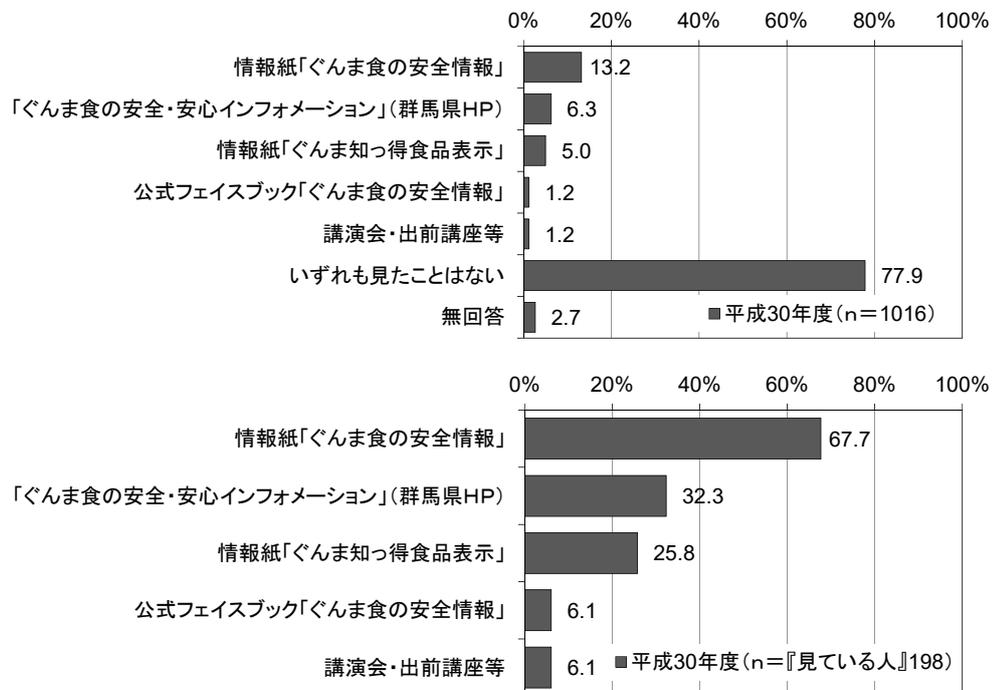
栄養士	NPO	市の料理講習
本	雑誌	生協
民間団体	学校関係の手紙	関心がない

問 32 群馬県では、県ホームページのほか、情報紙やフェイスブック等を使って食の安全に関する情報を発信しています。以下の情報をご覧になったことはありますか。(すべて選択)

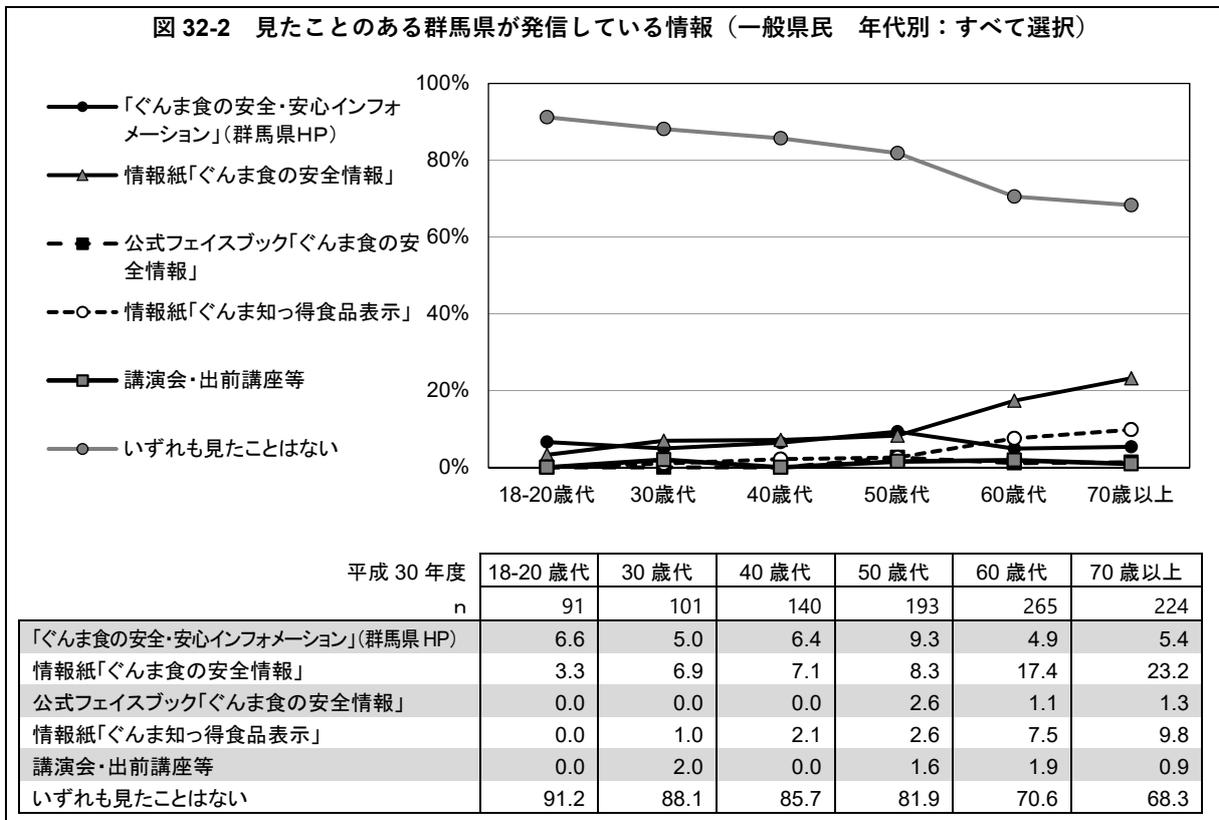
群馬県が発信している情報の中で「見たことがある」とした人の割合（認知度）が最も高かったのは、「情報紙『ぐんま食の安全情報』」で13.2%、次いで「『ぐんま食の安全・安心インフォメーション』（群馬県ホームページ）」が6.3%、「情報紙『ぐんま知っ得食品表示』」が5.0%、「公式フェイスブック『ぐんま食の安全情報』」が1.2%、「講演会・出前講座等」が1.2%となっている。

また、いずれかの県情報を見たことのある人の割合（県情報の認知度）は19.5%、「いずれも見たことはない」は77.9%となっている。いずれかの県情報を見たことのある『見ている人』について見ると、「情報誌『ぐんま食の安全情報』」を見たことがある人の割合は67.7%となっている。

図 32-1 見たことのある群馬県が発信している情報（認知度）（一般県民：すべて選択）

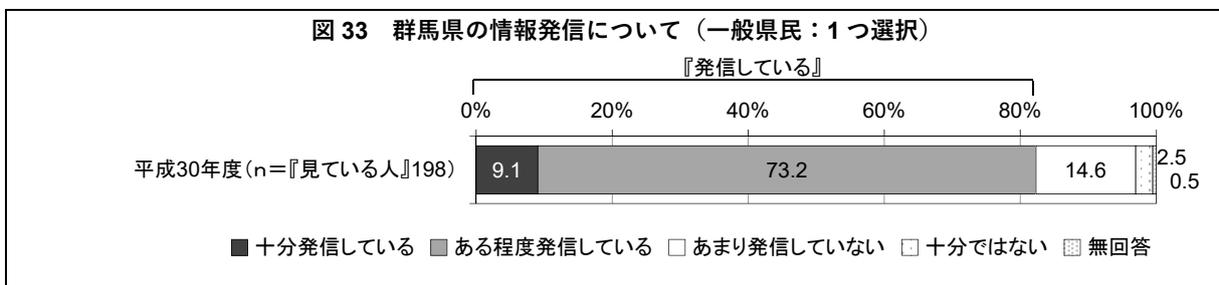


年代別では、すべての年代で「いずれも見たことはない」とした人の割合が最も高いが、県情報で最も認知度の高い「情報紙『ぐんま食の安全情報』」は、高い年代ほど認知度が高い傾向がうかがえる。



問 33 群馬県の情報発信について、どのように思いますか。（1つ選択）

いずれかの県情報を見たことのある『見ている人』に対し、「群馬県の情報発信についてどのように思っているか」を調査した結果、「十分発信している」と「ある程度発信している」を合わせた『発信している』とした人の割合が82.3%となっている。

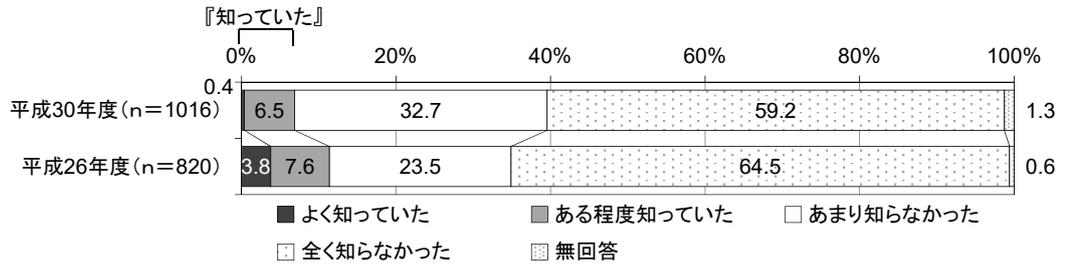


2-15 リスクコミュニケーションについて

問 34 「リスクコミュニケーション」について、食品の様々なリスクに関する情報を関係者で共有し、お互いに意見交換をしながら理解を深めることだと知っていましたか。(1つ選択)

「リスクコミュニケーション」について、前回のリスクコミュニケーションという言葉を知っていたと「ある程度知っていた」を合わせた『言葉を知っていた』人の割合（言葉の認知度）は 11.4%であった。今回のリスクコミュニケーションの意味を「よく知っていた」と「ある程度知っていた」を合わせた『知っていた』人の割合（認知度）は 6.9%となっている。

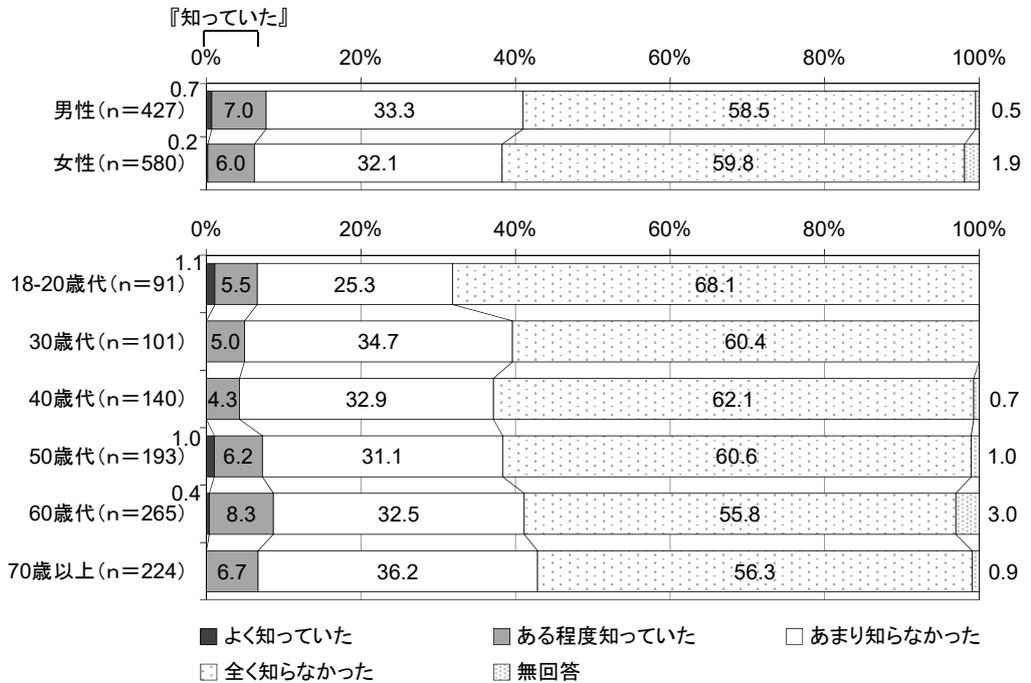
図 34-1 リスクコミュニケーションの認知度（一般県民：1つ選択）



※平成 26 年度は認知度。「知っていた」「ある程度知っていた」「あまり知らなかった」「知らなかった」として設定

認知度に性別による差は見られないが、年代別では、18-20 歳代で「全く知らなかった」とした人の割合が 68.1%で他の年代より高くなっている。

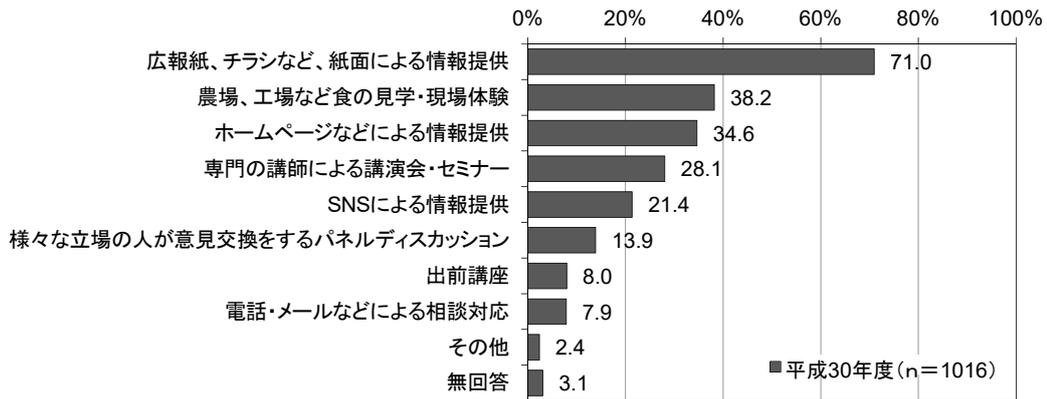
図 34-2 リスクコミュニケーションの認知度（一般県民 性別・年代別：1つ選択）



問 35 食品の安全性について理解を深める方法として、どのような手段が有効だと思いますか。(すべて選択)

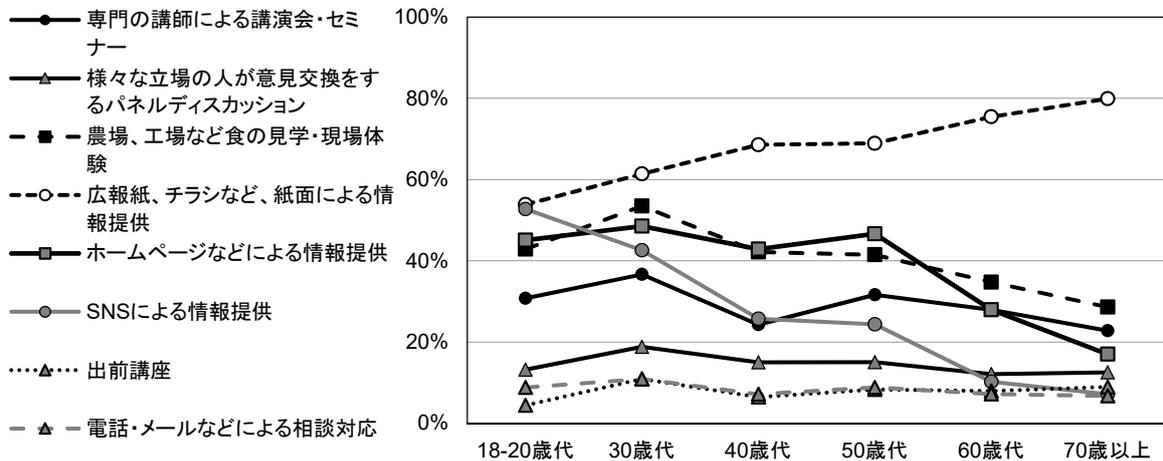
「食品の安全性について理解を深める有効な手段」として、「広報紙、チラシなど、紙面による情報提供」とした人の割合が71.0%で最も高く、次いで「農場、工場など食の見学・現場体験」が38.2%、「ホームページなどによる情報提供」が34.6%となっている。

図 35-1 食品の安全性について理解を深める有効な方法（一般県民：すべて選択）



年代別では、すべての年代で「広報紙、チラシなど、紙面による情報提供」とした人の割合が最も高く、高い年代ほど高い傾向がうかがえる。また、18-20歳代は「SNSによる情報提供」が52.7%で同程度に高くなっている。

図 35-2 食品の安全性について理解を深める有効な方法（一般県民 年代別：すべて選択）



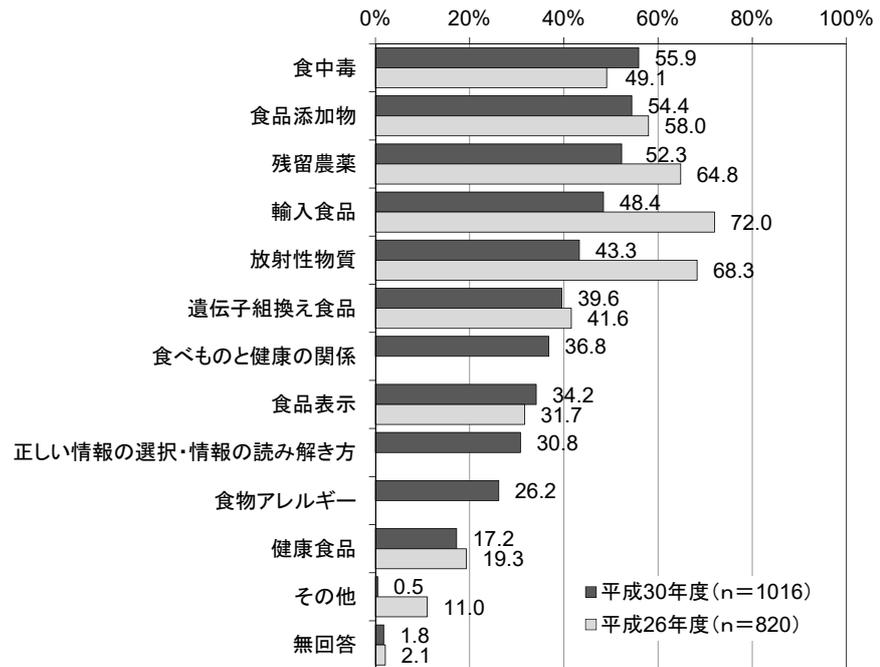
	平成 30 年度					
	18-20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上
n	91	101	140	193	265	224
専門の講師による講演会・セミナー	30.8	36.6	24.3	31.6	27.9	22.8
様々な立場の人が意見交換をするパネルディスカッション	13.2	18.8	15.0	15.0	12.1	12.5
農場、工場など食の見学・現場体験	42.9	53.5	42.1	41.5	34.7	28.6
広報紙、チラシなど、紙面による情報提供	53.8	61.4	68.6	68.9	75.5	79.9
ホームページなどによる情報提供	45.1	48.5	42.9	46.6	27.9	17.0
SNSによる情報提供	52.7	42.6	25.7	24.4	10.2	7.1
出前講座	4.4	10.9	6.4	8.3	7.9	8.9
電話・メールなどによる相談対応	8.8	10.9	7.1	8.8	7.2	6.7

問 36 食品の安全性について、どんな情報を知りたいと思いますか。(すべて選択)

「食品の安全性について知りたい情報」について、「食中毒」とした人の割合が 55.9%で最も高く、次いで「食品添加物」54.4%、「残留農薬」52.3%となっている。

なお、前回「知りたい情報」とした人の割合が高かった「輸入食品」や「放射性物質」は 20 ポイント以上低くなっている。

図 36 食品の安全性について知りたい情報（一般県民：すべて選択）



※平成 30 年度は「食品の安全性について、どんな情報を知りたいと思いますか」、平成 26 年度は「行政が行う食品の安全性に関する「リスクコミュニケーション」で、どのようなテーマを取り上げてもらいたいですか」として設定。「食べものと健康の関係」「正しい情報の選択・情報の読み解き方」「食物アレルギー」は平成 30 年度のみ設定。また、「食品安全に関する行政の取組」「食品安全に関する事業者の取組」（いずれも非表示）は平成 26 年度のみ設定

【問 35 その他の主な内容】

- ・学校の授業
- ・小中高大など教育機関での授業
- ・高齢者世帯になるとインターネット、スマホなどは日常生活に無縁となる場合が多い。交通弱者でもあるので、各地域の公民館活動の中にこのような話題が取り上げられれば、健康に直結することなので、無理がなくてよいと思います
- ・シニア向けの、わかりやすい講習があった方がよい
- ・スーパーなど購入する場所での表示。消費者に目にとまるようにする
- ・「食の安全に関する情報」をどこに発信しているかを、周知させる
- ・県内を巡回し、祭事で 1 ブース設け、啓蒙活動を地道に行う
- ・テレビなどで、食の安全についてのニュースを多く流す
- ・食品を販売している場で提供
- ・テレビなどの情報提供
- ・TVCM
- ・わからない

【問 36 その他の主な内容】

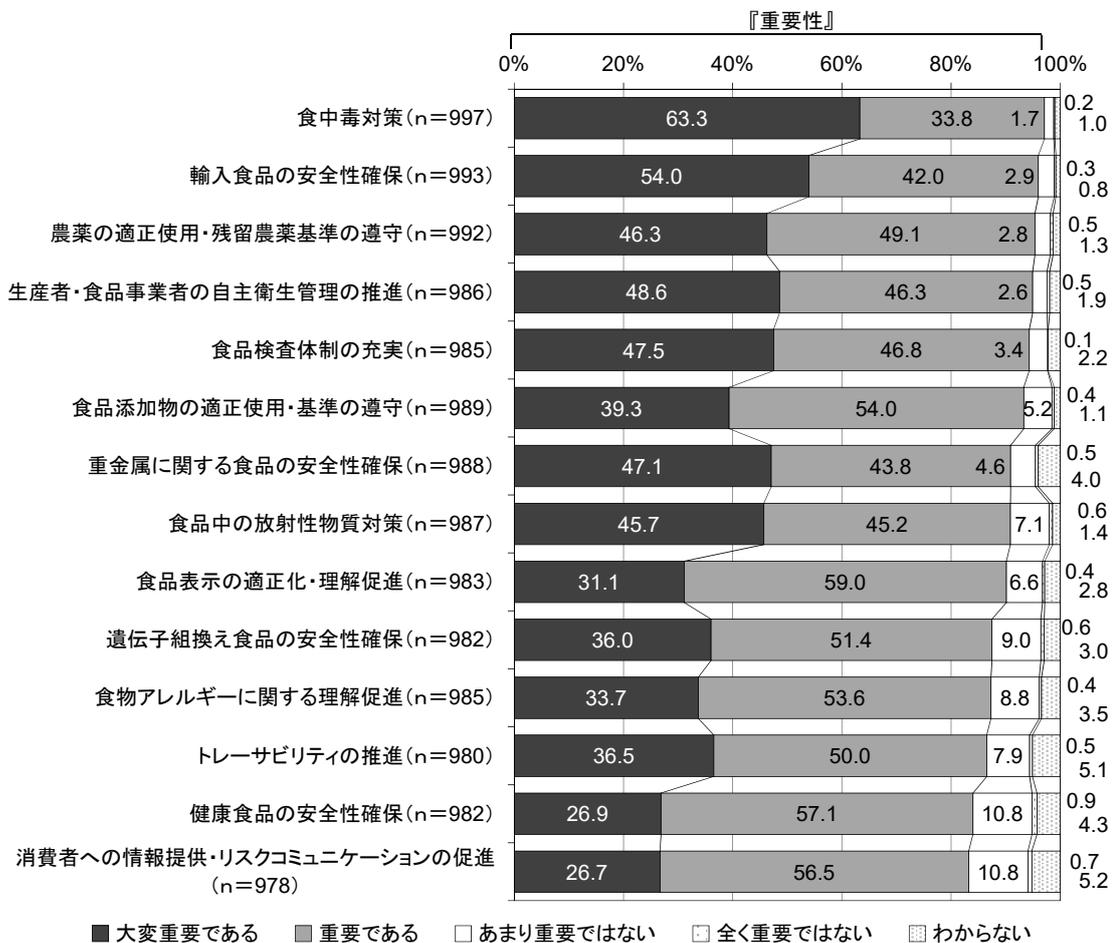
- ・本当の情報
- ・関心なし

2-16 食の安全・安心に関する県の施策について

問 37 食の安全・安心を確保するため、どのような施策を望みますか。各項目について重要性（重要度）をお答えください。（それぞれ1つ選択）

「県に望む施策の重要性」について、「大変重要である」と「重要である」を合わせた『重要性』を比較すると、「食中毒対策」が97.1%で最も高く、次いで「輸入食品の安全性確保」が96.0%、「農薬の適正使用・残留農薬の基準遵守」が95.4%など、上位9項目がいずれも90%以上となっている。

図 37-1 食品の安全・安心確保のため県に望む施策の『重要性』（一般県民：それぞれ1つ選択）



※ nは無回答を除く
 ※『重要性』が高い順に表示

前回と比較すると、県に望む施策の『重要性』は、前回3位であった「食中毒対策」が1位となっている。各施策とも『重要性』の割合が前回と同程度もしくは増加しており、特に「食品表示の適正化・理解促進」、「トレーサビリティの推進」、「健康食品の安全性確保」、「消費者への情報提供・リスクコミュニケーションの促進」の4項目は10ポイント以上高くなっている。

また、前述の「問3(1)項目別に見た食品の安全性への不安」の結果と比較すると、『不安』が最も高い「輸入食品」は、『重要性』も「食中毒」に次いで高くなっているが、それ以外の項目は、『不安』の高さと、県に望む施策の『重要性』との関連は見られない。

表37 食品の安全への『不安』と食の安全に関する県の施策の『重要性』（一般県民：それぞれ1つ選択）

平成30年度			平成30年度			平成26年度		
順位	項目	『不安』 (%)	順位	項目	『重要性』 (%)	増減	『重要性』 (%)	順位
1	輸入食品	78.3	1	食中毒対策	97.1	↑	92.9	3
2	食品の偽装表示	71.0	2	輸入食品の安全性確保	96.0	←	96.0	1
3	放射性物質	62.1	3	農薬の適正使用・残留農薬 基準の遵守	95.4	↑	94.5	2
4	食品添加物	58.0	4	生産者・食品事業者の自主 衛生管理の推進	94.9	↑	92.9	4
5	食中毒	57.6	5	食品検査体制の充実	94.3	↑	92.8	5
6	遺伝子組換え食品	57.5	6	食品添加物の適正使用・基 準の遵守	93.3	↑	90.4	6
7	残留農薬	55.9	7	重金属に関する食品の安全 性確保	90.9	↑	89.6	8
8	重金属	51.0	8	食品中の放射性物質対策	90.9	↑	90.3	7
9	食物アレルギー	38.1	9	食品表示の適正化・理解促 進	90.1	↑↑	78.1	11
10	健康食品	32.7	10	遺伝子組換え食品の安全 性確保	87.5	↑	79.9	9
			11	食物アレルギーに関する理 解促進	87.3	↑	79.9	10
			12	トレーサビリティの推進	86.5	↑↑	66.1	14
			13	健康食品の安全性確保	84.0	↑↑	69.4	13
			14	消費者への情報提供・リス クコミュニケーションの促進	83.2	↑↑	72.1	12

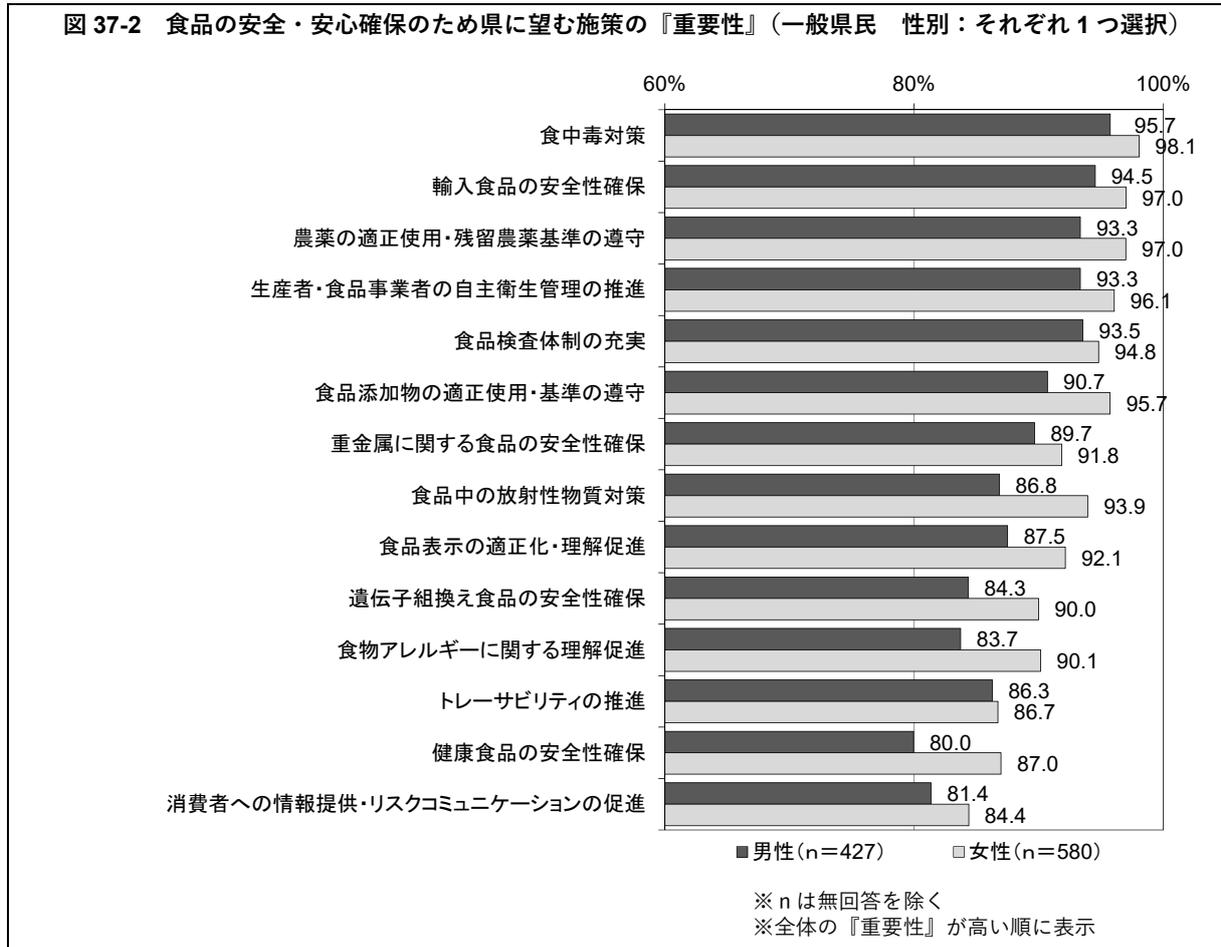
※『不安』：「不安」と「どちらかといえば不安」を合わせたもの。『重要性』：「大変重要である」と「重要である」を合わせたもの

※増減における「↑↑」は、平成26年度から『重要性』が10ポイント以上高くなったもの

※平成26年度は「非常に重要である」「重要である」「それほど重要ではない」「重要とは思わない」「わからない」として設定

※項目によって、平成26年度と表現が若干異なる

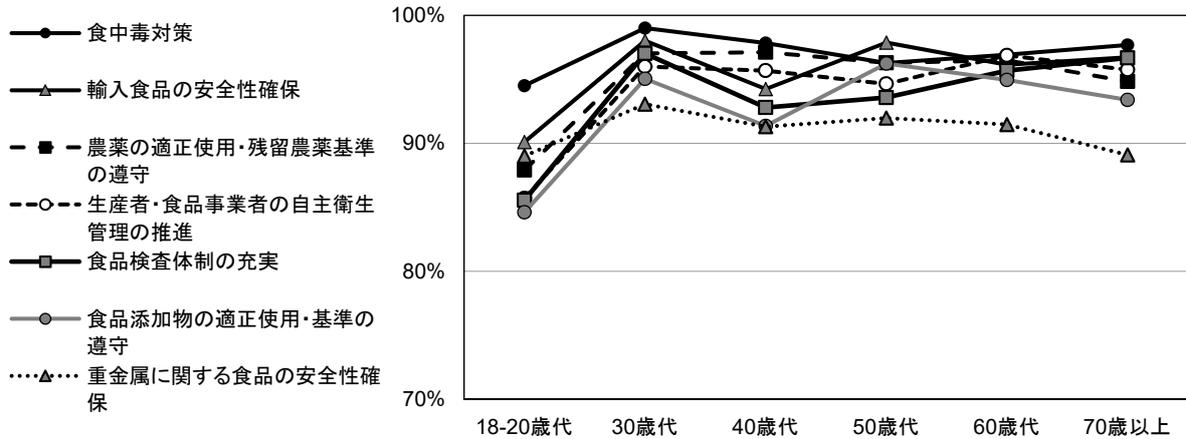
性別で見ても、全体の結果と同様の傾向となっているが、すべての施策において男性より女性が高くなっている。



年代別で見ても、全体の結果と同様の傾向となっているが、18-20歳代は、ほとんどの施策について、他の年代より『重要性』が低くなっている。

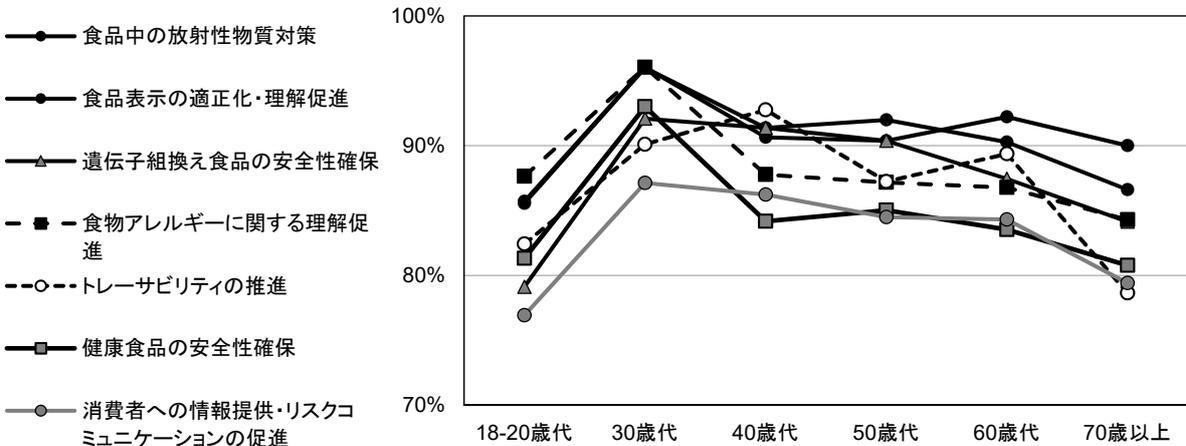
図 37-3 食品の安全・安心確保のため県に望む施策の『重要性』（一般県民 年代別：それぞれ1つ選択）

【上位7項目】



平成 30 年度	18-20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上
食中毒対策	94.5	99.0	97.8	96.3	96.9	97.7
輸入食品の安全性確保	90.1	98.0	94.2	97.9	96.1	96.7
農薬の適正使用・残留農薬基準の遵守	87.9	97.0	97.1	96.3	96.5	94.8
生産者・食品事業者の自主衛生管理の推進	85.7	96.0	95.7	94.7	96.9	95.8
食品検査体制の充実	85.6	97.0	92.8	93.6	95.7	96.7
食品添加物の適正使用・基準の遵守	84.6	95.0	91.4	96.2	95.0	93.4
重金属に関する食品の安全性確保	89.0	93.1	91.3	92.0	91.5	89.1

【下位7項目】



平成 30 年度	18-20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上
食品中の放射性物質対策	85.7	96.0	90.6	90.4	92.2	90.0
食品表示の適正化・理解促進	85.6	96.0	91.4	92.0	90.3	86.6
遺伝子組換え食品の安全性確保	79.1	92.1	91.4	90.4	87.5	84.1
食物アレルギーに関する理解促進	87.6	96.0	87.8	87.2	86.8	84.3
トレーサビリティの推進	82.4	90.1	92.8	87.2	89.4	78.6
健康食品の安全性確保	81.3	93.0	84.2	85.0	83.5	80.8
消費者への情報提供・リスクコミュニケーションの促進	76.9	87.1	86.2	84.5	84.3	79.4

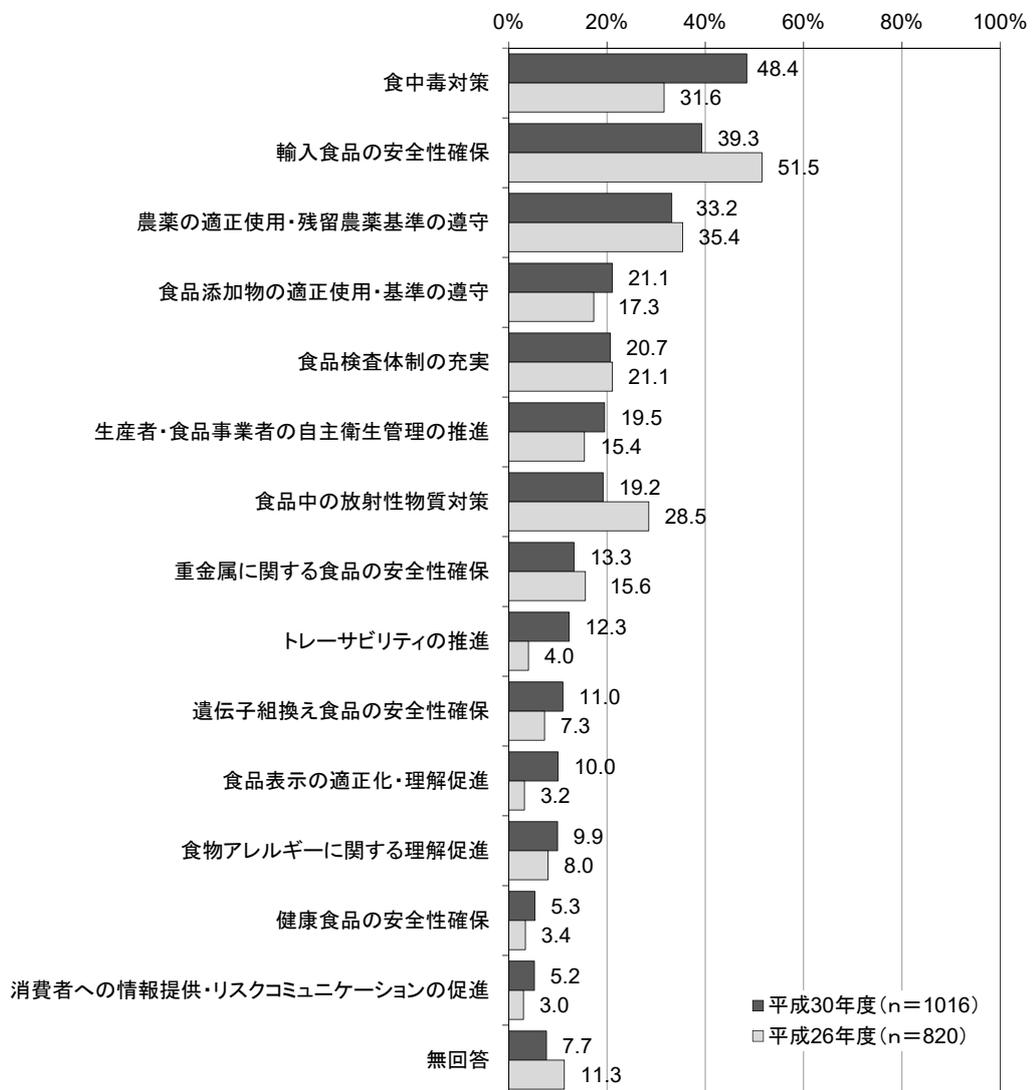
※ n は無回答を除く

問 38 問 37 の項目のうち、特に重点的な取組を望む項目の番号をお書きください。
(番号を3つまで記入)

「県に対して特に重点的な取組を望む施策」は、概ね『重要性』の結果と同様の傾向となっており、「食中毒対策」とした人の割合が48.4%で最も高く、次いで「輸入食品の安全確保」が39.3%、「農薬の適正使用・残留農薬基準の遵守」が33.2%となっている。

前回と比較すると、「食中毒対策」とした人の割合は前回の31.6%から16.8ポイント高く、「輸入食品の安全確保」は51.5%から12.2ポイント低くなっている。また、「食品中の放射性物質対策」は28.5%から19.2%に9.3ポイント低くなっている。

図 38 特に重点的な取組を望む施策（一般県民：3つまで選択）



※平成30年度値が高い順に表示

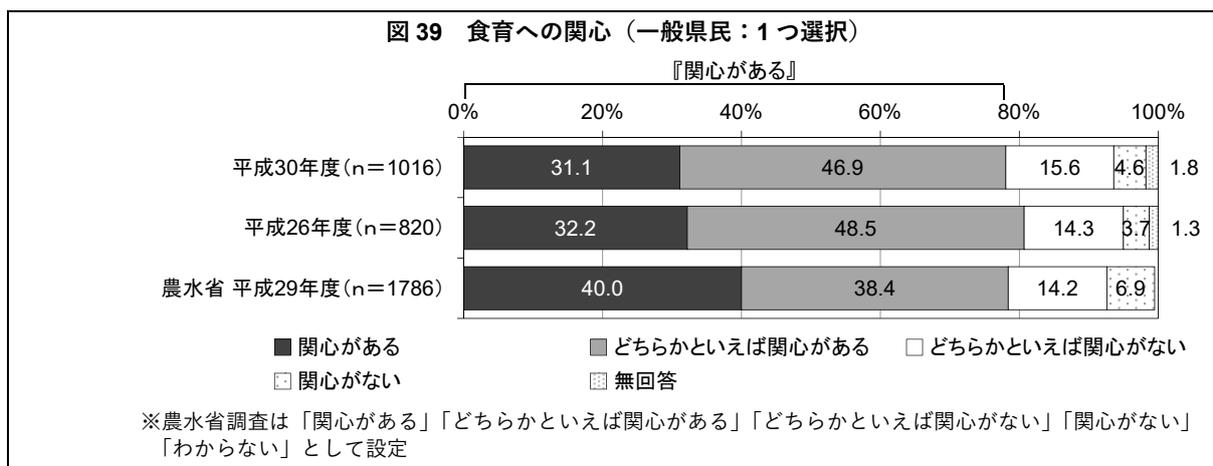
※項目によって平成26年度と表現が若干異なる

2-17 食育について

問 39 「食育」に関心がありますか。(1つ選択)

「関心がある」と「どちらかといえば関心がある」を合わせた『関心がある』とした人の割合は78.0%となっている。

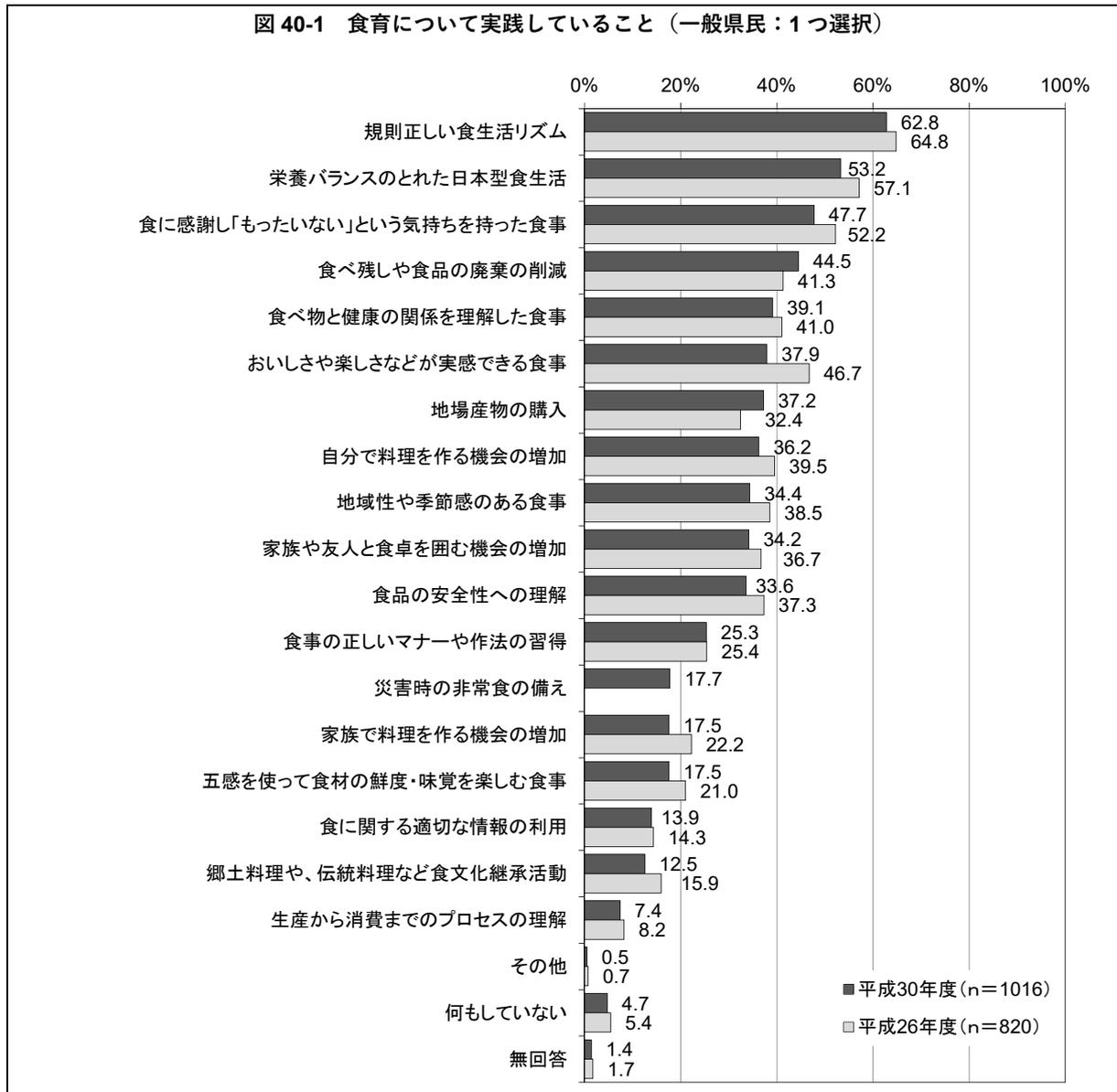
前回と比較すると、『関心がある』人の割合は前回の80.7%と同程度となっている。また、農水省調査※と比較すると、『関心がある』とした人の割合は農水省の78.4%と同程度となっている。



問40 食育について、どのようなことを実践していますか。(すべて選択)

食育についての実践内容は、「規則正しい食生活リズム」とした人の割合が62.8%で最も高く、次いで「栄養バランスのとれた日本型食生活」が53.2%、「食に感謝し『もったいない』という気持ちを持った食事」が47.7%となっている。

図40-1 食育について実践していること（一般県民：1つ選択）



【その他の主な内容】

- ・野菜はできるだけ季節ごとに自分でつくる。ほとんど自分で食事を用意している
- ・三食食べる

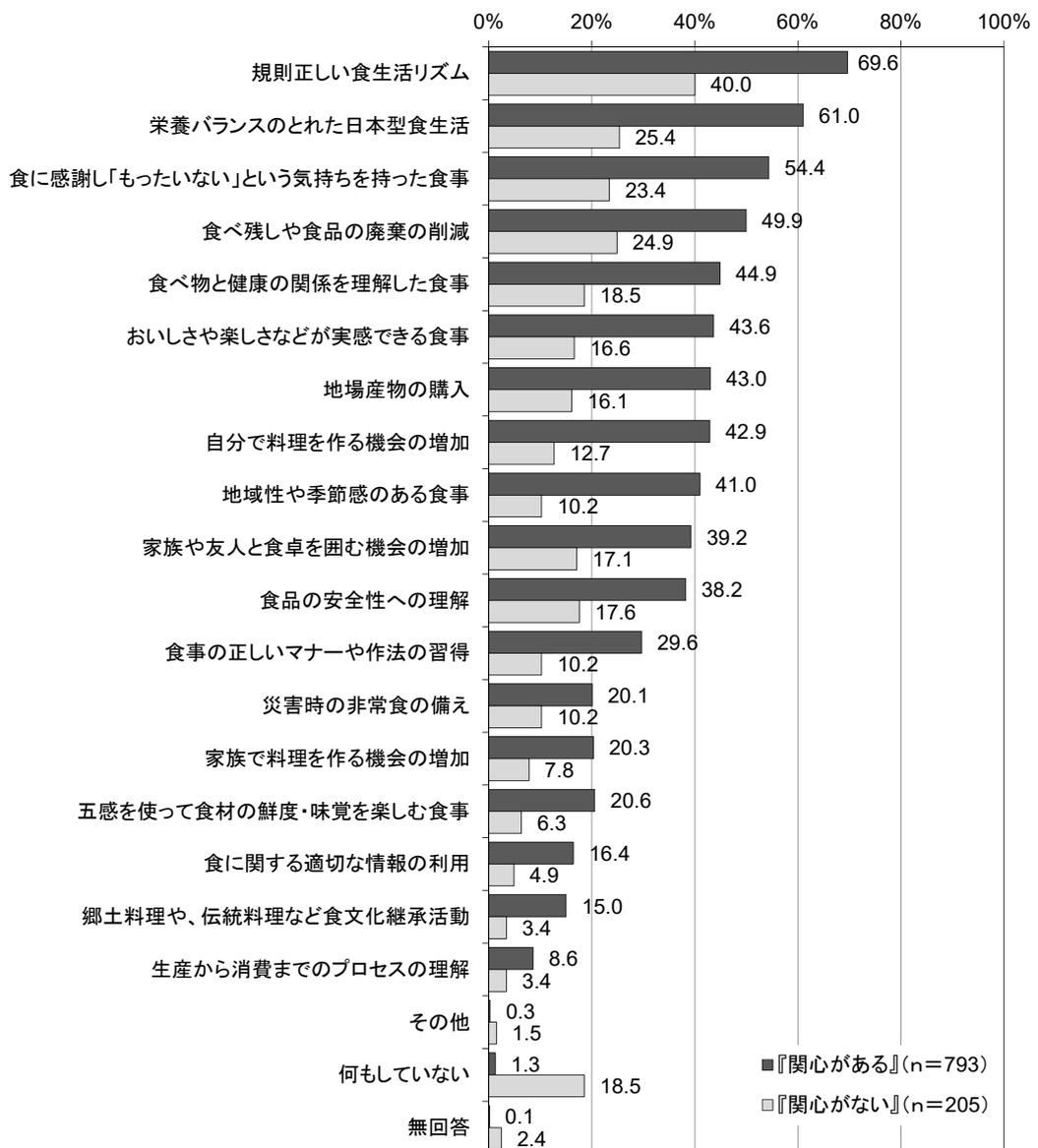
- ・野菜の農薬が不安のため、畑を借りて自分でなるべく多くの種類をつかって食べている
- ・何もしていないが、健康問題はない

食育についての実践内容について、食育への関心度*（問 39）と合わせて見ると、「その他」、
「何もしていない」を除くすべての項目において食育に『関心がある』が『関心がない』より高
くなっており、食育への関心が高いほうが、食育に関する様々な実践がされている傾向がうか
がえる。

* 食育への関心度

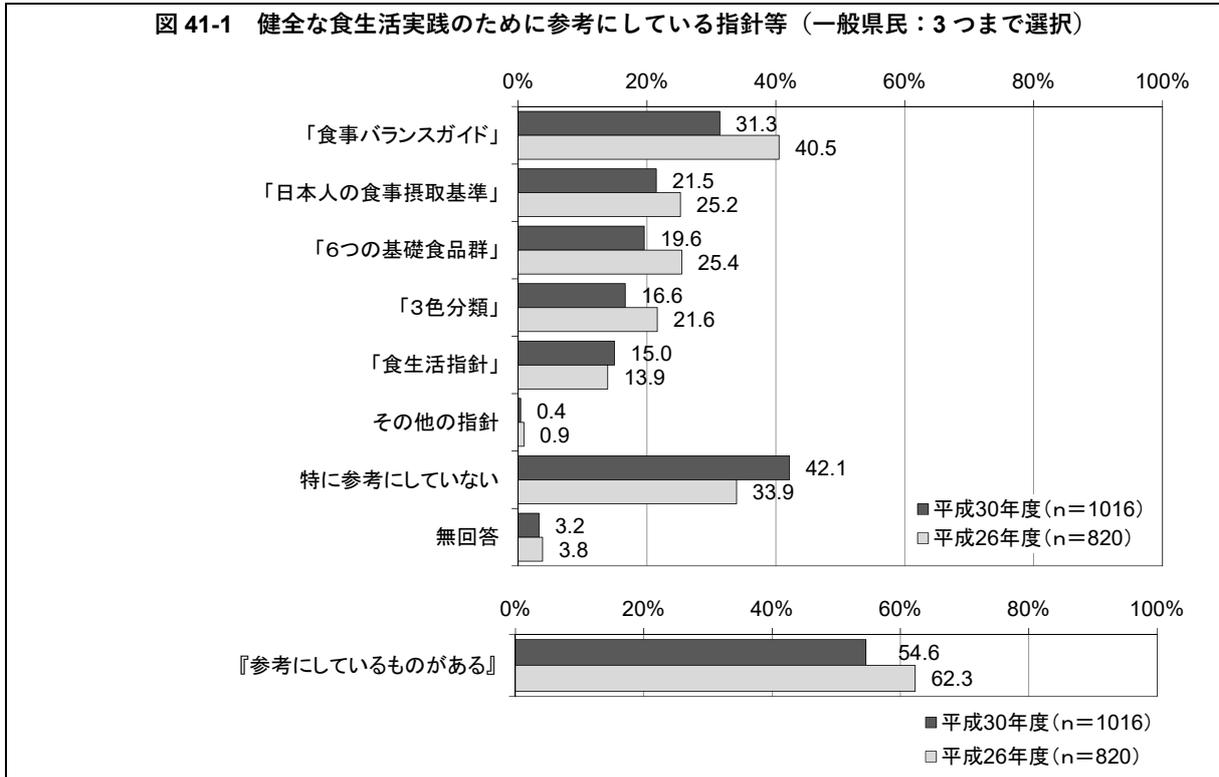
問 39（食育に関心がありますか）において、「関心がある」、「どちらかといえば関心がある」と回答した場合を『関心があ
る』、「どちらかといえば関心がない」、「関心がない」と回答した場合を『関心がない』として分類

図 40-2 食育について実践していること（一般県民 食育への関心度別：1つ選択）



問 41 日頃の健全な食生活を実践するため、どのような指針等を参考にしていますか。
(3つまで選択)

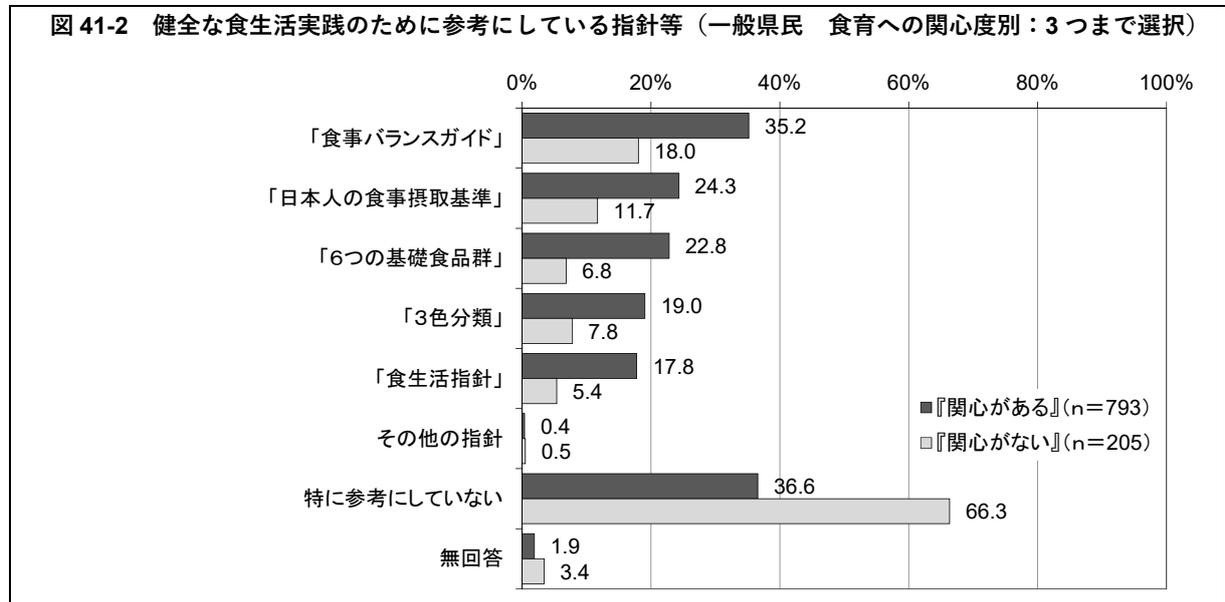
日頃の健全な食生活を実践するために何らかの指針等を参考にしているとした人の割合は54.6%で、前回より低くなっている。参考にしている指針としては、「食事バランスガイド」が31.3%、「日本人の食事摂取基準」が21.5%、「6つの基礎食品群」が19.6%となっている。



【その他の主な内容】

・病院での指針

日頃の健全な食生活を実践するために参考としている指針等について、食育への関心度（問39）と合わせて見ると、「特に参考にしていない」を除くすべての項目において食育に『関心がある』が『関心がない』より高くなっており、食育への関心が高いほうが、何らかの指針等を参考をしている傾向がうかがえる。



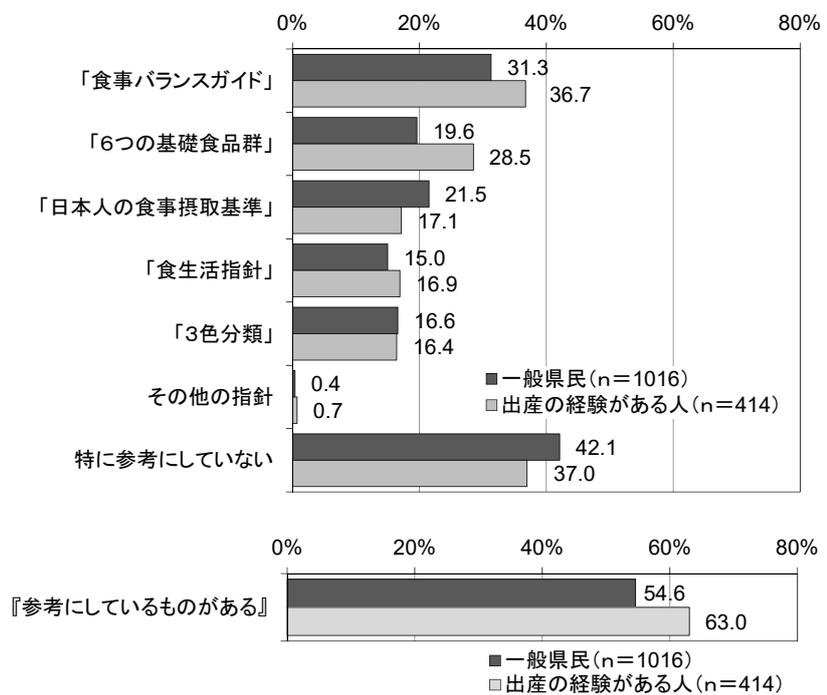
問42 出産の経験がある方にうかがいます。妊娠中に食事のバランスを整えるために参考していた指針等がありますか。(3つまで選択)

出産の経験がある人が日頃の健全な食生活を実践するために何らかの指針等を参考にしているとした人の割合は63.0%で、一般県民(問41)の54.6%より高くなっている。

一方、「特に参考にしていない」人の割合は37.0%で、指針等の活用も十分でないことがうかがえる。

一般県民(問41)と比較すると、「食事バランスガイド」、「6つの基礎食品群」は高く、「日本人の食事摂取基準」は低くなっている。

図42-1 健全な食生活実践のために参考にしている指針等(出産経験がある人・一般県民:3つまで選択)



※「出産の経験がある人」のnは本設問に回答した女性

【その他の主な内容】

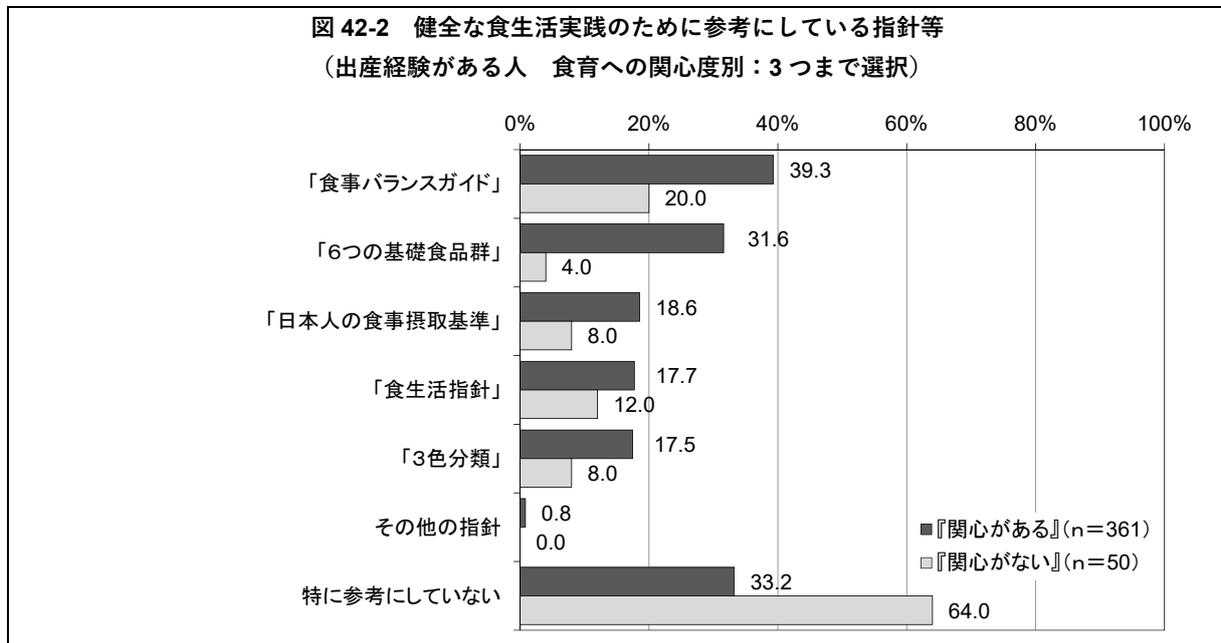
・塩分に注意

・妊娠中はいろいろな情報に注意して食事をしていました

・低糖・低塩

・妊娠中はあまり食べさせてもらえなかった

出産の経験がある人が日頃の健全な食生活を実践するために参考としている指針等について、食育への関心度（問39）と合わせて見ると、食育に「関心がある」は、「特に参考にしていない」を除くすべての項目において「関心がない」より高くなっている。



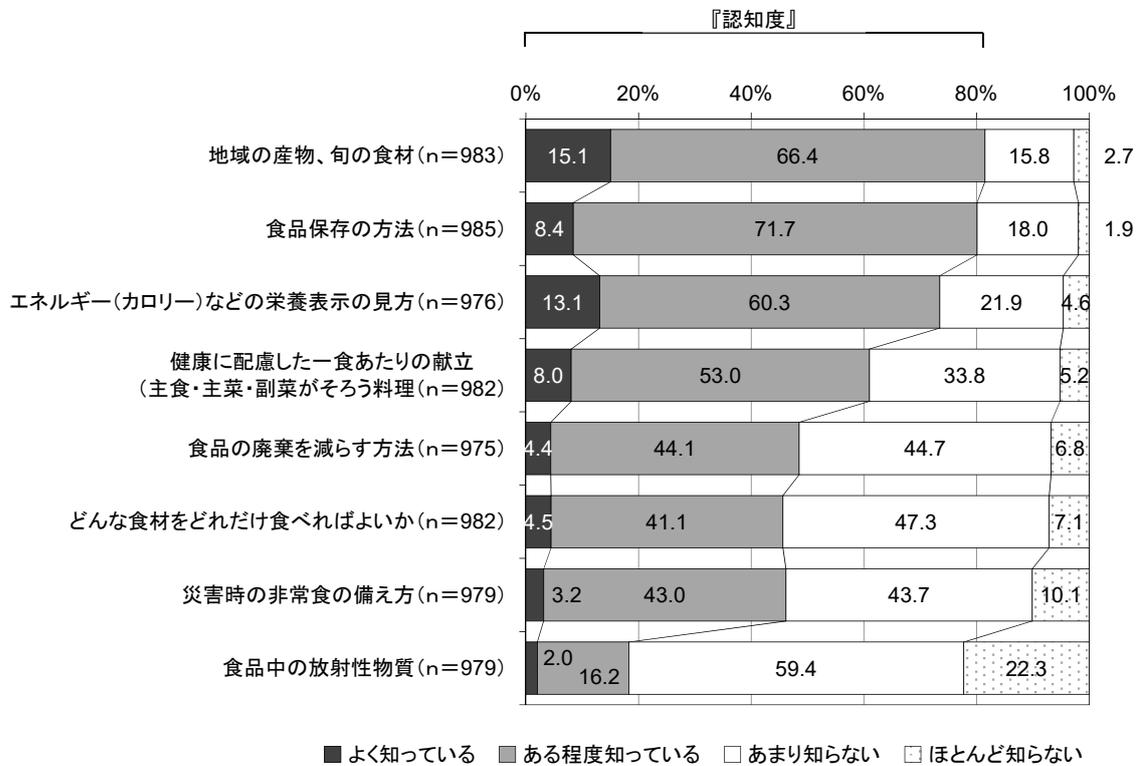
2-18 食に対する知識・行動について

問 43 食に関する以下の項目について、それぞれどのくらい知っていますか。(それぞれ1つ選択)

食に関する各項目について、「よく知っている」と「ある程度知っている」を合わせた『認知度』の割合は、「地域の産物、旬の食材」が81.5%、「食品保存の方法」が80.1%と同程度に高く、次いで「エネルギー(カロリー)などの栄養表示の見方」が73.4%となっている。

一方、「あまり知らない」と「ほとんど知らない」を合わせた『知らない』とした人の割合は、「食品中の放射性物質」が81.7%で最も高く、次いで「どんな食材をどれだけ食べればよいか」が54.4%、「災害時の非常食の備え方」が53.8%、「食品の廃棄を減らす方法」が51.5%となっている。

図 43-1 食に関する各項目についての認知度 (一般県民：それぞれ1つ選択)



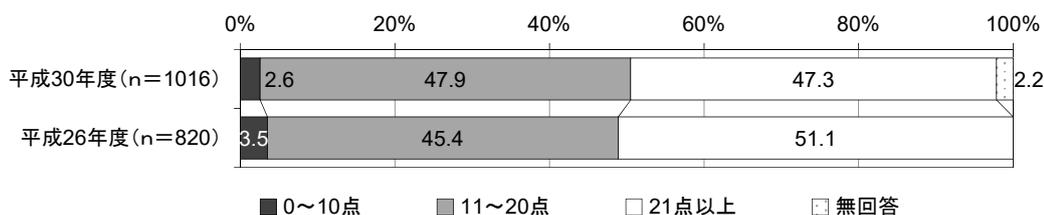
食に関する各項目の認知度を点数化*し、その合計点区分ごとの構成比を見ると、8項目合わせて32点満点のうち、「11～20点」が47.9%、「21点以上」が47.3%と同程度に高くなっている。

前回と比較すると、大きな変化は見られない。

*食に関する各項目の認知度の点数化

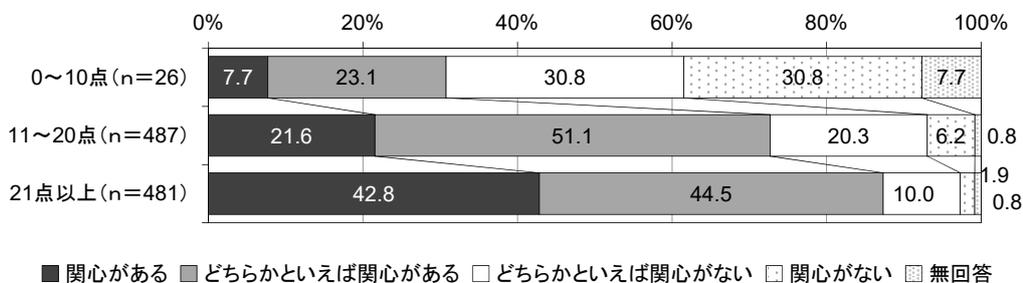
「よく知っている」を4点、「ある程度知っている」を3点、「あまり知らない」を2点、「ほとんど知らない」を1点として、各項目の点数を算出し、全8項目の合計点（最高点32点=4点×8項目）とし、さらにそれを10点区切りで仕分け。合計点が高いほど、認知度が高いことを示す。

図 43-2 食に関する各項目についての認知度（点数）（一般県民：それぞれ1つ選択）



食育への関心度（問39）について合計点の区分ごとに見ると、「関心がある」「どちらかといえば関心がある」を合わせると「21点以上」が87.3%で最も高くなっており、食に関する各項目の認知度が高いほうが、食育への関心も高い傾向がうかがえる。

図 43-3 食に関する各項目についての認知度（点数）（一般県民 食育への関心度別：それぞれ1つ選択）

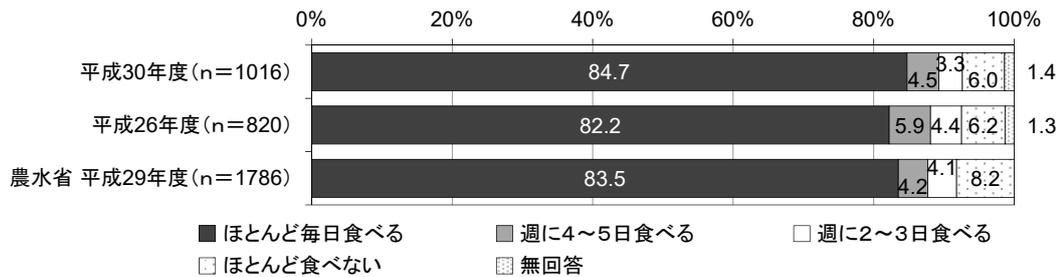


問 44 ふだん、朝食を食べますか。(1つ選択)

朝食について、「ほとんど毎日食べる」とした人の割合が84.7%で高くなっている。

前回と比較すると、大きな変化は見られない。また、農水省調査と比較しても、大きな差は見られない。

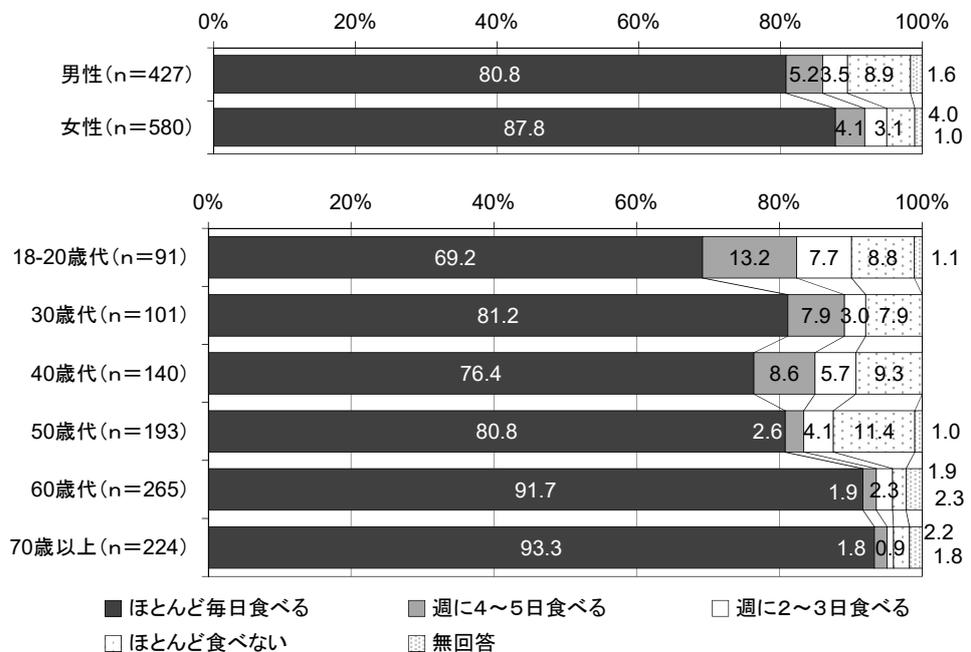
図 44-1 ふだん、朝食を食べる頻度（一般県民：1つ選択）



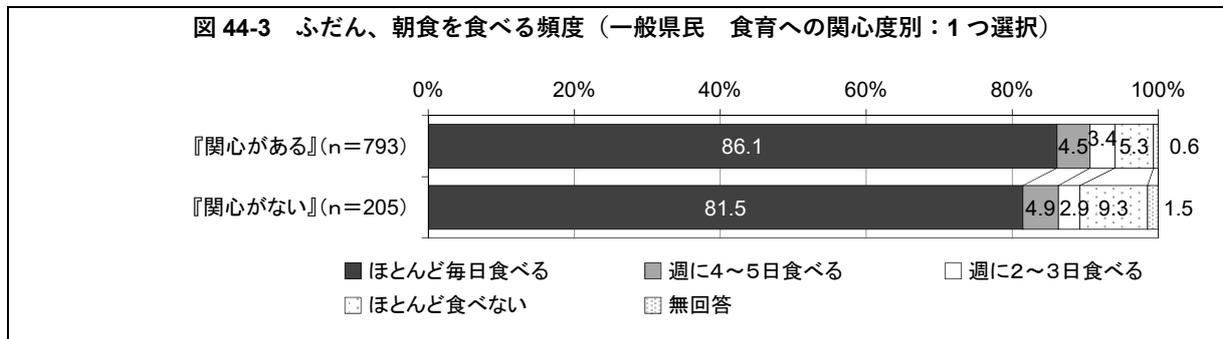
性別では、男女とも「ほとんど毎日食べる」とした人の割合が高く、男性が80.8%、女性が87.8%となっている。

年代別では、すべての年代で「ほとんど毎日食べる」とした人の割合が高く、70歳以上が93.3%で高く、18-20歳代が69.2%で低くなっている。

図 44-2 ふだん、朝食を食べる頻度（一般県民 性別・年代別：1つ選択）

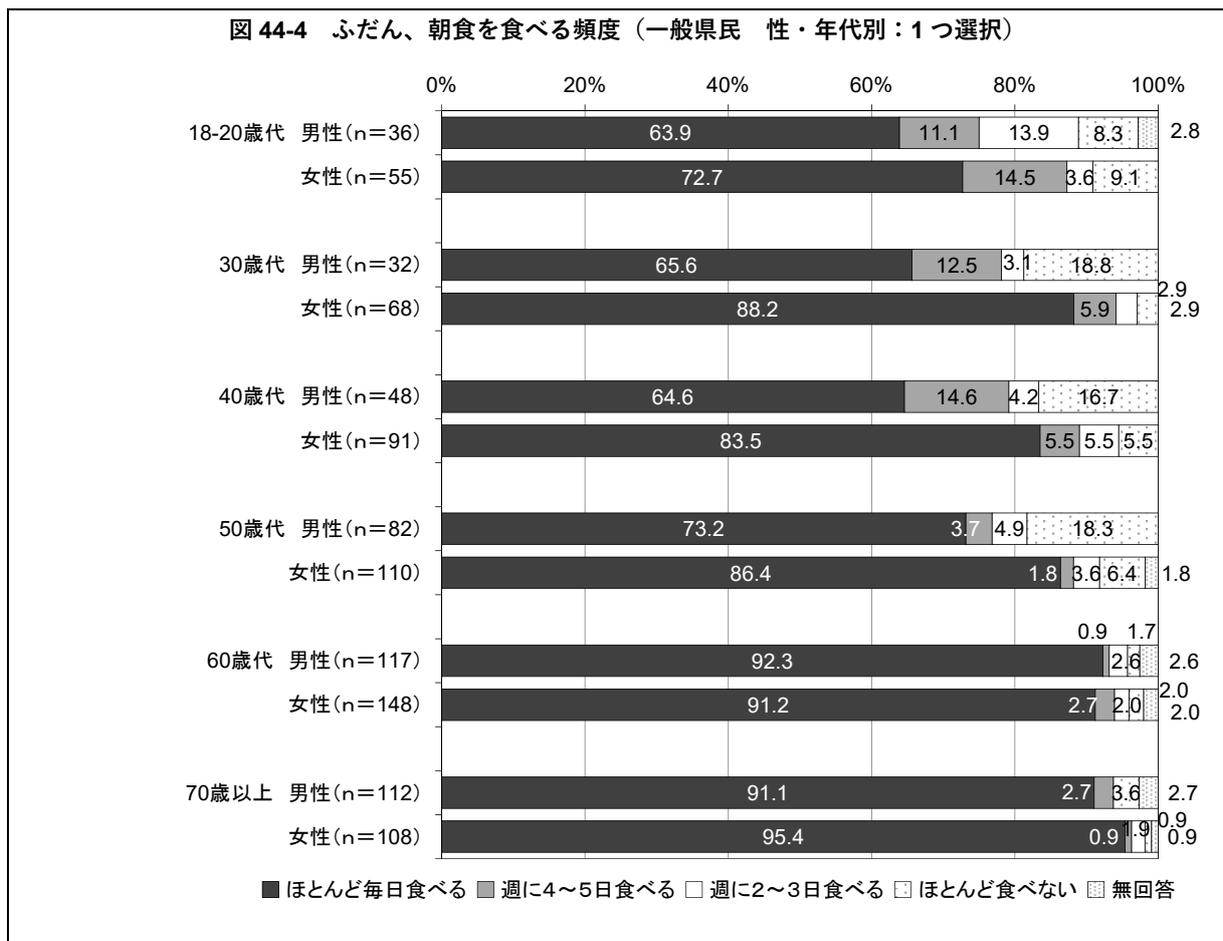


朝食をとる頻度について、食育への関心度(問 39)と合わせて見ると、「ほとんど毎日食べる」とした人の割合は、食育に『関心がある』が 86.1%、『関心がない』が 81.5%となっており、食育への関心が高いほうが朝食をとる頻度が高いことがうかがえる。



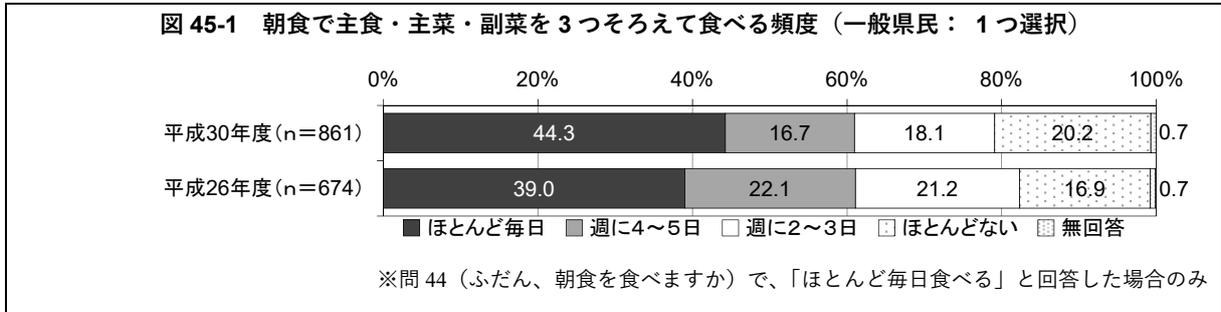
性・年代別では、「ほとんど毎日食べる」とした人の割合は、18-20 歳代の男性が 63.9%で低く、40 歳代男性が 64.6%、30 歳代男性が 65.6%で同程度に低くなっている。

また、朝食を食べない状況について、「週に 4~5 日食べる」、「週に 2~3 日食べる」、「ほとんど食べない」の合計値を見ると、40 歳代男性が 35.5%で高く、次いで 30 歳代男性が 34.4%、18-20 歳代男性が 33.3%で同程度に高くなっている。

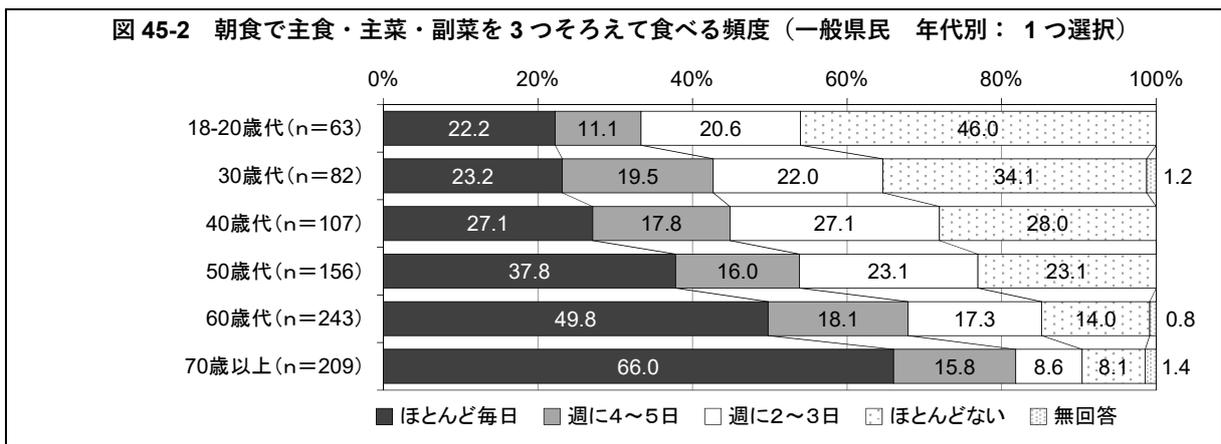


問 45 問 44 で「ほとんど毎日食べる」と回答された方にうかがいます。そのうち、主食・主菜・副菜を3つそろえて食べるのは週に何日くらいですか。(1つ選択)

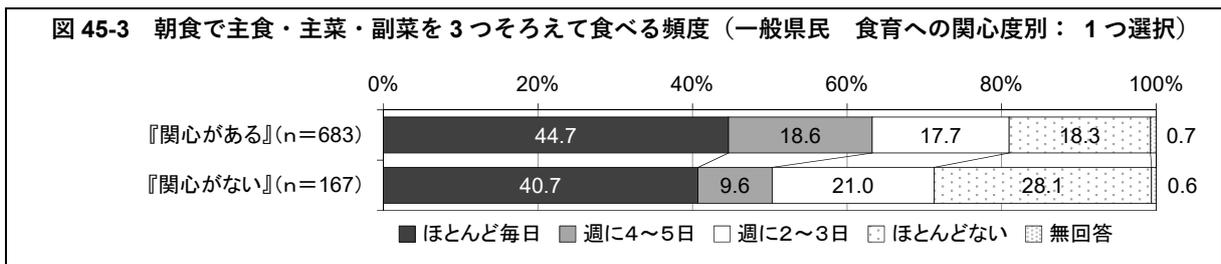
朝食を「ほとんど毎日食べる」とした人が、主食・主菜・副菜を3つ揃えて食べる頻度は、「ほとんど毎日」とした人の割合が44.3%で高く、前回と比較すると、「ほとんど毎日」とした人の割合が高くなっている。



年代別では、若い年代ほど「ほとんどない」が高くなっており、18-20歳代は46.0%で最も高くなっている。一方、高い年代ほど「ほとんど毎日」が高くなっており、70歳以上は66.0%となっている。



朝食を「ほとんど毎日食べる」とした人が、主食・主菜・副菜を3つ揃えて食べる頻度について、食育への関心度（問 39）と合わせて見ると、「ほとんど毎日」とした人の割合は、関心の有無による大きな差は見られない。しかし、「ほとんどない」は、食育に『関心がある』が18.3%、『関心がない』が28.1%となっており、食育への関心が高いほうが、朝食で主食・主菜・副菜をそろえて食べる頻度が高いことがうかがえる。

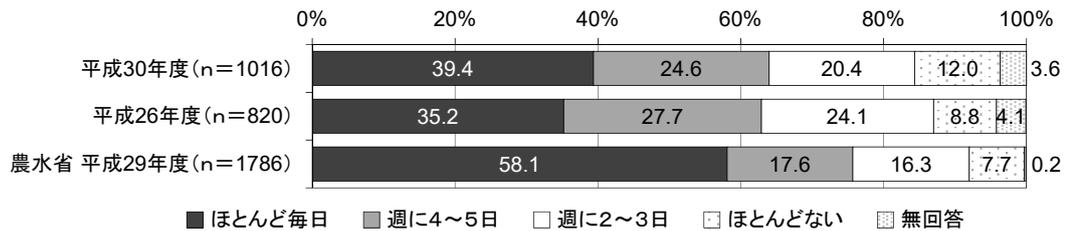


問 46 1日の食事の中で、主食・主菜・副菜を3つそろえて食べることが1日2回以上あるのは、週に何日くらいですか。(1つ選択)

1日の食事の中で、主食・主菜・副菜を3つそろえて食べることが1日2回以上ある頻度について、「ほとんど毎日」とした人の割合が39.4%で高くなっている。

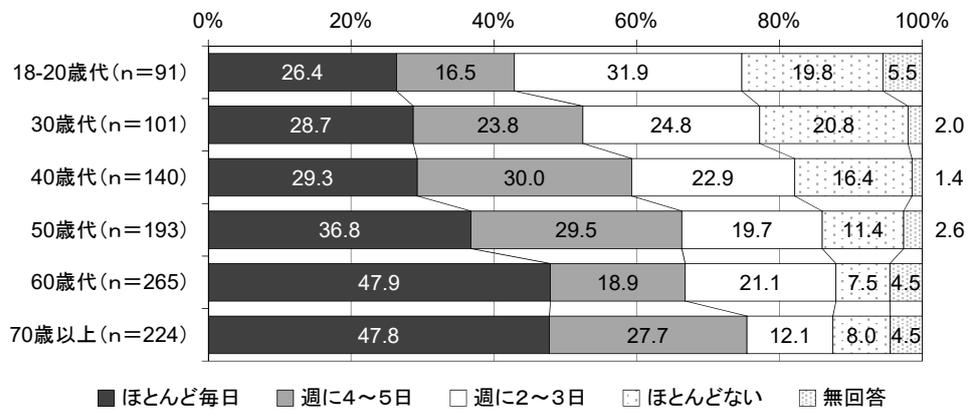
前回と比較すると、「ほとんど毎日」とした人の割合は前回より若干高くなっている。
農水省調査と比較すると、「ほとんど毎日」とした人の割合は低くなっている。

図 46-1 1日の食事の中で、主食・主菜・副菜を3つそろえて食べることが1日2回以上ある頻度
(一般県民：1つ選択)

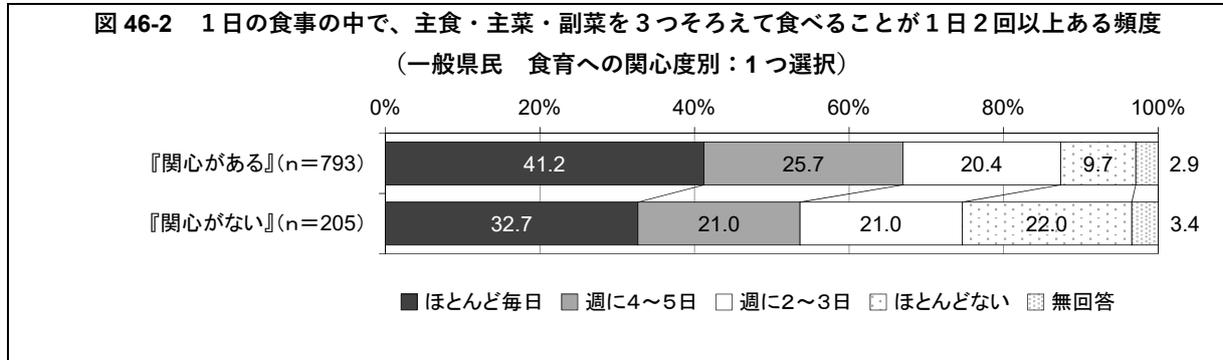


年代別では、高い年代ほど「ほとんど毎日」が高く、若い年代ほど「週に2~3日」、「ほとんどない」が高い傾向がうかがえる。

図 46-2 1日の食事の中で、主食・主菜・副菜を3つそろえて食べることが1日2回以上ある頻度
(一般県民 年代別：1つ選択)



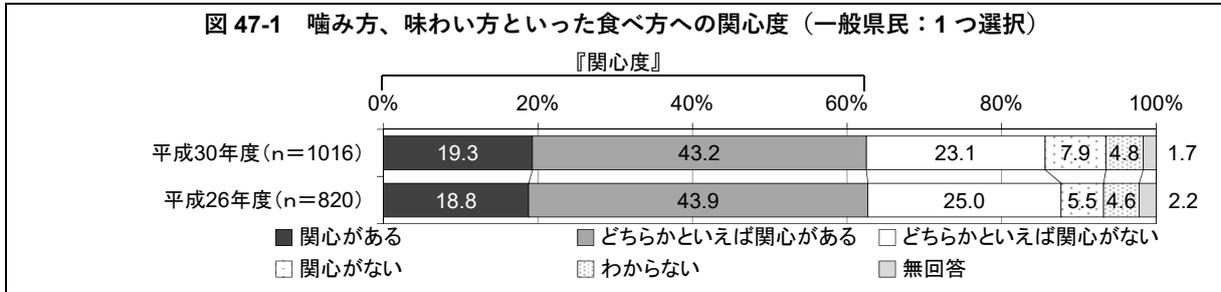
1日の食事の中で、主食・主菜・副菜を3つそろえて食べることが1日2回以上ある頻度について、食育への関心度（問39）と合わせて見ると、「ほとんど毎日」とした人の割合は、食育に『関心がある』が41.2%、『関心がない』が32.7%となっており、食育への関心が高いほうが、1日2回以上の食事でも主食・主菜・副菜をそろえて食べる頻度が高いことがうかがえる。



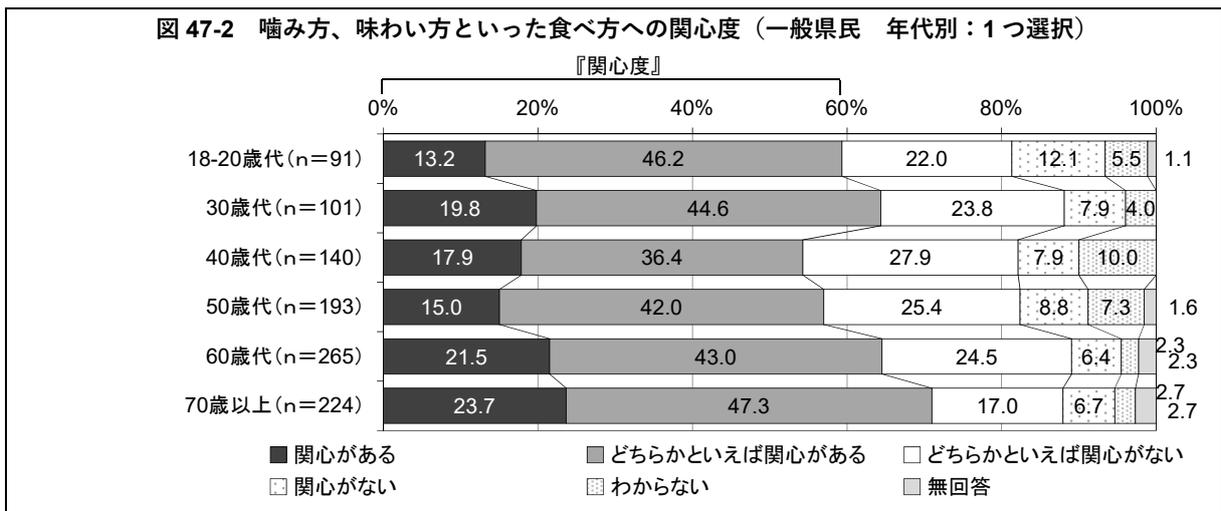
問 47 噛み方、味わい方といった食べ方に関心がありますか。(1つ選択)

噛み方、味わい方といった食べ方について、「関心がある」と「どちらかといえば関心がある」を合わせた『関心度』の割合は62.5%となっている。

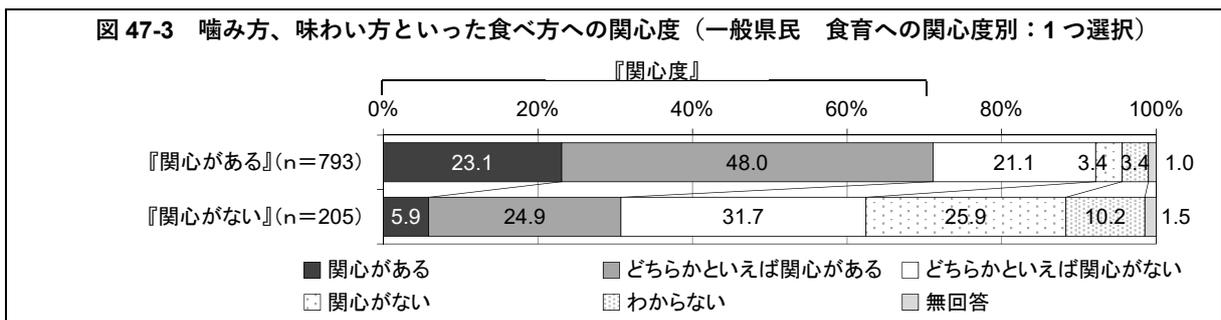
前回と比較すると、大きな変化は見られない。



年代別では、「関心がある」と「どちらかといえば関心がある」を合わせた『関心度』の割合は、70歳以上が71.0%で最も高く、次いで30歳代が64.4%となっており、高い年代ほど高い傾向がうかがえる。



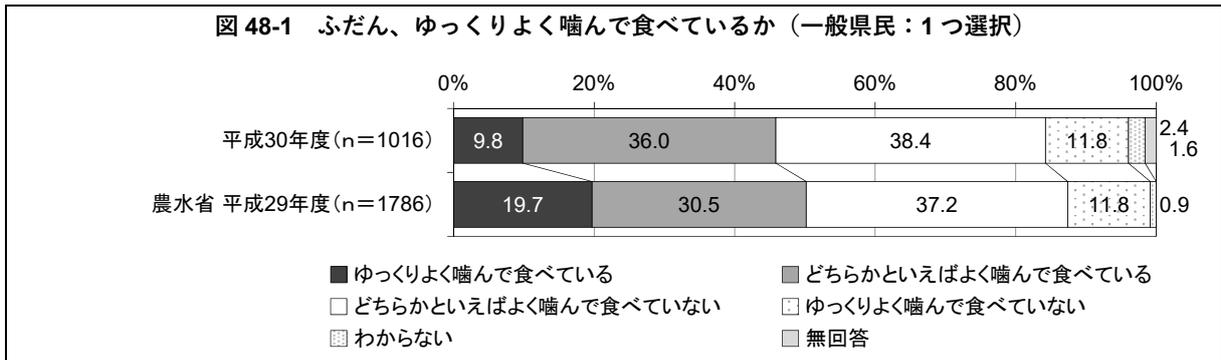
噛み方、味わい方といった食べ方について、食育への関心度（問 39）と合わせて見ると、「関心がある」と「どちらかといえば関心がある」を合わせた『関心度』の割合は、食育に『関心がある』が71.1%、『関心がない』が30.8%となっており、食育への関心が高いほうが、噛み方、味わい方といった食べ方への関心も高いことがうかがえる。



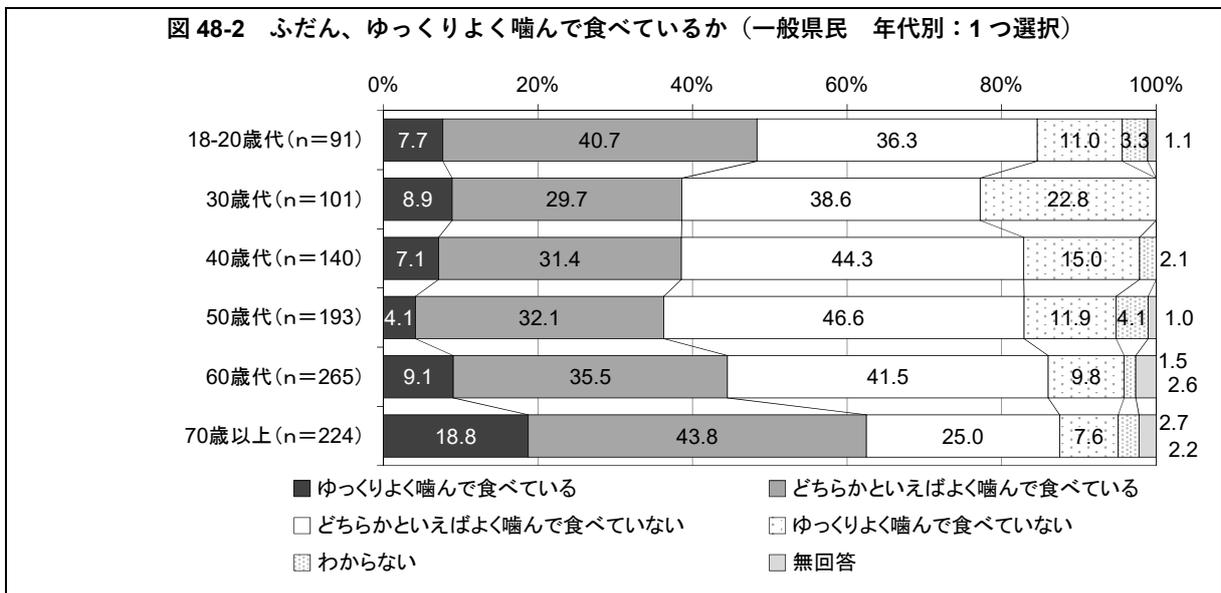
問 48 ふだん、ゆっくりよく噛んで食べていますか。(1つ選択)

ふだん、ゆっくりよく噛んで食べているかについて、「どちらかといえばよく噛んで食べていない」人の割合は38.4%、「どちらかといえばよく噛んで食べている」人の割合は36.0%と、同程度になっている。

農林水産省調査と比較すると、「ゆっくりよく噛んで食べている」とした人の割合が農水省より低くなっている。



年代別では、18-20 歳代、70 歳以上を除くすべての年代で「どちらかといえばよく噛んで食べていない」とした人の割合が高く、18-20 歳代、70 歳以上は「どちらかといえばよく噛んで食べている」が高くなっている。

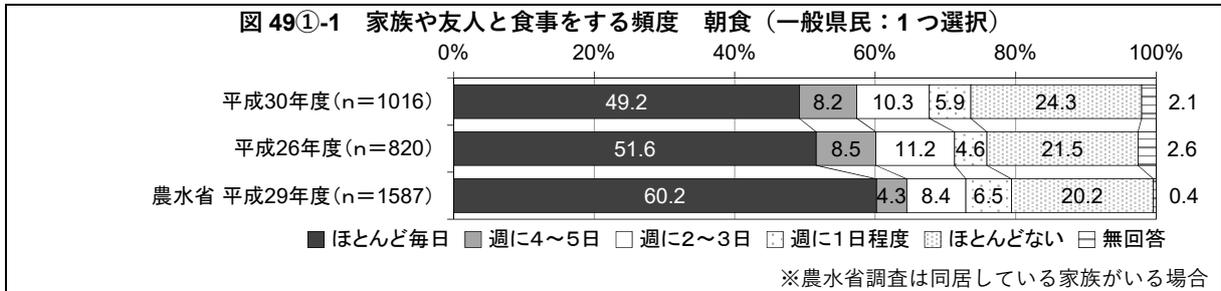


問 49 家族や友人と食事をすることはどのくらいありますか。(それぞれ1つ選択)

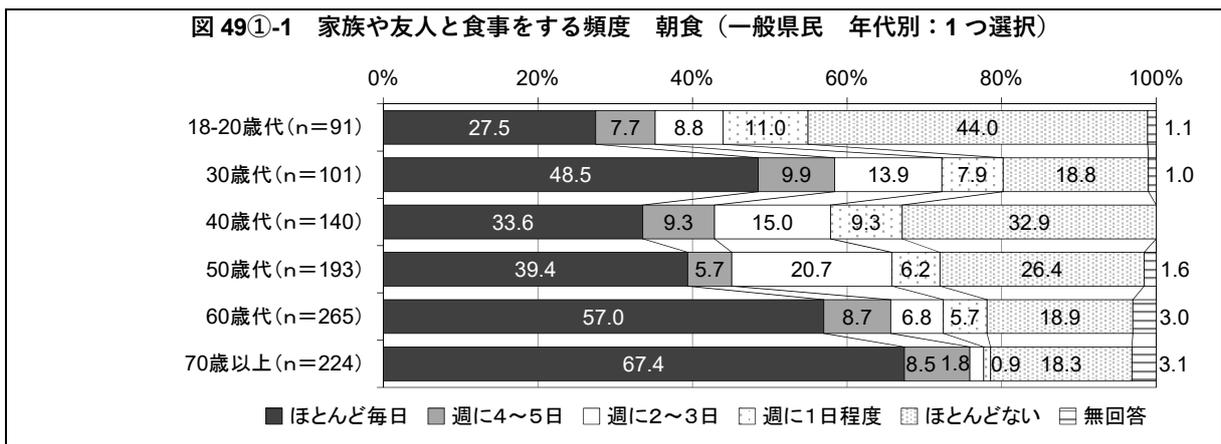
①朝食

朝食を家族や友人と食事をする頻度について、「ほとんど毎日」とした人の割合が49.2%で高くなっており、前回と比較すると、大きな変化は見られない。

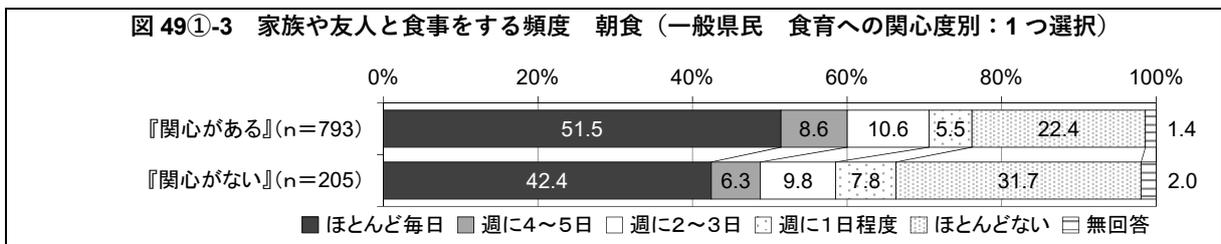
農水省調査と比較すると、「ほとんど毎日」とした人の割合が農水省より低くなっている。



年代別では、18-20 歳代を除くすべての年代で「ほとんど毎日」とした人の割合が高く、18-20 歳代は「ほとんどない」が44.0%で高くなっている。高い年代ほど家族や友人と一緒に食事をする頻度が高い傾向がうかがえる。



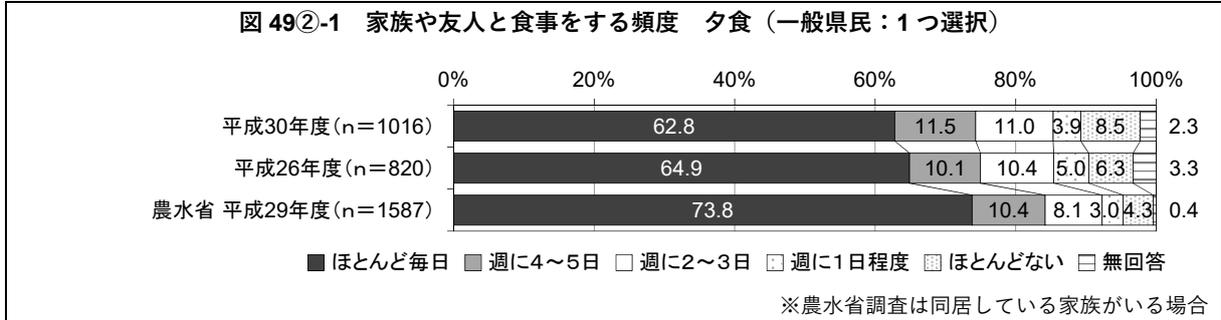
食育への関心度 (問 39) と合わせて見ると、「ほとんど毎日」とした人の割合は、食育に『関心がある』が51.5%、『関心がない』が42.4%となっている。一方、「ほとんどない」は、食育に『関心がある』が22.4%、『関心がない』が31.7%となっており、食育への関心が高いほうが、朝食で家族や友人と一緒に食事をする頻度も高いことがうかがえる。



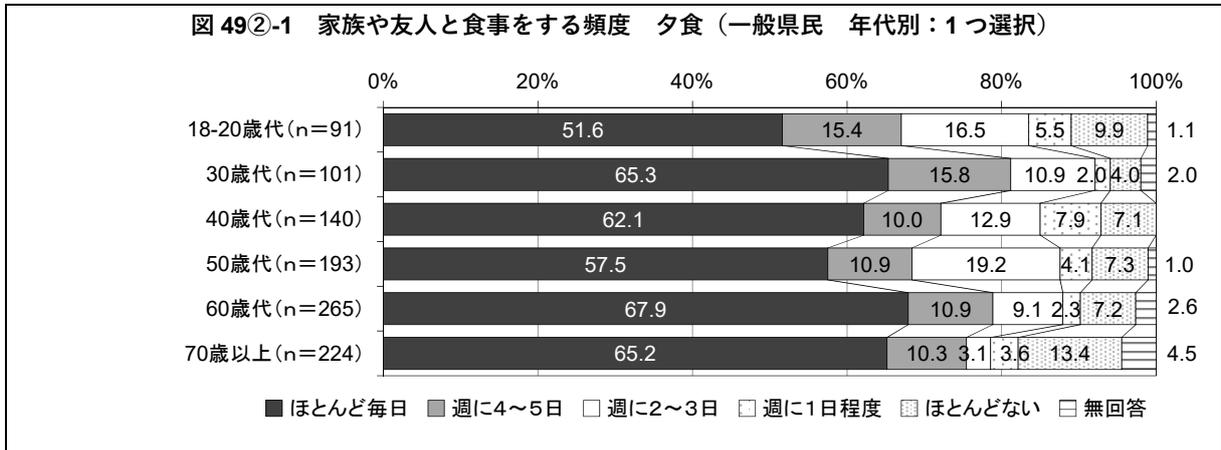
②夕食

夕食を家族や友人と食事をする頻度について、「ほとんど毎日」とした人の割合が62.8%で高くなっており、前回と比較すると、大きな変化は見られない。

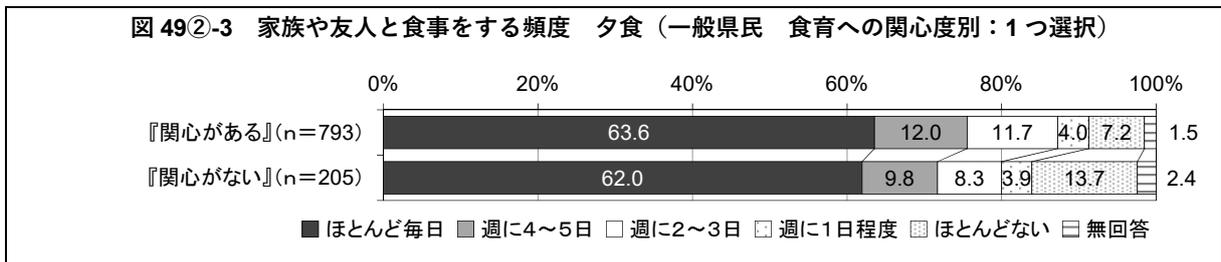
農水省調査と比較すると、「ほとんど毎日」とした人の割合が農水省より低くなっている。



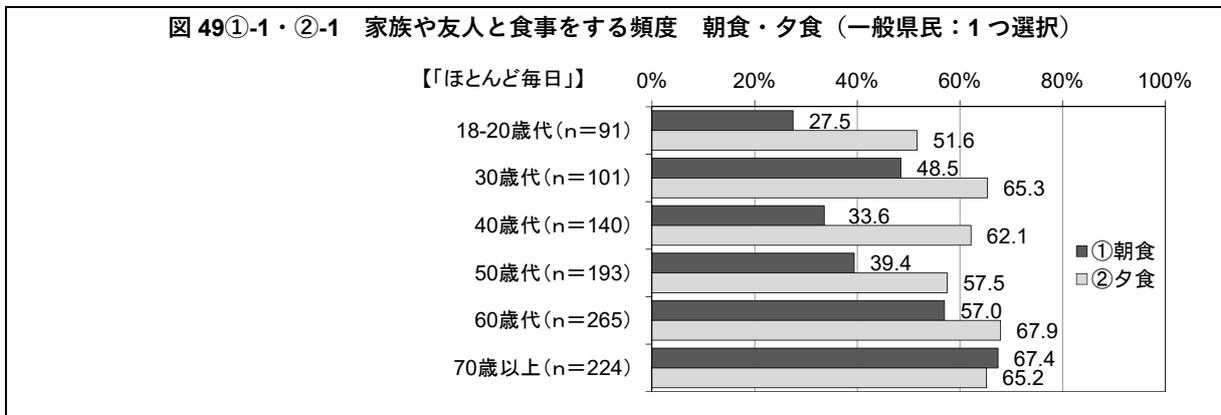
年代別では、すべての年代で「ほとんど毎日」とした人の割合が高く、その中で60歳代が67.9%で高く、18-20歳代が51.6%で低くなっている。



食育への関心度（問39）と合わせて見ると、「ほとんど毎日」とした人の割合は、関心の有無による大きな差は見られない。



家族や友人と食事をする頻度について、「ほとんど毎日」とした人について「①朝食」と「②夕食」を比較すると、70歳以上を除くすべての年代で「②夕食」が「①朝食」より高く、「①朝食」より「②夕食」のほうが、家族や友人と一緒に食事をする頻度が高い傾向がうかがえる。

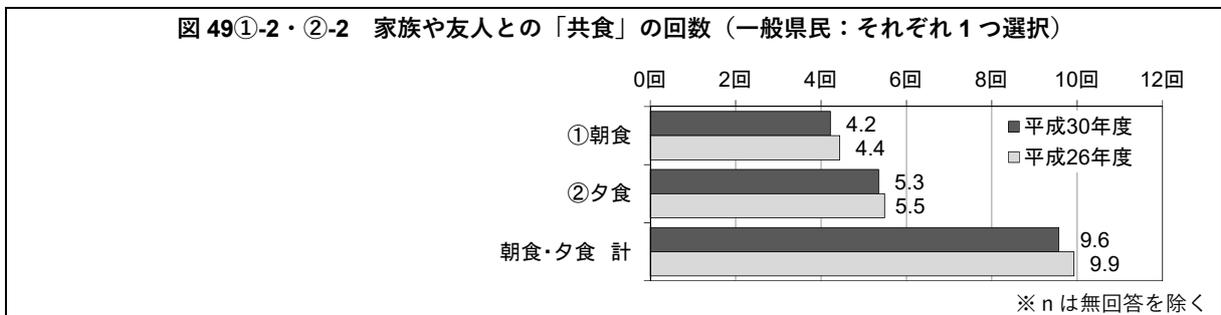


朝食または夕食を家族や友人と一緒に食べる「共食*」の回数を見ると、1週間当たりの平均回数は、朝食4.2回、夕食5.3回、合計値9.6回となっており、夕食は朝食より頻度が高くなっている。

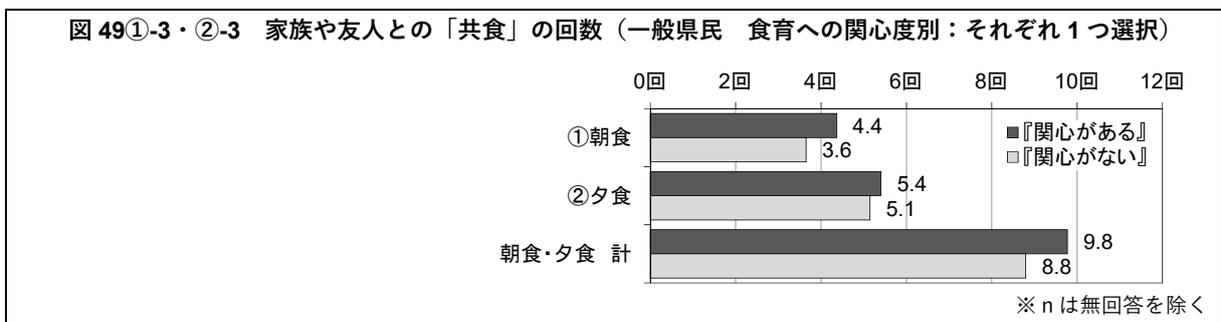
前回と比較すると、大きな変化は見られない。

***共食**

「ほとんど毎日」を7回、「週に4~5回」を4.5回、「週に2~3回」を2.5回、「週に1日程度」を1回として、加重平均により、朝食・夕食それぞれの回数、さらにその合計値として、1週間当たりの共食回数を指標化。合計値が14回に近いほど、朝食・夕食ともに共食回数が多いことを示す。



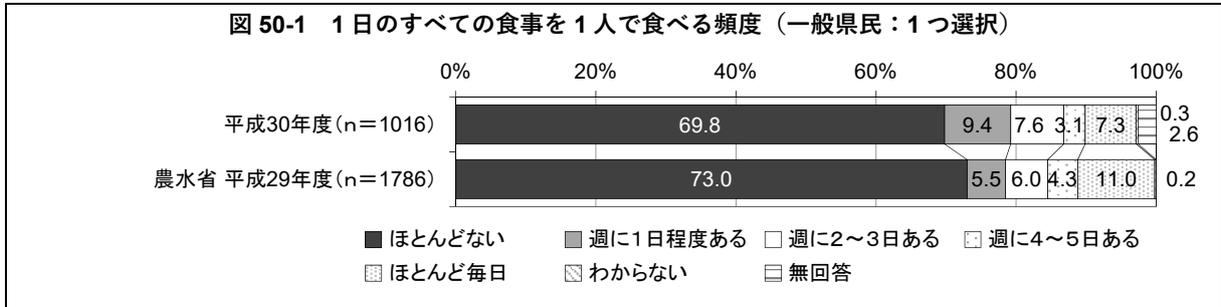
食育への関心度（問 39）と合わせて見ると、①朝食、②夕食のいずれも食育に『関心がある』は『関心がない』より平均回数が増えている。



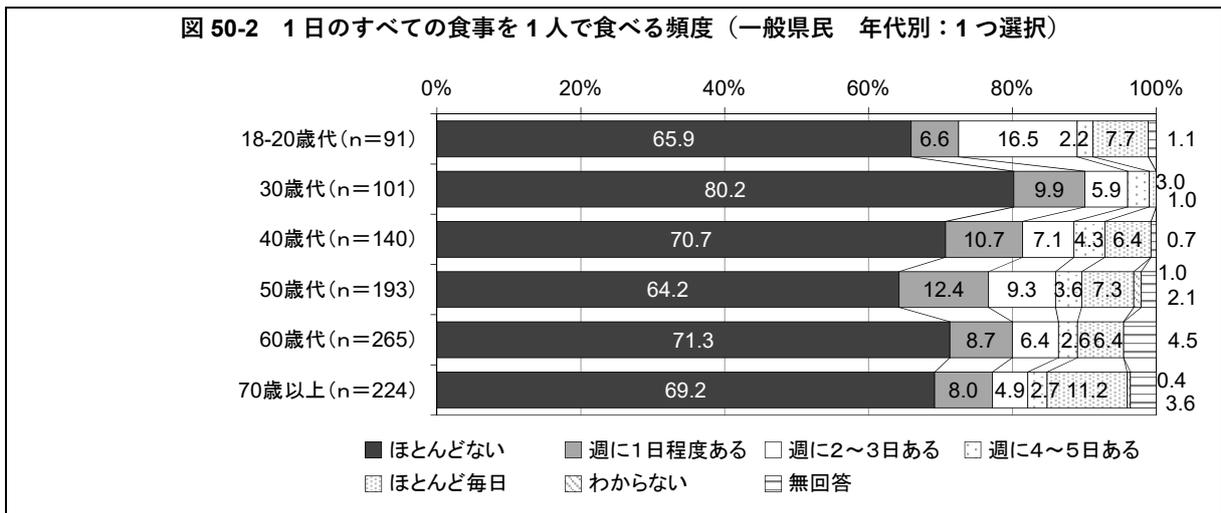
問 50 1日のすべての食事を1人で食べることはありませんか。(1つ選択)

1日のすべての食事を1人で食べる頻度について、「ほとんどない」とした人の割合が69.8%で高くなっている。

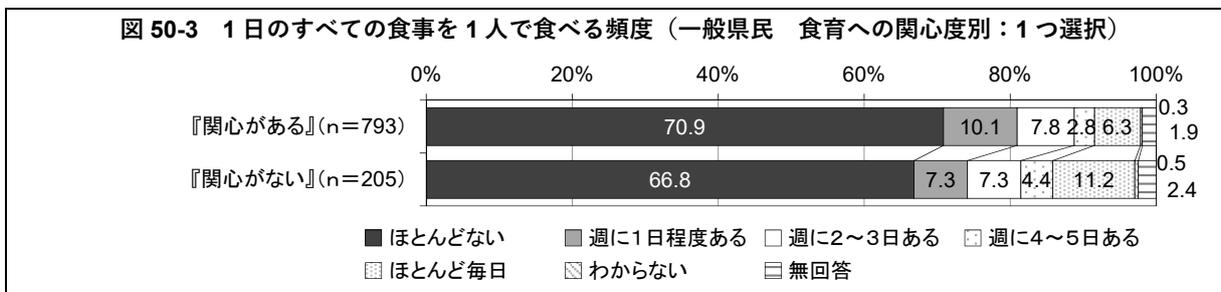
農水省調査と比較すると、大きな差は見られない。



年代別では、すべての年代で「ほとんどない」とした人の割合が高く、その中で30歳代が80.2%で高くなっている。一方、「ほとんど毎日」は70歳以上が11.2%で高くなっている。



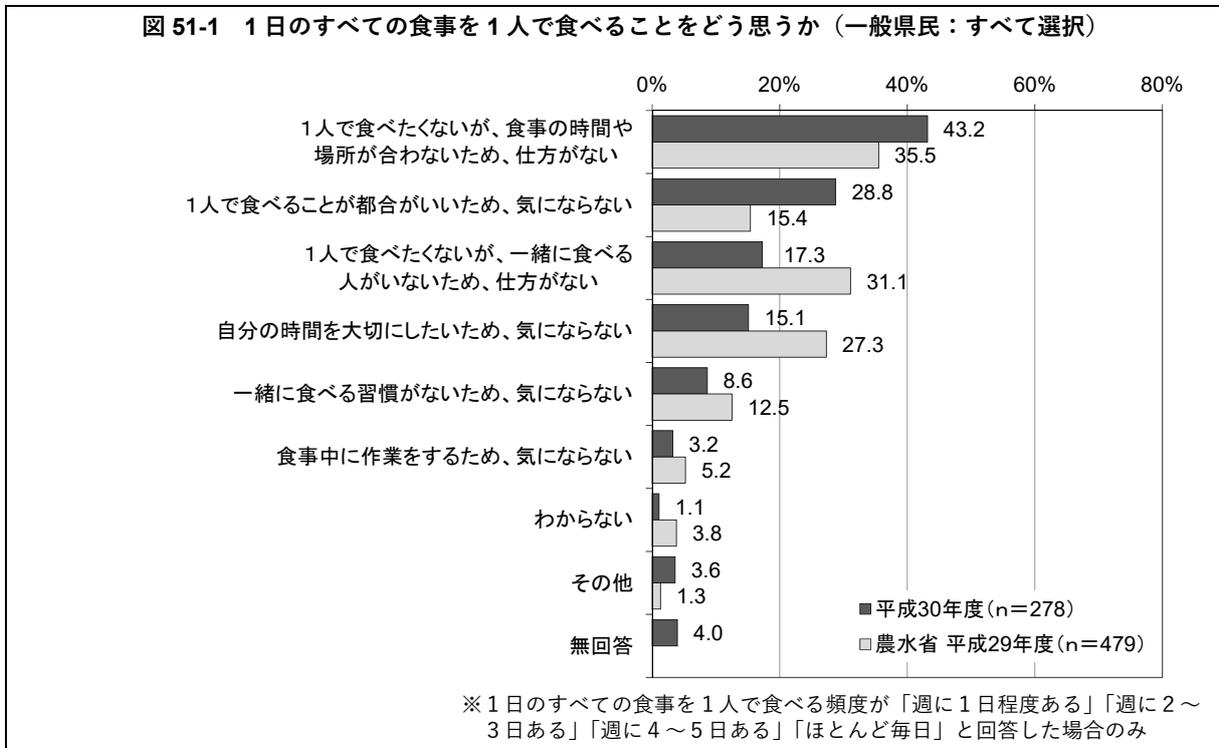
1日のすべての食事を1人で食べる頻度について、食育への関心度（問39）と合わせて見ると、関心の有無による大きな差は見られないが、「ほとんどない」は『関心がある』、「ほとんど毎日」は『関心がない』が若干高くなっている。



問 51 1日のすべての食事を1人で食べることについてどう思いますか。(問50で「週に1日程度ある」「週に2～3日ある」「週に4～5日ある」「ほとんど毎日」と回答された方にかがいます。) (すべて選択)

1日のすべての食事を1人で食べることについて、「1人で食べたくないが、食事の時間や場所が合わないため、仕方がない」とした人の割合が43.2%で高く、次いで「1人で食べる都合がいいため、気にならない」が28.8%となっている。

農水省調査と比較すると、「1人で食べたくないが、食事の時間や場所が合わないため、仕方がない」、「1人で食べる都合がいいため、気にならない」とした人の割合が農水省より高い一方、「1人で食べたくないが、一緒に食べる人がいないため、仕方がない」、「自分の時間を大切にしたいため、気にならない」などが農水省より低くなっており、傾向に違いが見られる。



【その他の主な内容】

・ 1人暮らしなので

・ 1人のため

・ 昼食は仕事上時間が合わない

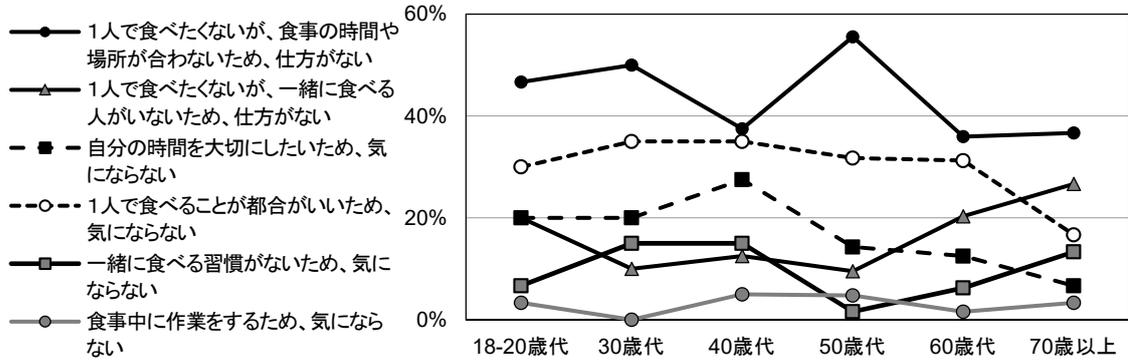
・ 単身赴任中のため仕方がない

・ 仕事上時間が合わない

・ 入院中なので一人食事が多い

1日のすべての食事を1人で食べることに、年代別では、すべての年代で「1人で食べたくないが、食事の時間や場所が合わないため、仕方がない」とした人の割合が高くなっている。次いで70歳以上を除くすべての年代は「1人で食べるのが都合がいいため、気にならない」が高くなっている。70歳以上は「1人で食べたくないが、一緒に食べる人がいないため、仕方がない」が26.7%となっている。

図 51-2 1日のすべての食事を1人で食べることをどう思うか（一般県民 年代別：すべて選択）



平成30年度	18-20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上
n	30	20	40	63	64	60
1人で食べたくないが、食事の時間や場所が合わないため、仕方がない	46.7	50.0	37.5	55.6	35.9	36.7
1人で食べたくないが、一緒に食べる人がいないため、仕方がない	20.0	10.0	12.5	9.5	20.3	26.7
自分の時間を大切にしたいため、気にならない	20.0	20.0	27.5	14.3	12.5	6.7
1人で食べるのが都合がいいため、気にならない	30.0	35.0	35.0	31.7	31.3	16.7
一緒に食べる習慣がないため、気にならない	6.7	15.0	15.0	1.6	6.3	13.3
食事中に作業をするため、気にならない	3.3	0.0	5.0	4.8	1.6	3.3

問 52 ふだん、以下のことをする機会が、どれくらいありますか。(それぞれ1つ選択)

普段食事をする機会について、「①自ら調理し、食事を作る」は、「ほとんど毎日」とした人の割合が47.3%で高くなっている。

「②冷凍食品やインスタント食品の使用」は、「週に2~3日」とした人の割合が24.1%、「週に1日程度」が21.4%、「月に数回」が20.3%で同程度に高くなっている。

「③外食」は、「月に数回」とした人の割合が36.8%で高くなっている。

前回と比較すると、いずれの項目も同様の傾向を示しており、大きな変化は見られない。

図 52 ふだんの調理・外食等の頻度（一般県民：それぞれ1つ選択）

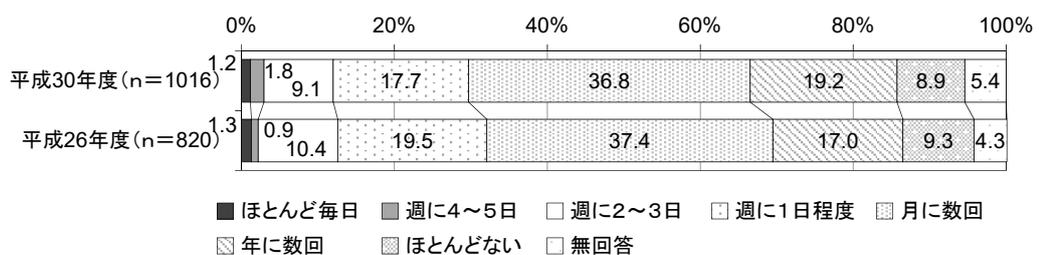
①自ら調理し、食事を作る



②冷凍食品やインスタント食品の使用



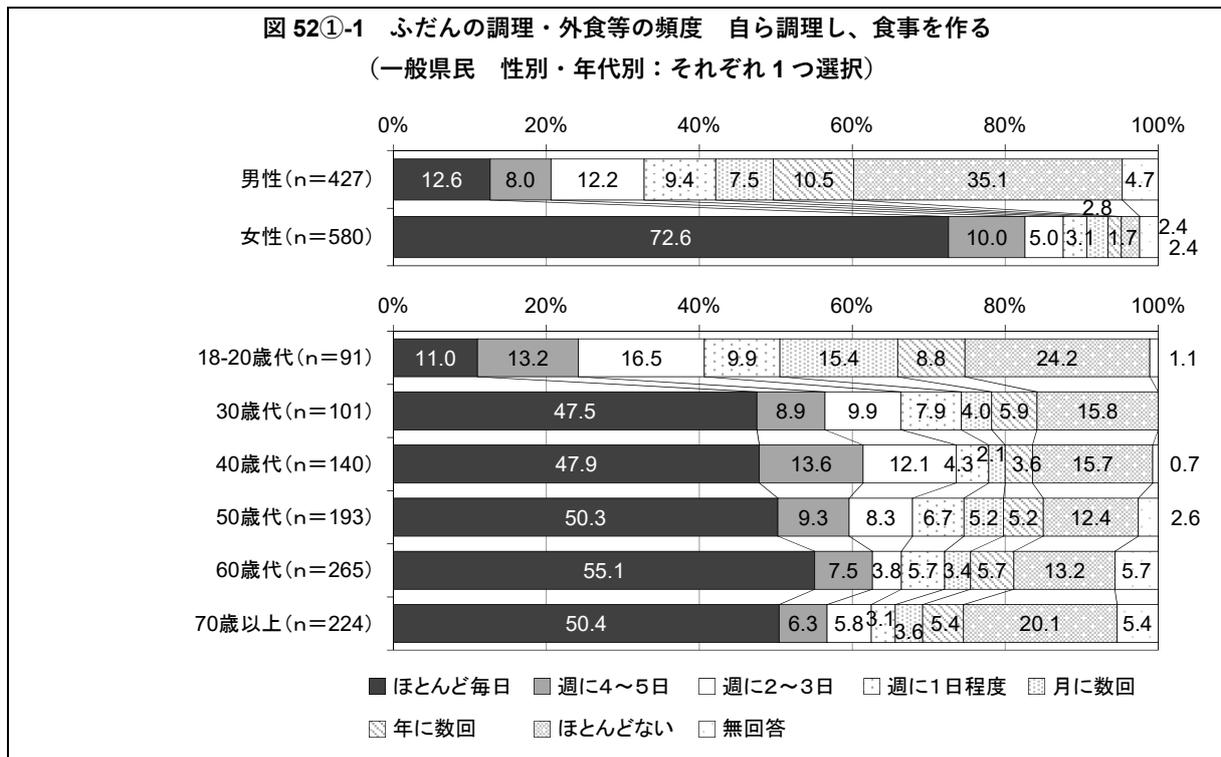
③外食



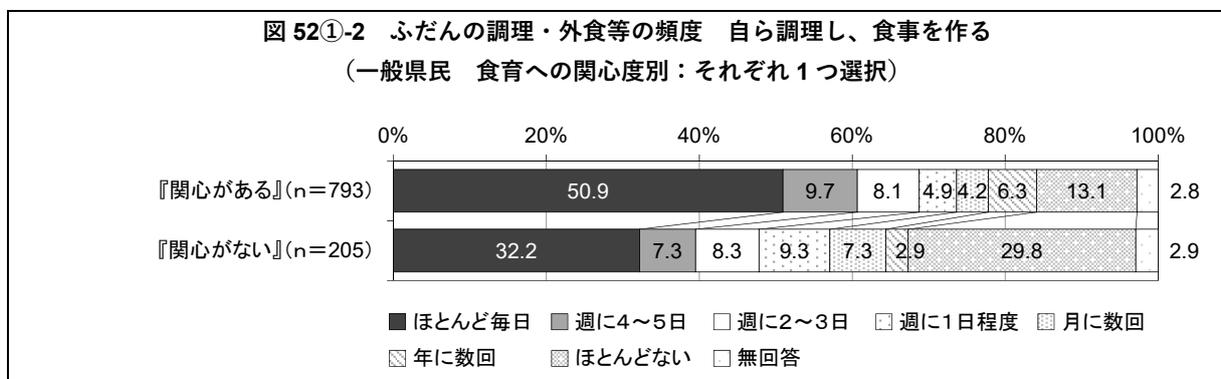
①自ら調理し、食事を作る

普段の食事で「①自ら調理し、食事を作る」機会について、性別では、男性は「ほとんどない」とした人の割合が35.1%、女性は「ほとんど毎日」が72.6%で高くなっている。

年代別では、18-20歳代を除くすべての年代で「ほとんど毎日」とした人の割合が約50%で最も高くなっている。18-20歳代は「ほとんどない」が24.2%で高く、「ほとんど毎日」が11.0%で低くなっている。



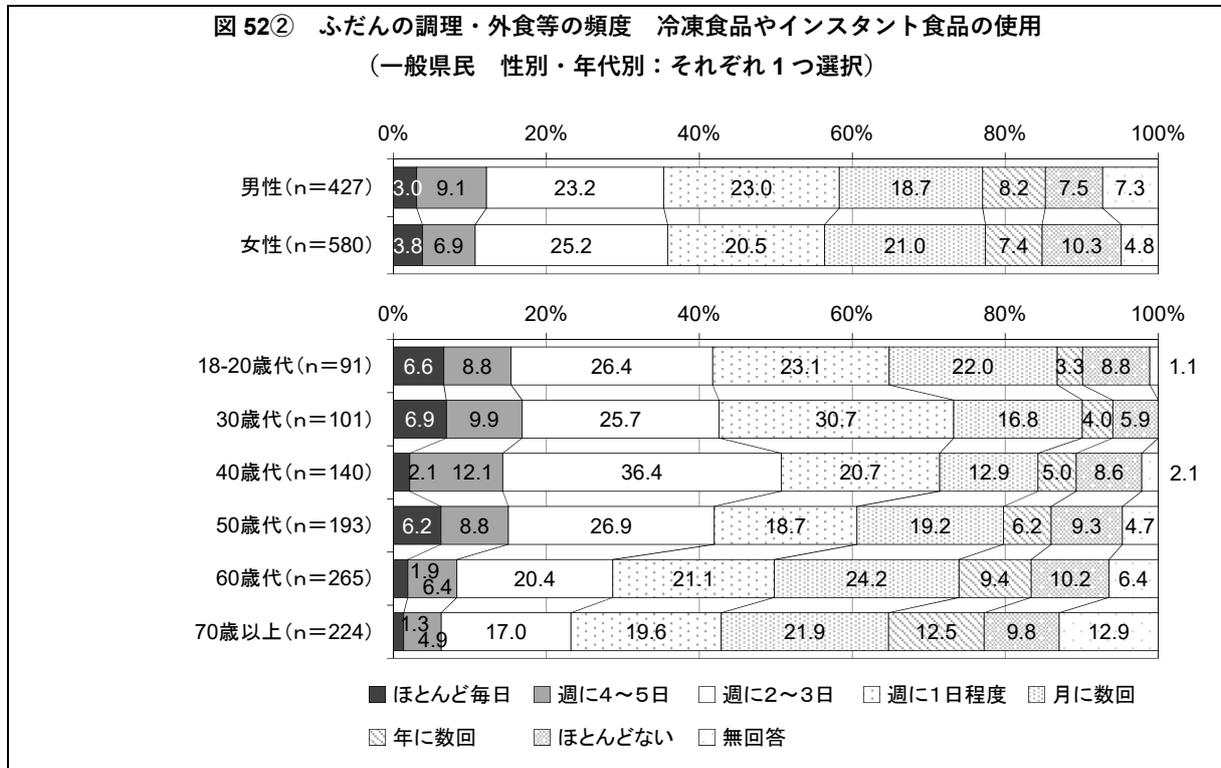
普段の食事で「①自ら調理し、食事を作る」機会について、食育への関心度（問39）と合わせて見ると、「ほとんど毎日」とした人の割合は、食育に『関心がある』が50.9%、『関心がない』が32.2%となっており、食育への関心が高いほうが、「自ら調理し、食事を作る」頻度が高いことがうかがえる。



②冷凍食品やインスタント食品の使用

普段の食事で「②冷凍食品やインスタント食品の使用」をする機会について、性別による大きな差は見られない。

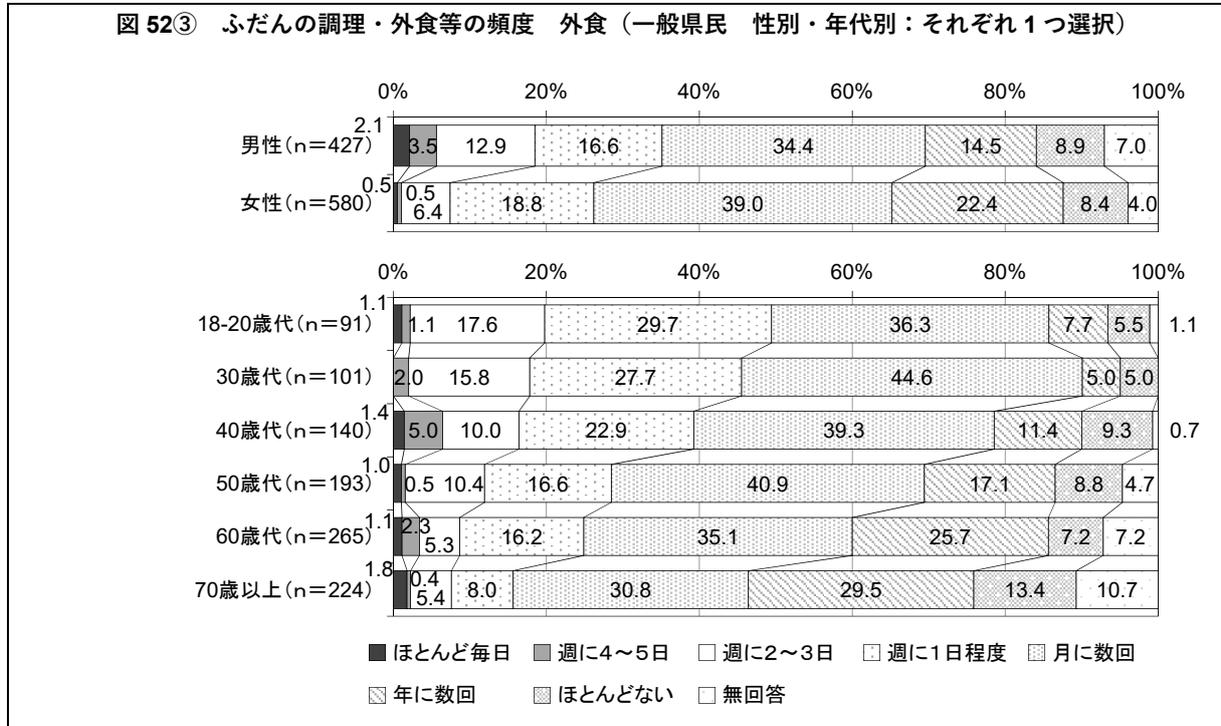
年代別では、18-20・40・50歳代は「週に2～3日」、30歳代は「週に1日程度」、60歳代・70歳以上は「月に数回」とした人の割合が高く、若い年代ほど使用頻度が高い傾向がうかがえる。



③外食

普段の食事で「③外食」をする機会について、性別では、男女とも「月に数回」とした人の割合が高く、男性が34.4%、女性が39.0%となっている。次いで男性は「週に1日程度」が16.6%、女性は「年に数回」が22.4%となっている。

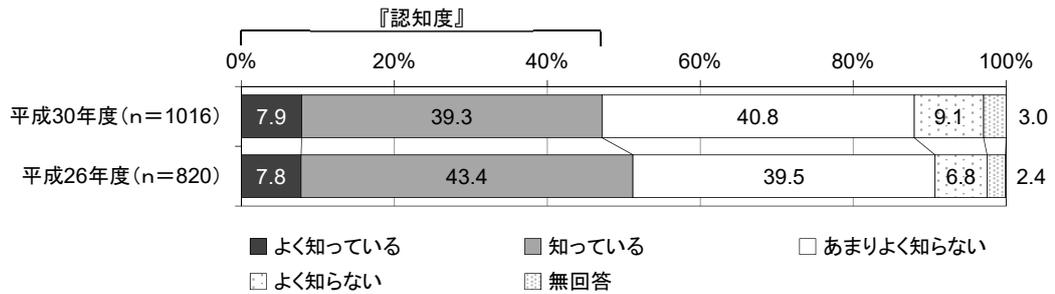
年代別では、若い年代ほど頻度が高い傾向がうかがえる。



問 53 郷土料理や伝統料理など、地域や家庭で受け継がれてきた料理や味について知っていますか。(1つ選択)

郷土料理や伝統料理など、地域や家庭で受け継がれてきた料理や味について、「よく知っている」とした人の割合が7.9%、「知っている」が39.3%で、これらを合わせた『認知度』は47.2%となっており、前回と比較すると、若干低くなっている。

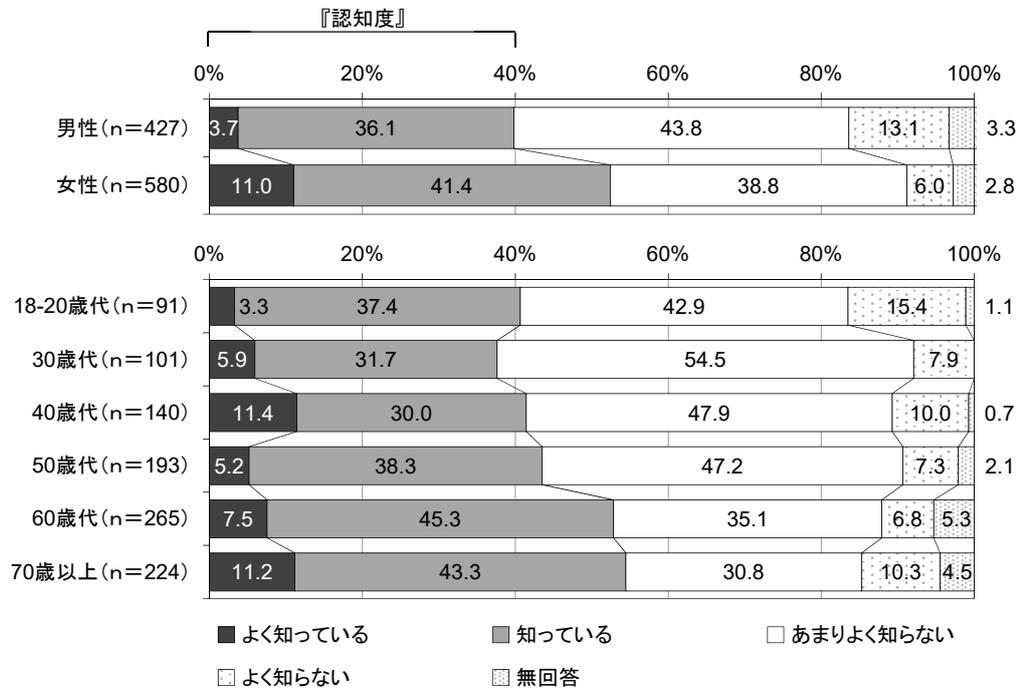
図 53-1 郷土料理など地域や家庭で継承されてきた料理・味を知っているか (一般県民：1つ選択)



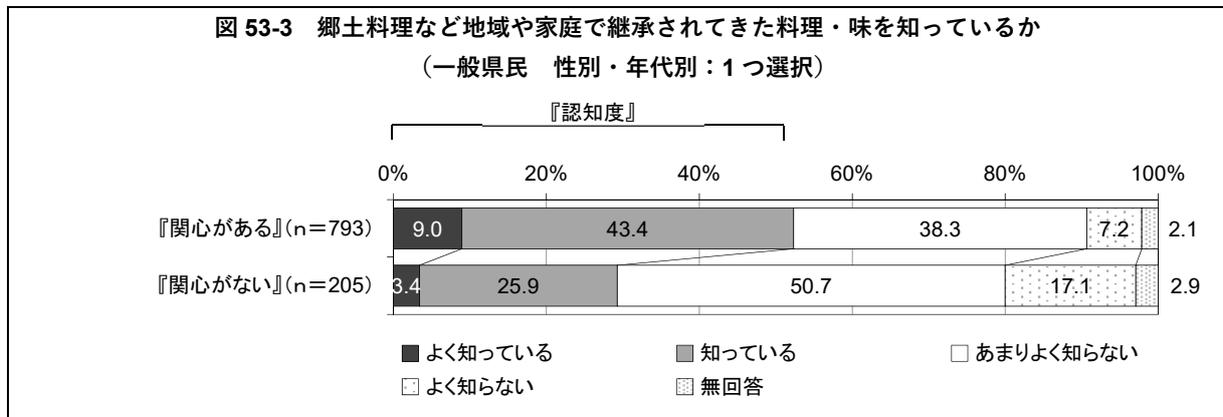
「よく知っている」と「知っている」を合わせた『認知度』は、性別では、男性が39.8%、女性が52.4%となっている。

年代別では、70歳以上が54.5%で高く、30歳代が37.6%で低くなっており、高い年代ほど『認知度』が高い傾向がうかがえる。

図 53-2 郷土料理など地域や家庭で継承されてきた料理・味を知っているか (一般県民 性別・年代別：1つ選択)

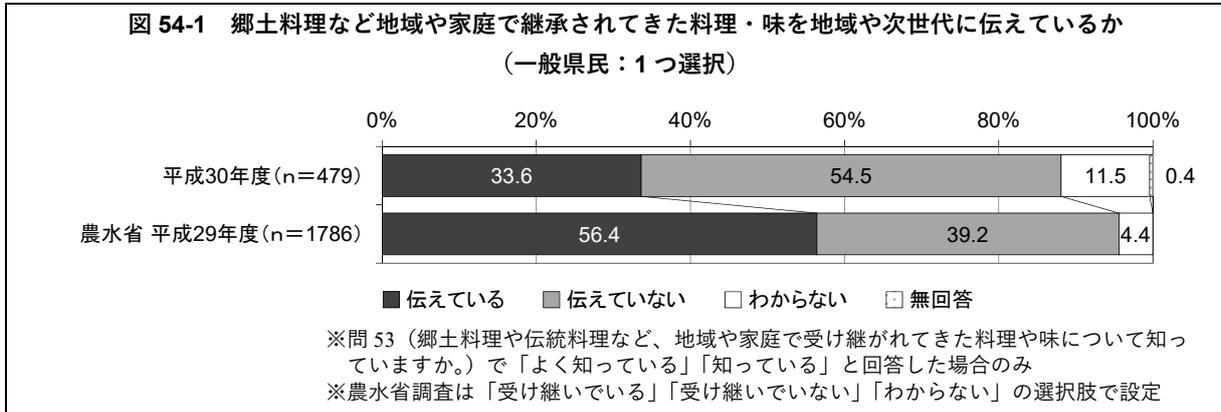


「よく知っている」と「知っている」を合わせた『認知度』について、食育への関心度（問39）と合わせて見ると、食育に『関心がある』が52.4%、『関心がない』が29.3%となっており、食育への関心が高いほうが、郷土料理や伝統料理などの認知度が高いことがうかがえる。



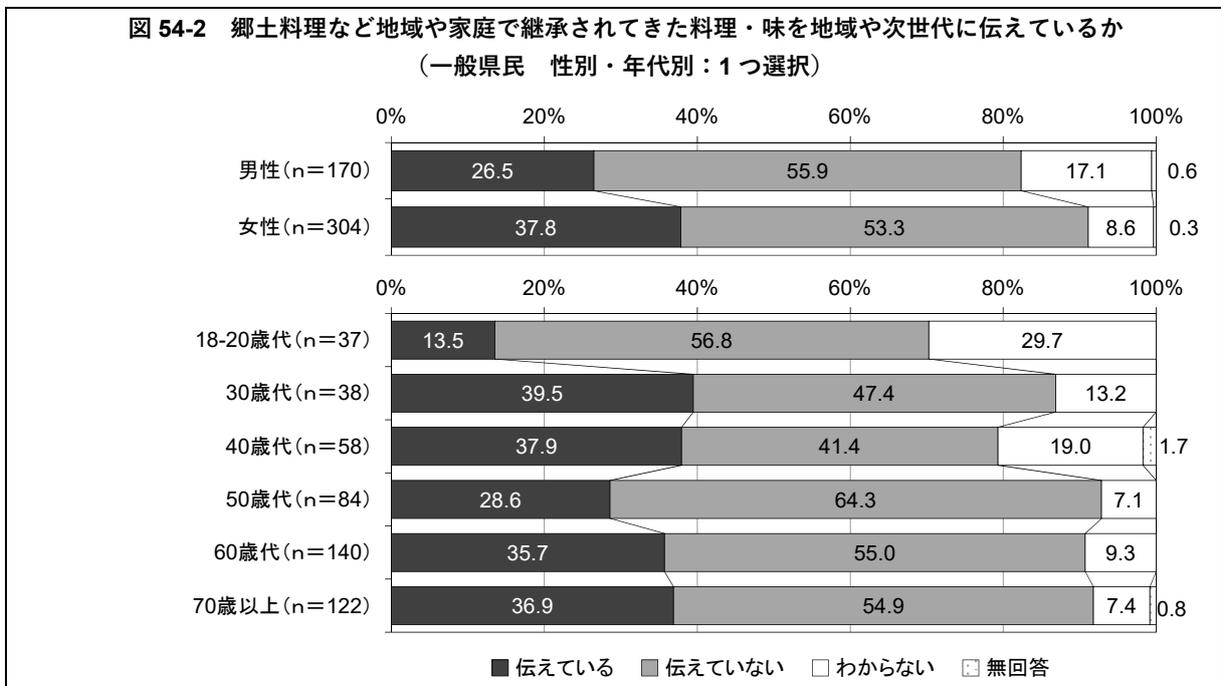
問 54 問 53 で「よく知っている」「知っている」と回答された方にうかがいます。郷土料理や伝統料理など、地域や家庭で受け継がれてきた料理や味を、地域や次世代に伝えていますか。(1つ選択)

地域や次世代への継承状況について、「伝えている」とした人の割合は 33.6%となっており、農水省調査と比較すると、低くなっている。

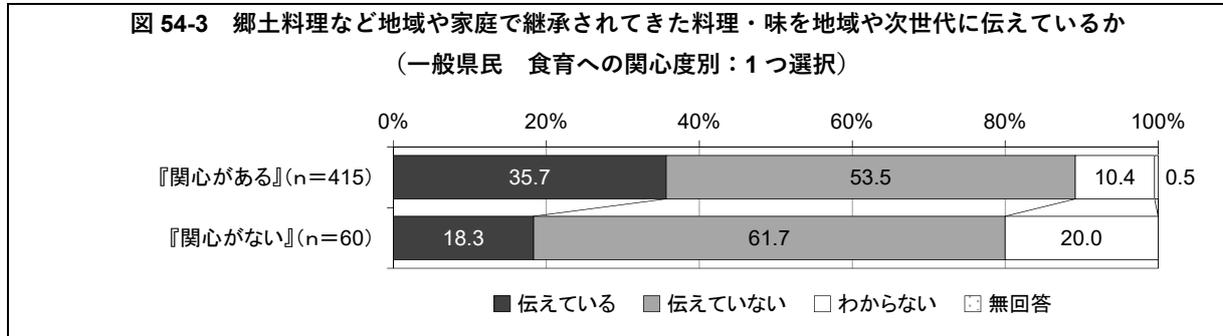


性別では、「伝えている」は女性が 37.8%で、男性の 26.5%より高くなっている。また、男性は「わからない」が 17.1%で比較的高くなっている。

年代別では、すべての年代で「伝えていない」とした人の割合が「伝えている」とした人の割合より高くなっており、18-20 歳代は「伝えている」とした人の割合が他の年代より低くなっている。



地域や次世代への継承状況について、食育への関心度（問39）と合わせて見ると、「伝えている」とした人の割合は、食育に『関心がある』が35.7%、『関心がない』が18.3%となっており、食育への関心が高いほうが、郷土料理や伝統料理など、地域や家庭で受け継がれてきた料理や味について伝えている傾向がうかがえる。

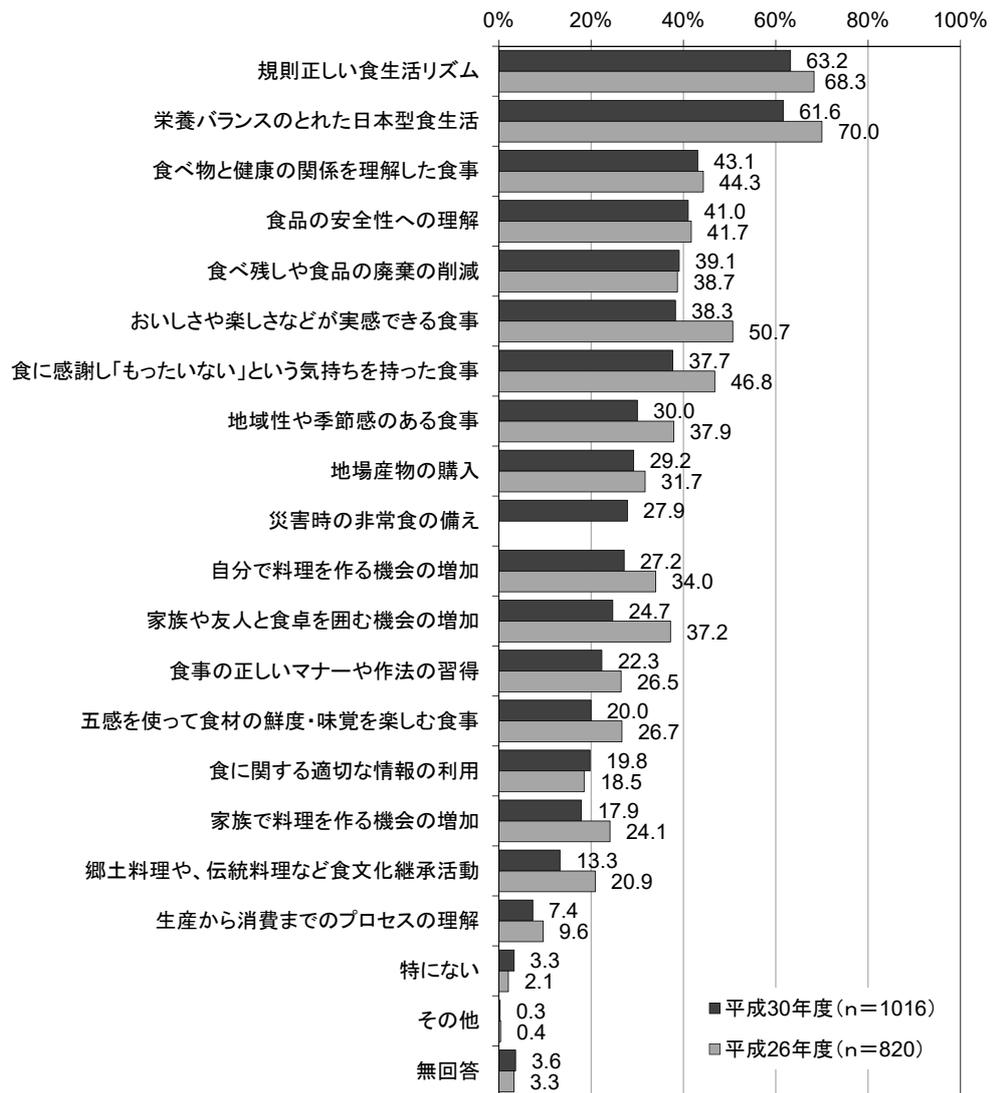


問 55 今後の食生活でどのような面に力を入れたいと思いますか。(すべて選択)

今後の食生活で力を入れたいことについて、「規則正しい食生活リズム」とした人の割合が63.2%、「栄養バランスのとれた日本型食生活」が61.6%で高く、次いで「食べ物と健康の関係を理解した食事」が43.1%、「食品の安全性への理解」が41.0%となっている。

前回と比較すると、概ね同様の傾向を示しており、「生産から消費までのプロセスの理解」、「郷土料理や、伝統料理など食文化継承活動」は低くなっている。

図 55-1 今後の食生活で力を入れたいこと (一般県民：すべて選択)

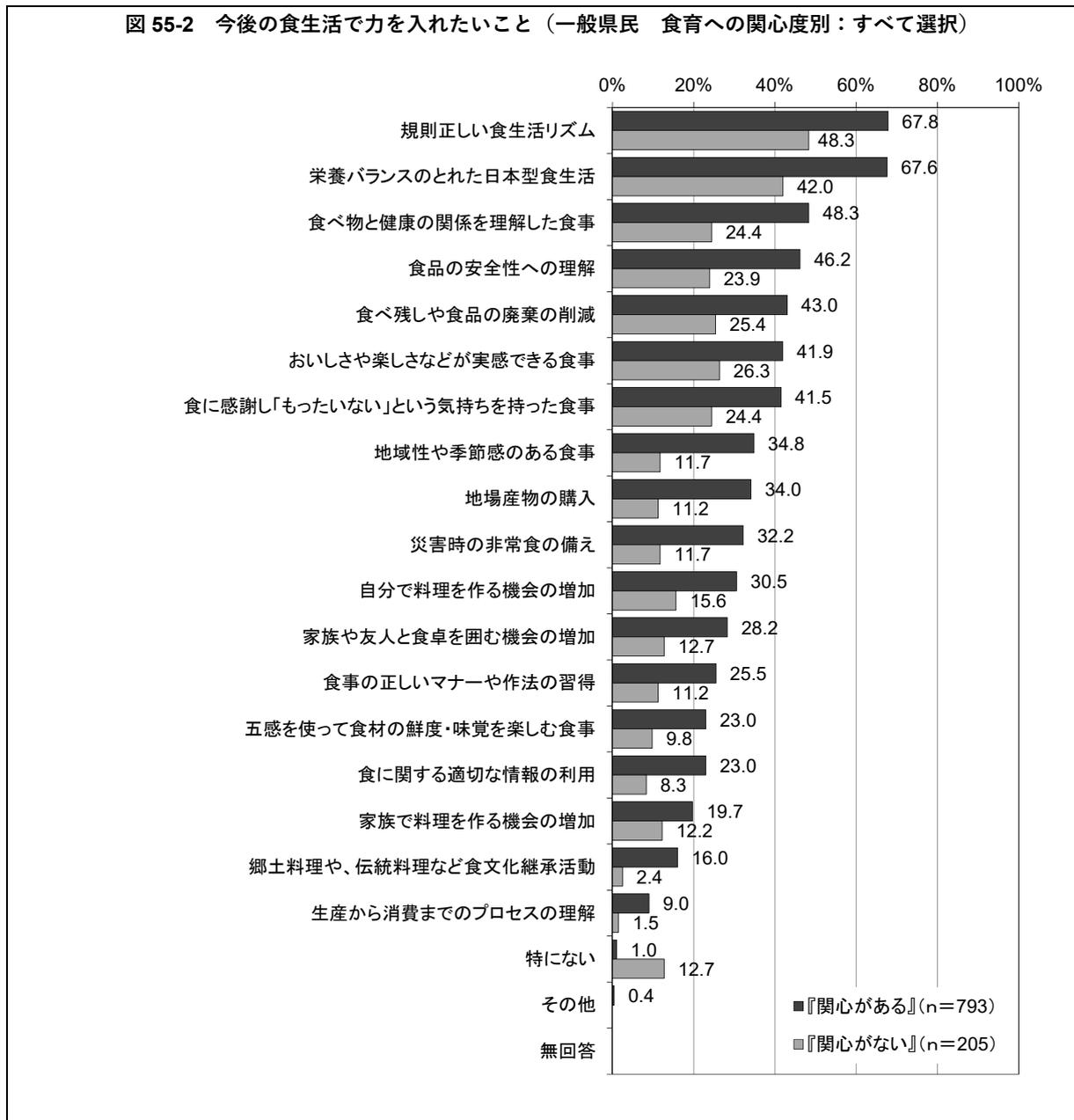


※「災害時の非常食の備え」は平成30年度のみ設定

【その他の主な内容】

- ・食事はいつもおいしくいただいております
- ・有機無農薬野菜をつくる
- ・朝食を栄養バランスのとれた食事に改善したい

今後の食生活で力を入れたいことについて、食育への関心度（問39）と合わせて見ると、「特
にない」を除くすべての項目で食育に『関心がある』が『関心がない』より高くなっており、食
育への関心が高いほうが、食生活での具体的な取組の意向が強いことがうかがえる。



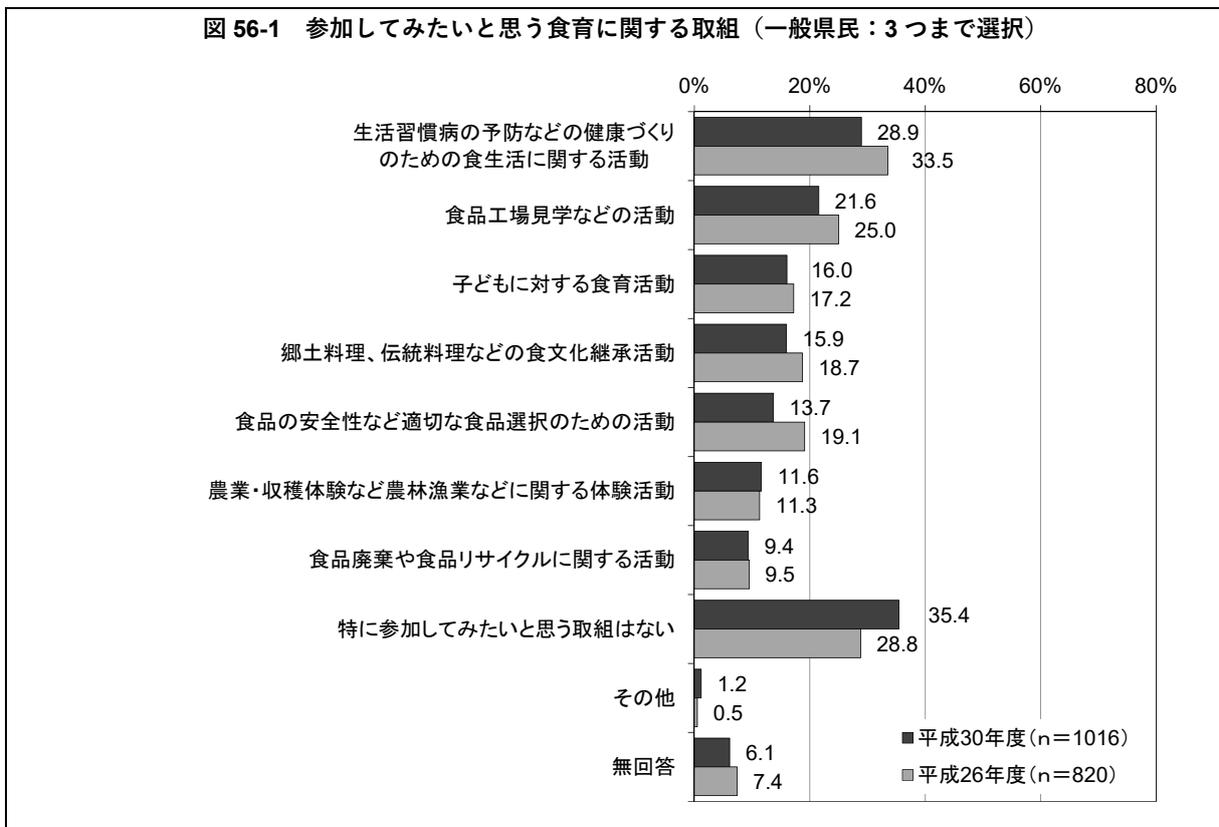
2-19 食育ボランティアについて

問 56 自治体やボランティア、NPO、企業などの食育に関する取組で、参加してみたいと思うものはありますか。(3つまで選択)

自治体やボランティア、NPO、企業などの食育に関する取組で、参加してみたいと思うものについて、「生活習慣病の予防などの健康づくりのための食生活に関する活動」とした人の割合が28.9%、「食品工場見学などの活動」が21.6%となっている。しかし、「特に参加してみたいと思う取組はない」とした人の割合は35.4%となっている。

前回と比較すると、概ね同様の傾向を示しており、「食品廃棄や食品リサイクルに関する活動」、「農業・収穫体験など農林漁業などに関する体験活動」が低くなっている。

図 56-1 参加してみたいと思う食育に関する取組 (一般県民：3つまで選択)

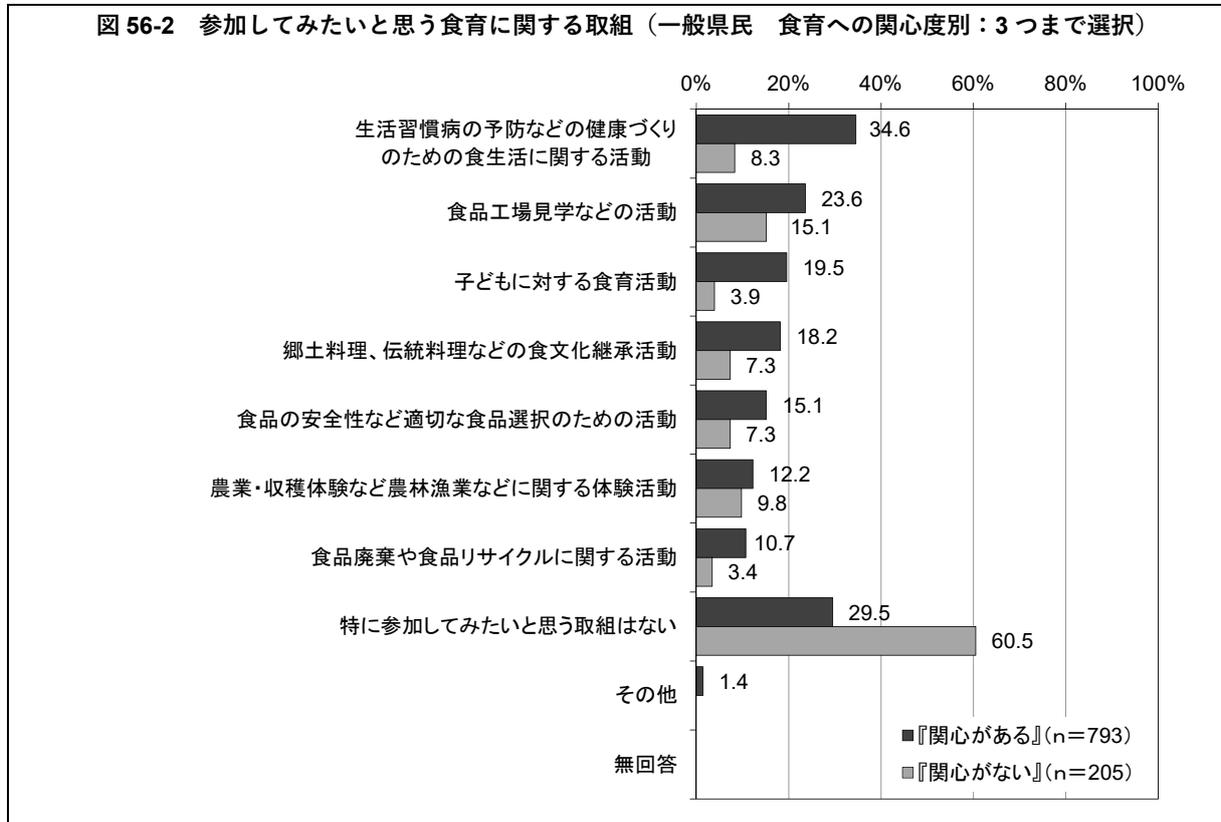


【その他の主な内容】

- ・体力的に活動は無理です
- ・年長的に疲れている
- ・今はボランティアをする時間がとれない
- ・病気なので活動できない
- ・病気で体が不自由なので参加できないと思います
- ・子どもや高齢者だけでなく、中間世代でも1人で食事しなければならぬ人に、集合できる場所をつくっていく取組があると地域の結びつきができる

- ・時間がない
- ・年長的にボランティア活動参加は無理
- ・参加する時間がない
- ・病人が元気になったら参加してみたい
- ・体が健康ではないので参加できない

自治体やボランティア、NPO、企業などの食育に関する取組で、参加してみたいと思うものについて、食育への関心度(問39)と合わせて見ると、「特に参加してみたいと思う取組はない」を除くすべての項目で食育に『関心がある』が『関心がない』より高くなっており、食育への関心が高いほうが、自治体やボランティア、NPO、企業などの食育に関する取組への参加意向が強いことがうかがえる。

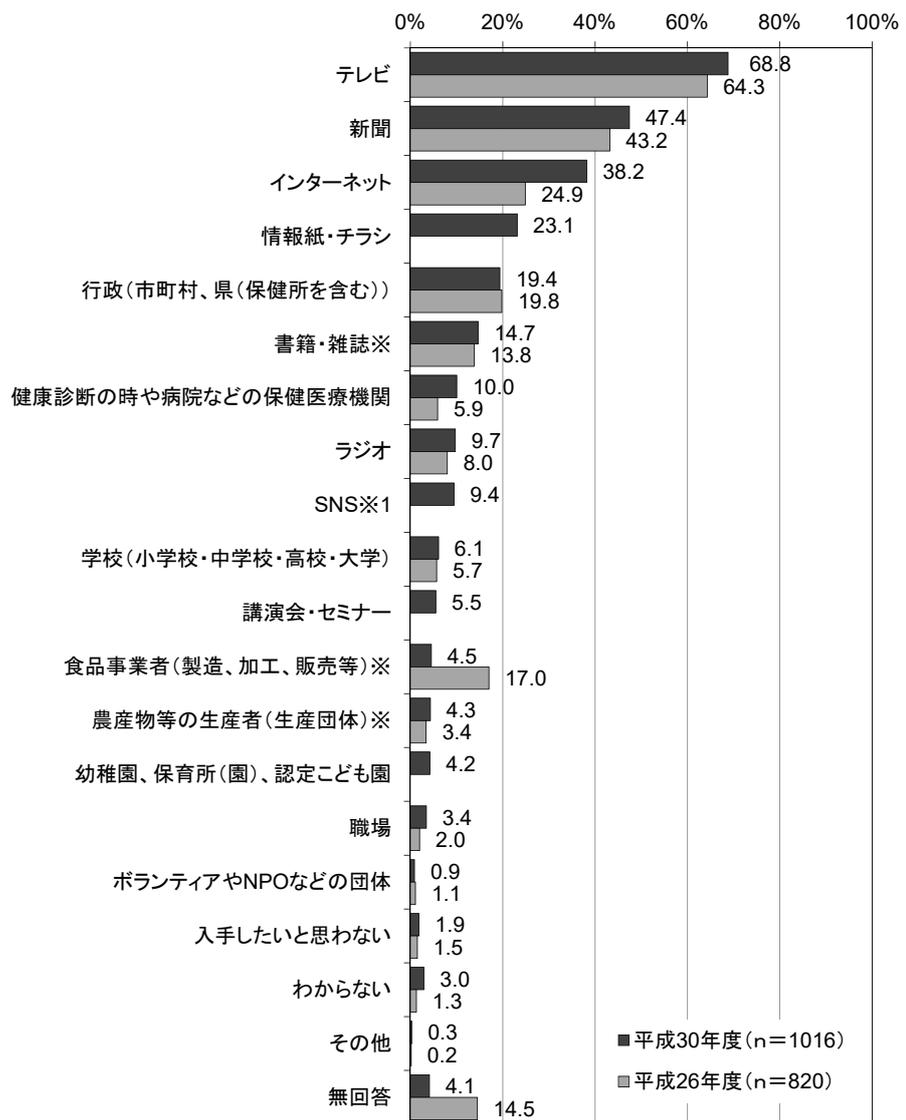


問 57 今後、食育に関する情報をどこから入手したいと思いますか。(3つまで選択)

今後、食育に関する情報を入手したい媒体について、「テレビ」とした人の割合が 68.8%で最も高く、次いで「新聞」が 47.4%、「インターネット」が 38.2%となっている。

前回との比較については、選択肢の表現が異なるため留意が必要であるが、概ね同様の傾向を示している。その中で、上位 3 項目はいずれも前回より高く、特に「インターネット」とした人の割合は前回の 24.9%から 10 ポイント以上高くなっている。

図 57-1 食育に関する情報を入手したい媒体 (一般県民：3つまで選択)



※「SNS」は「SNS (フェイスブック、ツイッター等のソーシャルメディア)」として設定
 ※平成 26 年度では、「書籍・雑誌」は「雑誌」、「食品事業者 (製造、加工、販売等)」は「食品関連事業者 (スーパー、小売店等)」、「農産物等の生産者 (生産団体)」は「生産者」として設定

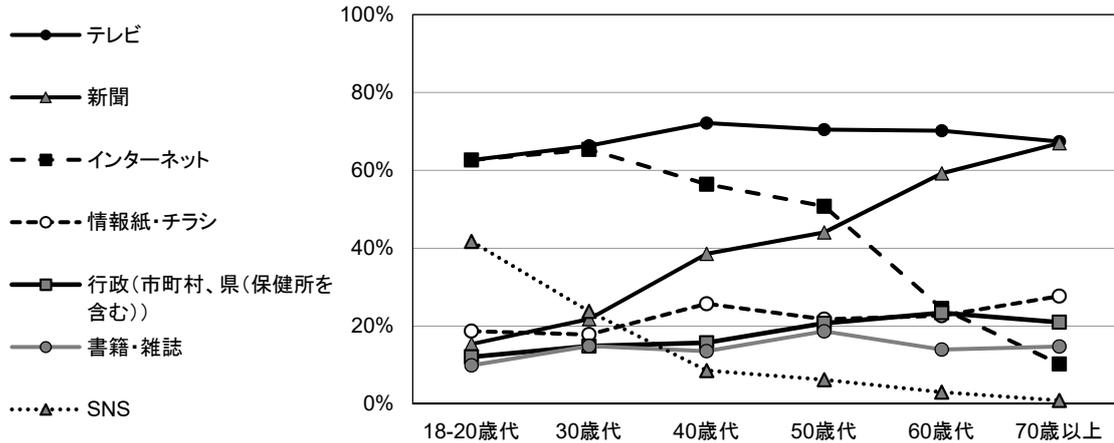
【その他の主な内容】

・ SNS は私にとっては無縁です (わからない)

・ 高齢のため

年代別について、40・50・60歳代では「テレビ」とした人の割合が特に高く、それぞれ72.1%、70.5%、70.2%となっている。18-20・30歳代は「テレビ」と「インターネット」、70歳以上は「テレビ」と「新聞」が同程度に高くなっている。また、「インターネット」は若い年代ほど高く、「新聞」は高い年代ほど高くなっている。新規項目の「SNS」は全体傾向では高い値を示さないが、18-20・30歳代では上位の「テレビ」と「インターネット」に次いで高く、特に18-20歳代では41.8%となっている。

図 57-2 食育に関する情報を入手したい媒体（一般県民 年代別：3つまで選択）

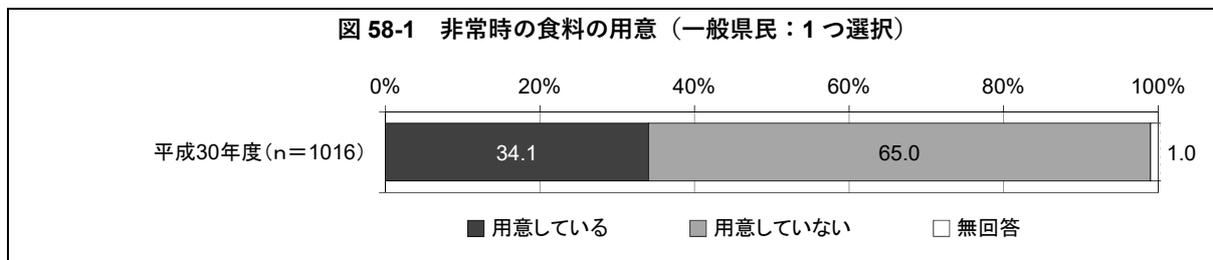


	平成 30 年度					
	18-20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上
n	91	101	140	193	265	224
テレビ	62.6	66.3	72.1	70.5	70.2	67.4
新聞	15.4	21.8	38.6	44.0	59.2	67.0
インターネット	62.6	65.3	56.4	50.8	24.5	10.3
情報紙・チラシ	18.7	17.8	25.7	21.8	22.6	27.7
行政(市町村、県(保健所を含む))	12.1	14.9	15.7	20.7	23.4	21.0
書籍・雑誌	9.9	14.9	13.6	18.7	14.0	14.7
SNS	41.8	23.8	8.6	6.2	3.0	0.9

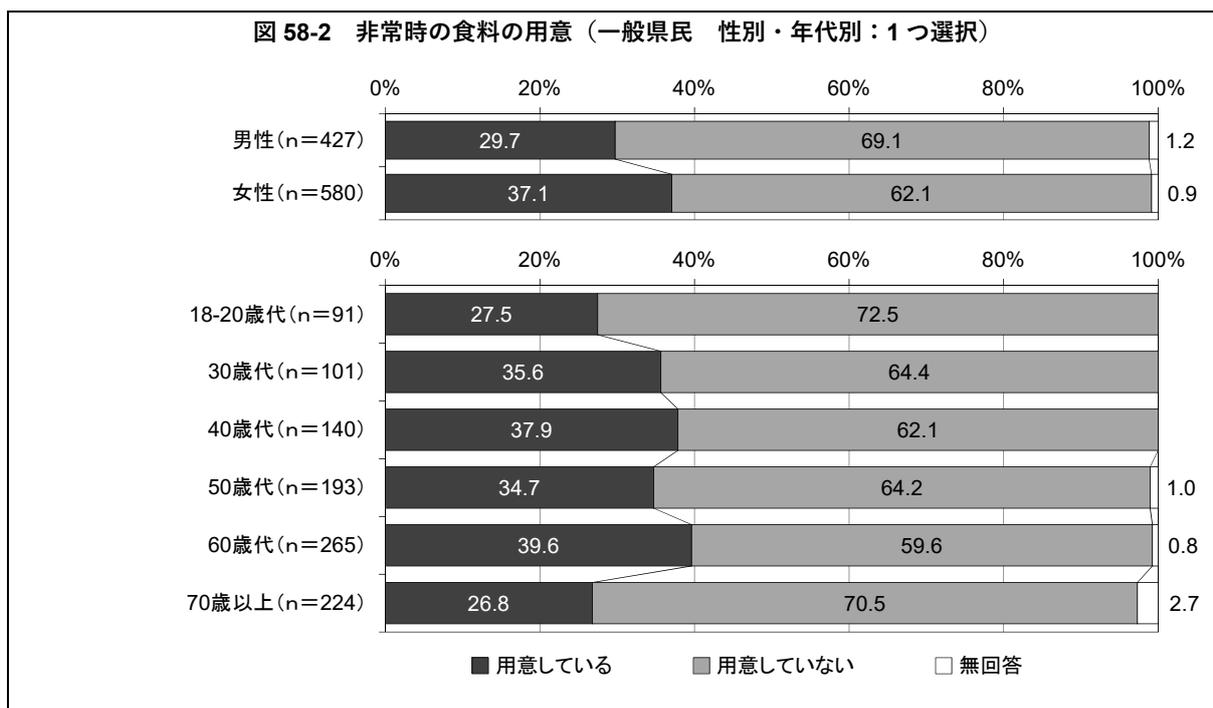
2-20 災害時の備えについて

問 58 災害時に備えて非常時の食料を用意していますか。(1つ選択)

災害時に備えた非常時の食料について、「用意していない」とした人の割合が 65.0%となっている。



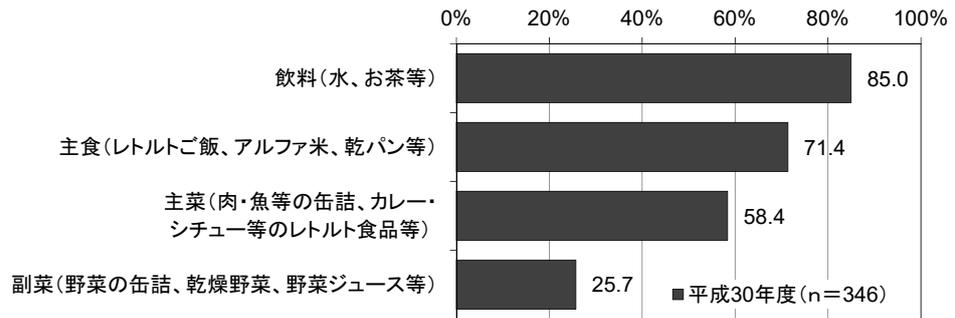
性別では、「用意している」とした人の割合は、男性が 29.7%、女性が 37.1%となっている。年代別では、「用意している」とした人の割合は、60 歳代が 39.6%で高く、18-20 歳代が 27.5%、70 歳以上が 26.8%となっている。



問 59 問 58 で「用意している」とした方にうかがいます。非常用食料としてどのようなものを用意していますか。(すべて選択)

非常用食料として用意しているものについて、「飲料(水、お茶等)」とした人の割合が85.0%で最も高くなっているが、「主食(レトルトご飯、アルファ米、乾パン等)」が71.4%となっている。一方、「副菜(野菜の缶詰、乾燥野菜、野菜ジュース等)」は25.7%となっている。

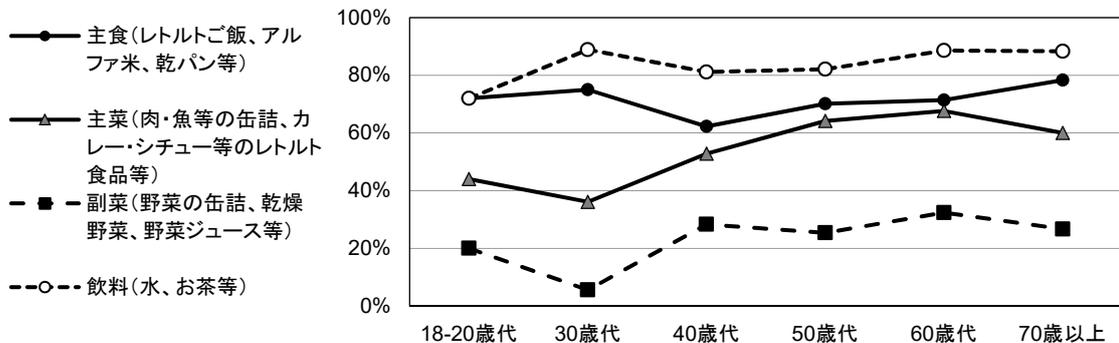
図 59-1 非常用食料として用意している内容 (一般県民：すべて選択)



※非常時の食料の用意について「用意している」と回答した場合のみ

年代別では、すべての年代で「飲料(水、お茶等)」とした人の割合が最も高く、30・60歳代・70歳以上では約90%となっている。また、30歳代は「主菜(肉・魚等の缶詰、カレー・シチュー等のレトルト食品等)」、「副菜(野菜の缶詰、乾燥野菜、野菜ジュース等)」が他の年代より低くなっている。

図 59-2 非常用食料として用意している内容 (一般県民 年代別：すべて選択)



平成 30 年度 n	18-20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳以上
	25	36	53	67	105	60
主食(レトルトご飯、アルファ米、乾パン等)	72.0	75.0	62.3	70.1	71.4	78.3
主菜(肉・魚等の缶詰、カレー・シチュー等のレトルト食品等)	44.0	36.1	52.8	64.2	67.6	60.0
副菜(野菜の缶詰、乾燥野菜、野菜ジュース等)	20.0	5.6	28.3	25.4	32.4	26.7
飲料(水、お茶等)	72.0	88.9	81.1	82.1	88.6	88.3

食品の安全性について不安の理由【問3（2）「その他」の具体的な記述内容】

①食中毒（42件）

- ・自分自身で注意をしてる
- ・店舗で消毒液をトングにかけているのを見るが、どれくらいの割合でそんな液剤を使用しているのか通達がない
- ・気をつけていても季節、気温等防ぎきれないこともあるのでは
- ・スーパーのトングや、第三者からの接触による混入（衛生管理）
- ・衛生面での取扱い。誰でもが手を触れられる
- ・期限切れの品をよく買うので
- ・自分で気をつけてもわからないことだから
- ・高温の製品保存がいい加減
- ・揚げ物を買った時、ゲリ、嘔吐等したから
- ・注意してもなる時はなる
- ・発症原因が不明のまま終わっていること。毎年繰り返しどこかで起きている
- ・事故が多発しているから
- ・すべて不安だけ
- ・加工品の中に入っている
- ・以前外食でノロウイルスに感染したことがあるため
- ・販売者が無知。こわい
- ・時々マスコミを販わず事例のように事業者のコンプライアンスの低さに不安を感じる
- ・いつ自分に振りかかるか
- ・入っているのかわからない
- ・ノロウイルスに感染し、ひどかったから
- ・全てがわからないから
- ・一度、食中毒になったことがあるから
- ・モラルハザード
- ・夏の気温が上がっている
- ・体が弱っている所に食中毒なんて
- ・何時、何処で食すか
- ・自分で2回程大変な思いをした
- ・手洗い他の防止策が不明
- ・ここ数年で家族全員2回なったから
- ・全ての食品の詳しい知識がないので不安はありますが生産者や事業者を信じています
- ・腹痛や体調不良になる
- ・トイレのドアから菌をもらったり、蛇口の栓からもらうかも知れないので
- ・自分がかかったから
- ・他人からの汚染
- ・以前ノロウイルスにかかったので
- ・こわい
- ・気をつけていても防ぎきれないから
- ・自分の家で注意していても他からうつるので
- ・口に入るものだから
- ・死亡事故につながるような食中毒の発生
- ・保育所、スーパー集団感染
- ・自分の食品管理の仕方

②残留農薬（33件）

- ・日本の残留農薬の基準が著しく低いため。欧米よりも遅れていると思う
- ・目に見えないから
- ・表示がないから不安
- ・農薬に害がある
- ・基準値が不透明
- ・自分で気をつけてもわからないことだから
- ・販売している人の説明不足
- ・中国から輸入された食品は不安
- ・農薬使用する生産者の意識
- ・疑いある農薬や食品の限定に及ぶ害が不明のため。わからないままになっている
- ・自分では、見方がわからない
- ・簡単な調査方法がないから
- ・輸入品に混入、海外品
- ・野菜、果物
- ・目に見えない。どれくらいの時間で出る可能性があるのか
- ・輸入品が多いため。国によって規準が違う
- ・時々マスコミを販わず事例のように事業者のコンプライアンスの低さに不安を感じる
- ・中国の食品は正しく表示されているのかが不安
- ・自分がアレルギーのため
- ・いつ出るか自分の身に
- ・残っていてもわからない
- ・生野菜の時は、臭いなど見る程度
- ・中国産の物（2件）
- ・特に中国の物は不安である
- ・残留表示数が食品に表示されれば
- ・自分で作っているから
- ・知らずに摂取している可能性がある。生産者の顔の見える野菜などは良いと思う

- ・もし、残っていたらキケン
- ・輸入食品
- ・すべての食品の詳しい知識がないので不安はありますが生産者や事業者を信じています

- ・アメリカの農薬
- ・残留農薬量はラベルにない

③食品添加物（30件）

- ・どんな保存料が使われているか
- ・日本の食品に多く使われている
- ・コンビニのおにぎり・弁当を頻回に食べる人の健康が心配
- ・日本での認識が低い。「添加物王国」と呼ばれる程低い
- ・添加物の少ない物を買っている
- ・チクロ
- ・表示が細か過ぎる
- ・情報が信頼できない
- ・人体への影響
- ・ほとんどの食品に入っていて、人間の身体に良くないと思うから
- ・できるだけ無添加がいい
- ・どのような形で体外排出されるのか、わからないものが使用されているから
- ・食べなければ
- ・添加物は好きじゃない。なるべく食べない
- ・ヨーロッパに比べると日本の規準がゆるすぎるため

- ・時々マスコミを賑わす事例のように事業者のコンプライアンスの低さに不安を感じる
- ・どのような影響があるのかわからない
- ・自然の和が損なわれる
- ・眼に見えない所
- ・一つ一つ説明書を見ていない
- ・色や甘さを見る
- ・食品の偽装表示があるから
- ・海外に比べ、日本の法律は基準がゆるいから
- ・明らかに着色している
- ・全ての食品の詳しい知識がないので不安はありますが生産者や事業者を信じています
- ・中国の偽装
- ・1日の量が不安
- ・根拠的なものはないがほとんどの物に含まれている
- ・有害性が科学的に証明されている
- ・どれが有害かよくわからない

④輸入食品（40件）

- ・中国製品が不安
- ・あまり使用しない
- ・輸入品に対するチェック方法や管理方法があまり知られていないと感じるため
- ・もっと、わかりやすく表示してほしい
- ・検査があまい
- ・中国製品（2件）
- ・中国産が不安
- ・中国製が不安
- ・中国から輸入された食品は不安
- ・特に中国の食品は衛生管理、農薬など不安
- ・何となく怖いから。中国製のものは特に怖い
- ・イメージとして信用できない。特に中国産は中国人さえ購入せず日本産の物を選んでるので
- ・中国の食が正しく表示されているのが不安
- ・特に中国の物は不安である
- ・特に中国産に注意
- ・入ってくる食品のチェックができてるか
- ・安心できるかの確認がない

- ・買ったことがない
- ・国内との基準の差がわからないから
- ・売らんかなの品物ある
- ・相手国による
- ・時々マスコミを賑わす事例のように事業者のコンプライアンスの低さに不安を感じる
- ・身体に対する影響ダメージが大のため
- ・どのようにつくられたか
- ・信用できない
- ・食べないわけにはいかない
- ・生産した国によって
- ・魚類や肉類が多い
- ・日本と外国の安全意識が違うから
- ・輸入国法制に不安
- ・国（日本）のルールをクリアしているのか心配
- ・輸入の規制はあると思うが、知識がないので不安
- ・残留農薬
- ・農薬とか
- ・全ての食品の詳しい知識がないので不安はあります

- ・けど生産者や事業者を信じています
- ・タイのとり肉
- ・様々な農薬が使われている

- ・加工されて元がわからない。
- ・製造の時刻が使っているかわからないので

⑤遺伝子組換え食品（25件）

- ・わからないから
- ・全くわからない
- ・遺伝子組換えでないものを買う
- ・どんなもの（品目）があるかわからない
- ・アレルギー物質
- ・自然でないため、後の人体への影響・結果の不透明感が強い
- ・外国から製品となり入ってくる
- ・身体への影響について勉強不足なので不安
- ・理解しにくい
- ・味覚で判断できない
- ・弊害が具体的にわからない
- ・栄養不足になる
- ・食べた後の人体への影響が不明。知らぬ間に混入
- ・人間に出る気がする。どのくらいの期間で出るのか

- ・加工した油など「混ざっていることがある」と記載されている文が小さすぎて見落とすこともあるため
- ・時々マスコミを賑わす事例のように事業者のコンプライアンスの低さに不安を感じる
- ・将来どういう影響があるかわからない
- ・眼に見えない所
- ・まだ時期が早い検査を重ねて
- ・加工品の中の材料は不明なので心配
- ・海外に比べ、日本の法律は基準がゆるいから。遺伝子組換えの基準が特にゆるいと感じる
- ・格安食材で調理されている材料
- ・全ての食品の詳しい知職がないので不安はありますけど生産者や事業者を信じています
- ・大豆
- ・必要ないと考えているから

⑥放射性物質（25件）

- ・東電の事故があったから
- ・行政が信じられない
- ・表示がないから不安
- ・事故（原発）
- ・ガンになる
- ・人体への影響
- ・人体によいはずがないという先入観
- ・自分で気をつけてもわからないことだから
- ・行政が国の情報のみで深く調査していない
- ・調べ様がない
- ・私達高齢者は気にしなくても、子どもと孫達のが心配です
- ・目に見えないので不安
- ・今100%安全と答えても数年後のことはわからない。子ども達の安全な時代を望む
- ・目に見えないから
- ・目に見えないものだから
- ・目に見えないのでこわい
- ・見てわからない
- ・子どもが心配。発がん性があるので
- ・原子力発電所の事故
- ・実際に筑波大学で検査したところ、茨城産の物から

- ・規準値越えが見つかったため
- ・時々マスコミを賑わす事例のように事業者のコンプライアンスの低さに不安を感じる
- ・長く食す間に不安がある
- ・すぐ出ないこと
- ・残っていてもわからない
- ・群馬県だから。特にほうれん草
- ・特に中国の物は不安である
- ・福島第1・2原発の残留の放射能がありうるから
- ・ぜったいダメ
- ・もう既に日本全域同じかと思う
- ・検査が信じられない
- ・知識が少なすぎる。知らずに摂取している可能性がある
- ・原発、庭の土壌
- ・全ての食品の詳しい知職がないので不安はありますけど生産者や事業者を信じています
- ・福島汚染
- ・現在でも出荷制限などが続いているから
- ・自分で対応できないものだから
- ・怖い物としか、知らないから
- ・体内蓄積

⑦健康食品質 (19件)

- ・使用していない
- ・十分なエビデンス
- ・科学的根拠がない
- ・具体的な検査データが薬品より厳しくないから
- ・日本の試練に耐えたものでないものが多い
- ・時々マスコミを賑わす事例のように事業者のコンプライアンスの低さに不安を感じる
- ・身体によくないものもあるから
- ・自分に合う物を見つけ出すこと
- ・ほとんど食べない
- ・よくわからないから
- ・内容がわからない
- ・健康食品が多すぎるから
- ・知識不足
- ・長い間、食すと、不用薬品が体に蓄積するのでは
- ・ラベル、説明書に責任、信用が持てない
- ・トクホなどのマークがないものは信用しない。消費者が知識をつけることが必要、項目として機能性表示食品なども増えたので
- ・全ての食品の詳しい知識がないので不安はありますが生産者や事業者を信じています
- ・どこまで本当か
- ・こわい

⑧重金属 (23件)

- ・わからない (2件)
- ・イタイイタイ病のリスク
- ・イタイイタイ病など
- ・人体によいはずがないという先入観
- ・知識不足。全くわからない
- ・今100%安全と答えても数年後のことはわからない。子ども達の安全な時代を望む
- ・どう調べればよいかわからないから
- ・今はないと思いますが病気が怖い
- ・時々マスコミを賑わす事例のように事業者のコンプライアンスの低さに不安を感じる
- ・身体に対する影響ダメージが大のため
- ・すぐ出ないこと
- ・残っていてもわからない
- ・子どもが小さいから
- ・特に中国の物は不安である
- ・体に取り込まれると体外に排出されにくい
- ・規制や基準があるのかも知らないから
- ・知識が少なすぎる。知らずに摂取している可能性がある
- ・どの程度のたれ流しが行われているかわからない
- ・全ての食品の詳しい知識がないので不安はありますが生産者や事業者を信じています
- ・重金属の意味がわからない
- ・怖い
- ・体にだんだんたまるから

⑨食物アレルギー (25件)

- ・すべてのアレルギー検査ができるわけではない。
- ・身近にいるから
- ・どの程度でアレルギーと言うのかわからないから
- ・自分がアレルギー持ちなので
- ・自分がそばアレルギーだから
- ・実際に起きている
- ・時々マスコミを賑わす事例のように事業者のコンプライアンスの低さに不安を感じる
- ・どのアレルギーを持ってるのかわからない
- ・アレルギー物質の表示が十分義務づけられていないから
- ・子どもが小さいのでアレルギーを起こさないか不安
- ・いつ発症するかわからないから
- ・事故は起こる時がある
- ・アレルギーの怖さ
- ・アレルギー体質なのでいつアレルギーになるかわか
- ・らないという不安
- ・子どもがアレルギーだから
- ・自分の体質の問題
- ・強度のアレルギーを発症すると、体に悪影響が生じると思う
- ・表示されている食物アレルギー以外の食物も入っていることがあるから
- ・全ての食品の詳しい知識がないので不安はありますが生産者や事業者を信じています
- ・自分がアレルギー体質のため
- ・アトピー
- ・今は大丈夫でも、突然アレルギーになる可能性があり、気づかずに食べている場合もあるため
- ・アレルギーになるそもそもの問題が解決されてない
- ・重篤な症状になることもある
- ・ほとんど出ない

⑩食品の偽装表示（26件）

- ・肉その他、中国
- ・どこを使用すればよいかわからない
- ・自分で調べる方法がわからない
- ・調べる方法がないから
- ・良心の問題
- ・消費期限切れ
- ・自分で気をつけてもわからないことだから
- ・売る人の姿勢
- ・会社の利益
- ・業者の裏側をのぞく窓がない
- ・時々見ますがやっぱり心配
- ・消費者にとっては表示以外に頼れるものはないため
- ・経営苦から不正に手を出す販売者がいるので、不安。収入が少ない中で人の心が悪い方向に向かっている
- ・時々マスコミを賑わす事例のように事業者のコンプレックスの低さに不安を感じる
- ・わからないことの怖さ
- ・大変困る
- ・TVで取り上げているから
- ・口に入る物は不当表示は×
- ・正しい数値を表示していただきたいと思う
- ・加工品内の材料もしくは販売者表示のみ日本で、製造元は不明なので、詳細は不明確
- ・生産者に不安はないが、事業者不安を感じる
- ・輸入品への管理
- ・全ての食品の詳しい知識がないので不安はありますが、生産者や事業者を信じています
- ・汚染の安心性
- ・肉類の店内の蛍光灯の色に騙される
- ・知らないで食べると怖いから

自由記入

食品の安全確保施策や食育施策についてのご意見がありましたら、ご記入願います。

食中毒

- ・人間社会において、県内で食中毒事故が起こったことは痛ましく、今後、食品材料のルート、記録等、やるべきことがあることはわかっています。行政として考えるのは当然とも言えます。こういう取組(アンケート)も有意義と思います。(男性・40歳代)
- ・食中毒に関しては予防に気を使いたいと思っています。(女性・50歳代)
- ・ノロウイルスについて大変心配しています。自分自身もあまり知識がなく、予防や対策、実際に感染してしまったらどのような対応をしたらよいかわかりません。今後勉強をしていきたいとは思っていますが、これからノロウイルスの時期になるので、講習会などあればいいなあと思います。(女性・50歳代)

農薬

- ・生産者は、利害目的重視ではなく、消費者の立場になって安全なものをつくってほしいと思います。以前、風評かも知れませんが、生産者の家族が食べるものは別につくると言う話を聞いたことがある。薬の使い方に問題があったとのこと。(女性・60歳代)
- ・自分は最近コミック「美味しんぼ」を読むようになってから、食の安全に関心を持つようになりました。野菜は体に良くて農薬まみれでは、かえって体に悪影響を及ぼすので、安全な食品を手にしてほしいと思います。(男性・40歳代)
- ・残留農薬基準検査を今より多くお願いします。県民の健康のため、頑張ってください。(男性・70歳以上)
- ・農薬等の知識はないが、気になる。本当に安全なのか不安。農薬を使った物の除去方法等も知りたい。また、長く食したことによる害についても知りたい。食だけに限らず、体に使うもの等の有害性についても公表してほしい。経皮毒も公表してほしいし、無くしてほしい。子孫繁栄のために。(女性・60歳代)
- ・残留農薬などにあまり敏感になりすぎるのもよくないと思個人的に思いました。(女性・20歳代)

食品添加物

- ・海外では使用されていないのに、日本では未だに使用されている添加物が多いと聞きます。放射性物質も検査されていない農産物が出回っていると聞きます。農家の人は、出荷用の農作物には農薬を使うけれど、自分達が食べる分には使わないと聞きます。国が安全と言っているものが、本当にそうなのか、すぐに健康に影響を及ぼさないだけで、数十年と重ねていくうちに問題が出てくるのではないかと、日々疑問に思っています。行政がOKを出しているものも、けっこう疑ってしまっているのが現状です。(女性・30歳代)

- ・どんな食品に多く含まれるか情報提供を。県民に周知してもらいたい(製品別)。(男性・60歳代)
- ・今の世の中、安心して食べられる物が(安全なのだと思うのですが)少ない様に思えてなりません。子どものお菓子なども子どもの食べ物なのだから安心だと思いますが、本当かと疑いながら購入してしまいます。そのようなことを思っていたら食べる物がなくなってしまうと思いつつ、ちょっと神経質な所があります。知識不足なのですが、添加物、動物(食肉)に与える餌など、安全なのかと思ってしまう時があります。安全だと思って食べさせていたのにそうでなかったときのショックは大きかったです。添加物など必要なのだと思うのですが、安全な対策をこれからもお願いします。どうしたら良いかと言われたらわかりませんが。(女性・50歳代)

輸入食品

- ・輸入食品を少なく、国産の食品をもっと多くして、安心して買うことができるようになるとよいと思います。(女性・70歳以上)
- ・日本人の主食である米飯食を、近年、高齢化社会と言われる中に限らず、次代を担う子ども達にさらにさらに普及させるのが良いと思う。ともすれば肉食・外食に主役をとられがちであるが、魚や菜食を併せたバランスの良い食事は和食が一番と考える。国内生産が可能な限り、米麦、野菜、果物の生産を進めて、農家離れを食い止め、何でも不足分は輸入する考えに一考を要する(学校給食や団体飲食等)。衣、食、住のうち、食べ物が一番と考えればいろいろあってキリがないです。何とぞよろしく願い申し上げます。(男性・70歳以上)
- ・輸入食品(中国製)の安全を県はどのようにしていますか。(男性・60歳代)
- ・日本の食料自給率を高める方向に行政が考えてほしい。日本の伝統食、和食に世界の関心が集まっている昨今、その食材にも自分達ももっと関心を持ち、継承していけるよう、応援したい。購入も日本のものを。(男性・70歳以上)
- ・アメリカ牛肉やチリのサーモンなどがスーパーで売られています。本当に安全なのでしょう。(女性・50歳代)

遺伝子組換え食品

- ・遺伝子組換え食品が、知らぬ間に加工食品の中に代用品として混入し、食べた場合、消化されて、どう影響してくるか。害虫が寄りつかないとか、害虫が食べないものとか、とんでもないことだ。この世に存在しないものの影響。(男性・60歳代)
- ・遺伝子組換え食品は、十分な期間、安全性が確かめられた訳ではなく、自然界、人間に与える影響がとても不安です。(男性・40歳代)

放射性物質

- ・放射性物質の検査 HP を参考にしています。地域によっても数値が異なるので、なるべくたくさん地域の色々なものを計測していただきたいです。電子レンジの危険性も教えていただきたいと思います。(女性・30 歳代)
- ・原発事故が起きてから放射性物質が気になります。専門的なことがわからないので数値についての説明を知りたいのと、計測してもらいたいです。群馬の物は大丈夫なのか、このまま食べ続けて大丈夫なのか不安です。子ども達に将来、影響が出ないよう、計測(検査)をしっかりとしていただきたいです。(女性・30 歳代)
- ・県内で販売されている野菜等に含まれる残留放射性物質の測定結果を県民に周知してもらいたい(地域別)。水質についても同様な測定結果を定期的に周知してもらいたい(地域別)。(男性・60 歳代)
- ・放射線について心配です。まだ輸入禁止国が多数あります。国へ提言して行ってほしいです。子どもの達の未来が明るく長生きできるように。健康被害が本当に心配です。(女性・50 歳代)

アレルギー

- ・今、アレルギーや食中毒が年々増加しているように日々感じています。保育園に勤務しているから余計になのかもしれませんが、子ども達のためにも責任を持って安全管理やアレルギーの除去をより一層心掛けていくことが、これから先も大切なのだと思います。国や県が私達のような民よりも早く動き、実行していかなければ示しがつかないと思います。子どもが安心して楽しく食事できるのが一番です。(女性・20 歳代)
- ・税金のムダ遣いにならないような施策をしてください。災害時のアレルギー食対応は必要です。(女性・50 歳代)

食品表示

- ・加工食品の原産地(国)表示の徹底。残留農薬や放射性物質の検査強化。ノロウイルス等の保持者の飲食店等の出入りに対するマナー向上などの啓発。(男性・50 歳代)
- ・栄養成分表示に糖質を数値化した項目を表示することが可能ならば、ぜひ加えてほしい。(女性・60 歳代)
- ・行政が消費者目線に立っているかどうか疑問です。表示法改正にあたって、メーカー側に立っていると思います。原産地表示が「国産又は輸入」など理解できません。また、加工食品についての原産地表示がないものが多く、外食産業なども同様です。全ての輸入食品が悪いとは思いませんが、消費者が選択する基準としてより正確な表示をしなければおかしいのではないかと考えます。コストより安全。年齢もありますが、「良い物」を「少し」食していきたいと思います。(男性・70 歳以上)

- ・栄養成分表示についてですが、その食品のみならず、一日に必要な摂取量が常に併記されていると、摂取基準の参考がより具体化し、ありがたいと思われます。様々な工夫やご尽力、ありがとうございます。(女性・50 歳代)
- ・いつもスーパーで買い物をする時、お肉の生産地が書いてないところが多く、購入をためらいます。すべて、生産地を書いて(表示)してほしいです。(女性・30 歳代)
- ・食品添加物、残留農薬の状況、遺伝子組替食品等は消費者にわかりやすく(赤字等で)商品に表示できないか。(男性・70 歳以上)
- ・食品の偽装は会社の内部告発からでないとなかなか表に出ませんが、抜き打ち検査を頻繁にさせていただきたい。信じきっている消費者を裏切らないでほしいです。(女性・60 歳代)
- ・表示されている内容をしっかり信用してよいものか不安だらけで、最終的には自己管理責任で食品を選び、食べる時代だと思っています。何が正解で、何が間違いかなんて消費者にはわかりません。(男性・40 歳代)
- ・賞味期限が表示されているものは、いつまで消費できるのかわからないため、全ての食品に消費期限を表示してほしい。(男性・30 歳代)

食育

- ・子どもに対しては、食育について学校で授業の一環として十分に教えるようにしていただきたい。(男性・30 歳代)
- ・やはり、学生でもない自分から学びに行こうというのはなかなか難しい。(男性・20 歳代)
- ・学校等で食事のマナーや朝食の大切さについて講演してほしい。(女性・30 歳代)
- ・健康管理は自己責任。(男性・70 歳以上)
- ・子どもの食育に関しては、学校など公的機関に任せきりの家庭も多いように思います。しかし、入園や入学までに教えるべきこともたくさんあります。また、入園・入学後も、園や学校でできるのは3食のうち1食分で、しかも限られた時間しかありません。ですから、家庭(親)への教育や啓発をもっと積極的に行うべきだと考えます。(女性・60 歳代)
- ・個々の人生(生活)が多様化している時代だからこそ、男女問わず幼少期からひとり暮らしで自炊できるよう、結婚したら家族に手作りの食事を食べさせるよう、食育をする必要があると思います。(女性・60 歳代)
- ・一歩引いて地球的視点から見ると、プラスチック袋やゴミの削減が広がっている。世界人口の増加により、豚、牛などの畜産肉が足りなくなる懸念もあります。自分はインターネットで、食肉加工工場へ運ばれるトラックに乗せられる時に涙をかべた牛の話を見ました。肉類を食べた後は、前後必ず手を合わせます。人間の安全も大切ですが、「生物の尊厳」というものを一人ひとりが少しでも持ち、命をありがたくいただいているという意識を皆にもってもら

たいです。(男性・40歳代)

- ・食の安全等の話は、自分自身が主体的に行動して知識を得ないと身に付かないと思う。今の親にはあまり期待できないと思うので、学校教育の1つに落とし込めたらと。市町村教育委員会単独ではなく、全部の協力で給食の時間を利用して、少しずつ教えるのが、食の安全を守る早道ではないのかなと。もちろん簡単ではないが。(男性・50歳代)
- ・食育は大変。いつも気にかけています。子どもにはやはり食べることはとても重要です。幸せな子どもが、たくさんになることを願っています(女性・60歳代)
- ・食育については家族で考えて子供が安全でおいしく食べられるか、材料なども残さないようにしたい。(男性・60歳代)
- ・10~20歳代の若い女子の痩せ過ぎ問題に対して、小中高から正しい食育を行う必要があります(やせ=健康、美しいではない)。女性タレントの発言広告にまどわされないことや将来の妊娠とくに備えて必要な知識など教えてほしい。実際痩せ過ぎ妊婦でも妊娠糖尿病はある。もちろん太りすぎも良くない。痩せ過ぎが不妊の原因にもなる。自分にとって適正な栄養、体重のことについてきちんと教育する必要があると思います。(女性・50歳代)
- ・地域にお住いの栄養士、保健師の方々が、公民館等で専門の知識を活かした講習会など、草の根活動として住民に指導いただければ意識が高まると思います。(女性・70歳以上)
- ・子どもが大きくなるにつれて、食事が疎かになることが多く、しっかりしたご飯よりも、子どもが好きなハンバーグ、ファーストフードなどが多くなりがちなので、少し考えてあげたい。家でしっかりご飯を作ることを子ども達も学んでもらいたいです。(女性・30歳代)
- ・仕事を通して現代の子ども達の食べ物への関心の低さを感じています。物があって当たり前時代にいかに関心を持たせるか、家庭から、母親、父親らが関心を持つことから始めなければならないと思います。(女性・30歳代)
- ・食育という言葉に違和感しかありません。食生活、食文化等の言葉があるのに、わざわざ食育などという言葉を作った意味がわかりません。食育という言葉によって、ありふれた普通のことが、お役所仕事のおしつけになっているように感じます。(女性・50歳代)
- ・食育は大切です。家庭の大切な時間の中で少しでも何か伝えられればと思っていますが、難しいですね。(男性・40歳代)
- ・食育の日に小学校で給食を出さないのは意味がわからない。家庭間格差が大きくなる。お金がなくても、必要な栄養を1日1食でも提供するのが給食の役割ではないか。(女性・20歳代)
- ・学校給食での残量がまだあるようです。残量ゼロになるような食育が実施できると良いと思います。(女性・50歳代)

生産者・事業者

- ・企業は、食の安全管理を意識しながらも、コストや売上げ(利益)の面から、社内基準が緩くなることがある。それは消費者には見えないところなので、監督する行政が厳しく検査をしてほしい。消費者は、店に並んだものを見定めて安全やら栄養やらの表示を見て、考え、選ぶことで、自己責任を負うものだと思います。(男性・50歳代)
- ・日本の食糧生産の安定、農村の普活。(女性・70歳以上)
- ・多く見られる休耕地を再利用し、国内産の食糧自給率が高まると良いと思います。(女性・70歳以上)
- ・野菜は地場産の物を買っています。地産地消が良いと思っているからです。見た目より安全な作り方をしてもらって、安心して食べさせてもらえるのがありがたいと思います。県内で作られた物をもっと手に入りやすくなったらと思います。(女性・50歳代)
- ・食品を安全な形で口に入れられるように、生産者、行政、店で行って消費者に届けてほしい。(男性・60歳代)
- ・できれば国産の米・野菜などの農産物などを食べられればと思っています。ただ農家の方の高齢化や雑草の生えた畑や田んぼを見ると難しいのかなと感じています。行政と事業者の方の努力に期待しています。将来的には効率よく衛生的な農法が進んでくるのかなと思いますが、土から栄養をもらった農産物も大切にできたらよいと思います(女性・50歳代)
- ・できるだけ国内の生産を増やしてほしいです。今、農業をする人がどんどん減ってます。畜産も同じ。何とか今後、農業や畜産をする人を増やしていく方法をみんなで考えてください。せめて50~60%は国内でまかなってほしいです。農業の現場も畜産の現場も今や外国人に頼らざるをえない状況だと聞きます。なるべく、外国に頼らない方法を考えてほしいです。(女性・50歳代)
- ・事業者の衛生管理に対し、自主的にコンプライアンスを守っているのか不安である。魚介類の体内に蓄積される人工的な物質による影響に対する不安。(男性・30歳代)

行政・検査・監視・規制

- ・普段スーパーに並んでいる食品が、残留農薬や食品添加物、放射性物質等について、安全性が確実に保証されていてほしいと思います。(男性・60歳代)
- ・県で農薬等について指導してください。(男性・60歳代)
- ・販売者、生産者を十分監視し、県民の健康を守ることが行政の責任である。これを怠るのなら税金を徴収する意味がない。(男性・30歳代)
- ・食品製造会社や販売店などの検査の際は、時々抜き打ちでやってほしいと思います。何月何日何時などと決めておくと、その時だけ守って基準通りということをして検査が通ったというのでは困ります。これからも安全な食事ができますようよろしくお願い

いたします。(女性・60歳代)

- ・食品添加物の人体許容量のエビデンス、残留農薬・放射線・有機物等、一個人で安全性を確保するのは難しい。行政の指導・検査・監視等、くれぐれも手抜きのないように切望します。(男性・70歳以上)
- ・食品工場や農家が、きちんと決まりを守らなければ安全な食は望めない。県の厳しいチェックをお願いします。(女性・50歳代)
- ・先日、高崎のもてなし広場で「肉フェス2018」が開催され、そこで販売されていたハンバーガーを食べたらその日にお腹がぐだり、1日中お腹を壊していました。それ以外の食べ物は食べていなかったのですが、その時の肉が原因としか言いようがないのですが、夏場の暑い時の肉の管理は特に徹底してほしいです。(男性・40歳代)
- ・皆様の日々の食の安全のためのご尽力に敬意を表します。長期的に人への影響が出ること、人への影響の立証が困難なこと、例えば食品中の放射性物質、遺伝子組み換え食品、残留農薬等への粘り強い調査及び安全対策をお願いいたします。さらに食糧の国の自給率を高めることも大切なことと考えています。どうぞよろしくご願ひ申し上げます。(男性・60歳代)
- ・皆が細かな食品の知識を高めるのは難しいと思うので、安全な物しか生産、販売等しないシステムになることを望みます。個人的にはインターネットを使って勉強したいと思います。(女性・60歳代)
- ・とにかく、基準値を満たしている安心なものを食べたいです。(女性・30歳代)
- ・今後も、食品の安全に関する監視に取り組んでいただきたい。(男性・60歳代)
- ・安全性については、行政や事業者の方々がしっかり行っていただくことが第一で、我々消費者は、それを信じていくしかないのです、管理の方よろしくご願ひします。(女性・60歳代)
- ・食品の安全確保に行政力を充分してください。(女性・70歳以上)
- ・残り少ない日々の生活で、バランス良い食生活を心がけ、危ない、いかがわしいと思われる食品は口にしない。高齢化時代に向かって行政は食品の安全性のチェック、指導を一層高めてほしい。多くの老人は一つひとつ確認などしていない。(男性・70歳以上)
- ・食料自給率が低く、生産者も減っているなか、子ども達の将来のことを考えると日本はどうなっていくのかと不安になります。私は、価格は安くなってよいので、自国でつくられたものを食べたいと思います。生産者の中には真面目に考え取り組んでいる方もたくさんいると思います。行政には、そうした方々(企業であっても個人事業主であっても)へのサポートと労働環境の改善に向けて力を入れてほしいです。(女性・40歳代)
- ・群馬の食品は絶対安全だと胸をはって言えるような、きめ細かな食品規制を期待しています。(男性・20歳代)

- ・食品の安全は、消費者では全く維持できません。行政が厳しく生産者や事業者に指導していくことが、消費者への安全を確保できるものと考えます。(男性・40歳代)

情報

- ・食品衛生責任者などの機会でもweb案内をされてはいるかがですか。(男性・50歳代)
- ・県の安全に関する情報発信についてですが、若者はネットを使うが、年配の人は使わない人が多いので、それ以外の情報発信が大事だと思いました。(女性・50歳代)
- ・テレビでの情報発信が少ない気がします。(女性・30歳代)
- ・県のホームページは時々見ますが、細かすぎて見にくく、見落としてしまいます。ネットを使用しない方もいると思うので、広報紙等で知らせしてほしいです。(女性・60歳代)
- ・情報発信方法として、ホームページやフェイスブック、講演会等があるが、高齢者など、情報入手が難しい人のことも考えて発信してもらえたらと思う。情報紙というコンテンツもあるが、どのようにして県民の手元に届くのか、どのように入手するのか不明であり、もっと広報活動して、県民の食の安全を確保していただきたい。(女性・50歳代)
- ・食の安全について関心があるものの、行政の取組が今ひとつよく見えてこない。パソコンを持たず、ホームページと縁の無い者でも手軽に情報が得られる仕組づくりを行ってほしい。祭事等の身近な場所での啓蒙活動を行えば、未来を担う子ども達の目に触れることとなり、親子のコミュニケーションの話題に「食」というテーマも提供できるのではないだろうか。法令遵守・食育・道徳はすべてひとつの根から派生する問題だと思われる。(男性・70歳以上)
- ・国や地方の行政が、食の安全対策業務を推進してくれていることは評価しています。ただ、事故や事件が起きてからでなければ、多くの一般市民は自分の問題として考えません。食品の安全対策と自己防衛について、具体策(事項)等をわかりやすく、日頃からPR(各家庭まで届くよう)する等、身近な行政から繰り返し発することも有効ではないか。(男性・70歳以上)
- ・食品の安全確保施策については、危険だと思うことは避けた方がよいと思いますし、もっと食品が安全だということを県民の皆さんに伝えていく施策がほしいです。調理済の食品が簡単に手に入る時代ですが、調理済=安全=安心という形になるのは難しいと思います。健康寿命を伸ばすためにも、高齢者等に対する広報活動を推進してほしいです。(女性・60歳代)
- ・こういった取組は、子どもや高齢者対象に偏りがちだが、30~50歳代の中間世代も実際には孤立しがちになっている社会なので、情報豊富なこの世代にも気軽に話し合えて集合できる場所があれば、やがて高齢になった時、子どもに頼ることができなくても助け合って自分達で場を乗り越えていけることにつ

ながると思います。情報交換ができれば、子育てや孫の世話、親の介護など行き詰まるのが少なくなるとは思います。情報交換したくてもその場が無いのが現状です。(女性・40歳代)

- ・ホームページとか、SNSとか、インターネットでご覧くださいとかいう言葉が、TV等で言われると、私達の年齢ではよくわからないので、あきらめてしまいます。時代が変わって若い人が多くなっているの仕方ないのかも知れませんが。(女性・70歳以上)
- ・食品の安全性を確保するためには、自身の食品への関心と意識を高めなければと思いました。情報入手は様々なので、理解を深めるためにも活用していきたい。(男性・30歳代)
- ・興味を持っている人以外は、自分から県のHPなどにアクセスしてみる人は少ないと思うので、業界団体や協力団体(全く関係も無いような所でも)とコラボして、SNSなどで、個人に向けて情報発信した方が効果的だと思います。興味を持つ、知る人の割合が増えるかだと思います。(男性・50歳代)
- ・旬な食品のおいしいようなレシピがのっていると目がいくので、そこに情報が同時に記載されると読みます。活字だけだと敬遠しがちです。(女性・40歳代)
- ・基本的には、人間が加工した回数なるべく少ないものを購入したいと思っていますが、元の元から汚染組み変えが行われている現代社会では、個人で取り組むことができる範囲は限られていると思います。情報提供は正直に行ってほしいです。(女性・60歳代)
- ・感情に流された情報でなく、科学的に正確な情報を求める。(男性・50歳代)

災害時・非常時

- ・災害時に備えての非常食の用意をしていないので、改めて準備するべきだと考えさせられました。(女性・30歳代)
- ・非常用食料の消費期限が早くて困る。(女性・60歳代)
- ・日頃、1週間位の食べ物は保存するようにしている。例えば米、梅干し、トイレットペーパー、調味料、洗剤、昔オイルショックがあったため、食品の安全性は不安だが、食べなければ栄養不足になる。(女性・70歳以上)

その他

- ・辛目の評価としたつもりですが、祖父母もある程度長生き、父もガン早期発見、私は将来？ですが日本人は一応長寿であることから、必要以上におそれる必要があるのかは、うちとしては、今の所不安を感じて生活はしていませんが、疑っています。(男性・40歳代)
- ・食べ物があるだけマシなので。あまり面倒なことは考えていません。(女性・50歳代)
- ・家庭菜園、地域菜園の環境づくりが大事だと感じて

います。(男性・50歳代)

- ・食生活は大変だと思うので、これからも頑張って作って食べたいと思います。(女性・70歳以上)
- ・私は健康食品でアロエジュースを毎日飲んでます。ガン予防です。ウコンを飲んでます。食のセミナーにも出ました。(女性・60歳代)
- ・以前は食生活にかなり気を使って食事を作っていました。子ども達が成長し、今年の4月には夫が他界したので、1人暮らしになってしまいました。食事を作る楽しみは、家族のために一生懸命に作れることです。1人の食事ではある物でよい、また、作っても余ってしまうとなると、食事作りが面倒になりがちです。私は、じん臓機能障害者です。今日から透折を受けています。食事塩分、水分、カロリー、リン、カリウム摂取など制限があります。食事を楽しむと言うより、何をどれだけ取れば良いかと言う毎日です。(女性・70歳以上)
- ・老人家庭のため、食も便利と安さに走り、他の関心は薄くなる。(男性・70歳以上)
- ・食品の安生確保施策や、食育施策を語る前に、自分自身の体調管理に留意していますが、夕食も家族全員が集り、楽しく語り、食事をしたいと思いますが、子ども達との生活サイクルが合わないのが現実です。健康は楽しい食事から作られると思いますので、毎回の食事は疎かにせず、食材の生産者に感謝し、食していきたいと思います。(男性・60歳代)
- ・食品の1/3ルールは見直すべきだと思う。まだ食べられる食品が、消費者に届くまでに廃棄されるのはおかしいと思うので。日本も米国のようにトランス脂肪酸を全面禁止にし、食品添加物(アスパルテームなど)も基準を見直すべきだと思う。生殖器に影響があると言われている。遺伝子組換え食品の基準は5%では高すぎだと思うので、各国のようにもっと厳しくするべきだと思う。テレビやSNSの情報は信用できないものが多いので、正しい情報を全ての人が得ることが出来る機会を増やす必要があると思う。(女性・20歳代)
- ・あまり普段関わらず、スーパーなどに売っていれば安心という感じで購入したりしていました。お店にでてるものすべてが安全という訳ではないのかなと考えてしまいました。(男性・40歳代)
- ・東京都で行っている、ひとり親の子どもへの食事の提供場を、群馬でも増やせばよいと思う。親の帰りまで食べずにいる子が多い。ファーストフードを小さい歳から与え過ぎだと思う。せっかく児童館があるのだから、休み中の食事を考えてほしい。親がゴロゴロしていて食事を作らない、食べられない子どもがいる現実。(女性・40歳代)
- ・これから高齢者が多くなり、食事を作るのが大変になる。子供食堂ならぬ高齢者食堂で、安くバランスのとれた食事を作ってくれる所があるといいなと思います。(女性・70歳以上)

